財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第301集

白井大宮II遺跡

渋川工業用水道天日乾燥床増設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

群　馬　県　企　業　局
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

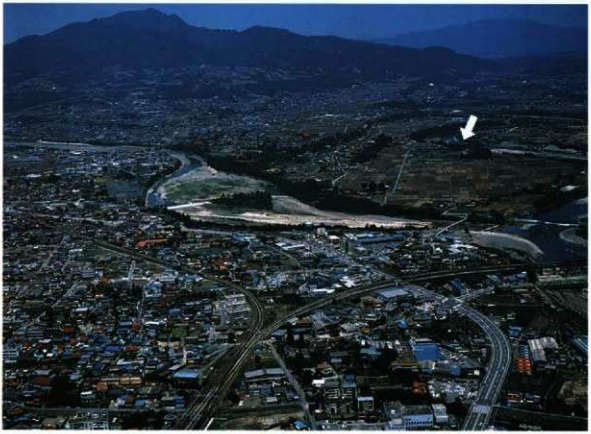
白井大宮II遺跡

（しろいおおみや）

渋川工業用水道天日乾燥床増設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

群馬県企業局
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



上空南から見た遺跡周辺　矢印が白井大宮Ⅱ遺跡、右手が利根川、左手が吾妻川、左手奥が子持山。

FP 下面　全景（南東から）円いマーキングは馬蹄跡

231号土坑(縄文時代早期)遺物出土状況（西から）

230号土坑(縄文時代中期)遺物出土状況（東から）

序

群馬県は全国でも屈指の火山県として知られ、白根山をはじめ『上毛三山』の赤城山、榛名山、妙義山の山々には、四季折々を通して県内外から多くの観光客が訪れています。

なかでも榛名山二ツ岳は、古墳時代の6世紀に大噴火を起こして、当時の子持村一帯を大量の軽石ですっぽりと覆ってしまいました。そのことを示す国指定史跡「黒井峯遺跡」は『日本のポンペイ』と称され、全国的にも有名です。

今回、群馬県企業局が渋川工業用水道事務所の用地内において、汚泥処理に必要な施設を建設することになり、その工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。それが「白井大宮II遺跡」です。

古墳時代に降り積もった軽石の下からは、夥しい数の馬の蹄跡と当時の人たちが歩いた道跡や放牧や畠に関係したと思われる畦状の遺構が発見されました。また、その下層からは縄文時代の人たちが残した配石遺構や集石土坑、それに石器の製作址などが見つかったのも大きな成果となりました。

ここにこの成果を一日も早く公開するために今年度整理事業を実施し、その成果がまとまりましたので、『白井大宮II遺跡』の報告書を刊行することになりました。

最後に調査ならびに報告書作成に際してお世話になりました群馬県企業局、同渋川工業用水道事務所、群馬県教育委員会、子持村教育委員会、地元関係者の方々には種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回報告書を上梓するに際しまして、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、あわせて本報告書が群馬県の歴史を解明するための資料の一助として活用されることを願い序とします。

平成14年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小野　宇三郎

例　言

1．本書は渋川工業用水道天日乾燥床増設工事に伴う白井大宮Ⅱ遺跡(しろいおおみやⅡ、SIROI−OHMIYA ⅡSAITE)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本事業に先立ち、隣接する施設内において貯水池関係に係わる埋蔵文化財発掘調査が実施され、その報告書として『白井大宮遺跡』が1993年３月に刊行されている。

2．白井大宮Ⅱ遺跡は、群馬県北群馬郡子持村大字白井372番地に所在する。遺跡名は、大字名に相当する「白井」と小字名に相当する「大宮」に因んで「白井大宮」と連記し、また、既に調査が終了し報告書が刊行されている「白井大宮遺跡」とを区別するために便宜的にローマ数字のⅡを付した。

3．発掘調査と整理事業は、群馬県企業局の委託を受けて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．調査及び整理の実施期間は以下のとおりである。

発掘調査　平成11年７月１日〜平成11年10月31日

整理事業　平成13年10月１日〜平成14年３月31日

5．調査面積　1,360㎡（延べ面積　8,160㎡）

6．(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の当時の調査体制は以下のとおりである。

理　事　長　小野宇三郎

常務理事　赤山　容造

管理部長　住谷　進

調査研究部長　神保　侑史

総務課長　坂本　敏夫

調査研究第３課長　小山　友孝

調査担当　山口逸弘〔(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　主幹兼専門員〕

根岸　仁〔　同　上　専門員〕

事務担当　笠原秀樹　須田朋子　小山健夫　吉田有光　柳岡良宏　岡嶋伸昌　大澤友治

7．本書作成の担当は以下のとおりである。

編　集　根岸　仁（編者以外の文責は文頭又は文末に記した）

本文執筆　小山友孝　山口逸弘　根岸　仁　橋本　淳　植田弥生〔株式会社パレオ・ラボ〕

(株)古環境研究所

遺構写真　山口逸弘　根岸　仁

遺物写真　佐藤元彦〔(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　主幹兼係長代理〕

遺物観察　山口逸弘(縄文土器前期・中期)　神谷佳明(須恵器)〔(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　主幹兼専門員〕関口博幸(石器)〔(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　主任調査研究員〕橋本　淳(縄文土器早期)〔(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　主任調査研究員〕小林　正(縄文土器後期)〔(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査研究員〕

遺物実測・図版作成　新井悦子〔整理嘱託員〕　佐子昭子〔整理補助員〕　渡辺フサ枝〔同〕

萩原鈴代〔同〕　阿部幸恵〔同〕　武永いち〔同〕

委託関係　遺構測量＝(株)測研　火山灰分析・植物珪酸体分析＝(株)古環境研究所

炭化材樹種同定＝株式会社パレオ・ラボ　石材鑑定＝飯島静男氏〔群馬県地質研究会〕

8．発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。また、発掘作業に従事していただいた方々には、敬称を記しませんが感謝いたします。
群馬県渋川工業用水道事務所　群馬県教育委員会(文化財保護課)　子持村教育委員会　石井克己氏(子持村教育委員会文化財室長)　早坂広人氏(富士見市教育委員会社会教育課)　作業員各位

9．出土遺物は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

凡　例

1．本報告書に使用した地勢図及び地形図は、国土地理院発行20万分の1「宇都宮」「長野」・5万分の1「前橋」「榛名山」「沼田」「中之条」・2万5千分の1「鯉沢」「金井」・子持村都市計画区域図2千5百分の1を等倍及び縮小して使用した。

2．挿図中の北方位は座標北を示す。

3．挿図中の「L＝○○m」は、断面図の水糸標高を示す。

4．本調査の記録に使用したグリッドは4m四方で、北東交点をその呼称としている。

5．本書に記載の榛名山を給源とする火山灰、軽石の正式名称、略称、降下年代及び土層断面図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr－S)　＝　FA＋FPF－Ⅰ　6世紀初頭(第1四半期頃)
榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr－Ⅰ)　＝　FP＋FPF－Ⅱ　6世紀中葉(第2四半期頃)

6．調査における遺構確認面と遺構は以下のとおりである。

1面	Hr－FP上面	(平安時代の竪穴住居跡と竪穴状遺構)
2面	Hr－FP下面	(古墳時代後期の畦状遺構、踏み分け道、馬蹄跡)
3面	黒褐色土中	(FPとFAとの間層でFAを母材として土壌化した腐植土、馬蹄跡)
4面	Hr－FA上面	(古墳時代後期の倒木痕、上面からの馬蹄圧痕)
5面	Hr－FA下面	(古墳時代後期の立木痕、土坑、馬蹄状の凹み)
6面	暗褐色土・褐色土中	(縄文時代早期の集石土坑、中期の土坑、後期の配石遺構、集石、早期～後期の遺物包含層)

7．挿図の縮尺は以下のとおりである。
全体図＝1:200・1:300・1:400・1:600・1:1200　　平面図・断面図＝1:40・1:60

8．遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。なお、遺物写真の図版倍率は、実測図の縮尺に準じた。
土器＝1：3　1：4　1：6　　石器＝1：1　1：3　1：4

9．土層断面及び遺物観察表中の色調は、旧農林水産省農林水産技術会議事務局監修　(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を参考にした。

10．遺構平面図・石器実測図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

道・畦　　焼土　　赤色塗彩　　擦面　　使用面　　節理

目　次

口　絵
序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
写真目次
第１図
第１章　発掘調査の経緯
１．調査に至る経緯……１
２．調査の方法と経過……１
３．基本土層……２
第２章　遺跡の環境
１．遺跡の立地と環境……５
２．周辺の遺跡と環境……７
周辺遺跡一覧……11
第３章　遺跡の概要
１．平安時代の遺構と遺物
◇１号竪穴住居……17
◇１号竪穴状遺構……19
◇２号竪穴状遺構……19
◇３号竪穴状遺構……20
２．古墳時代の遺構と遺物
（１）２面（Hr－FP下面）の調査……23
◆畦状遺構……23
◆踏み分け道……26
◆馬蹄跡……27
（２）３面（FPとFAに挟まれた
黒褐色土中）の調査……29
（３）４面（Hr－FA上面）の調査……29
（４）５面（Hr－FA下面）の調査……31
◇１号土坑……32
◆立木痕……32
◇１～７号立木痕……32
３．縄文時代の遺構と遺物
◇231号土坑……39
◇230号土坑……40
◇１号配石……41
◇２号配石……42
◇１号集石……42
◇222～229号土坑……43
◇２～24号土坑……46
◇縄文時代の出土遺物……53
第４章　自然科学分析
１．白井大宮Ⅱ遺跡の火山灰分析……89
（（株）古環境研究所）
２．白井大宮Ⅱ遺跡の植物珪酸体分析……92
（（株）古環境研究所）
３．白井大宮Ⅱ遺跡の炭化材樹種同定……98
植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）
第５章　まとめ
１．ＦＰ下面の成果と景観の復元……103
２．縄文時代の出土土器について……109

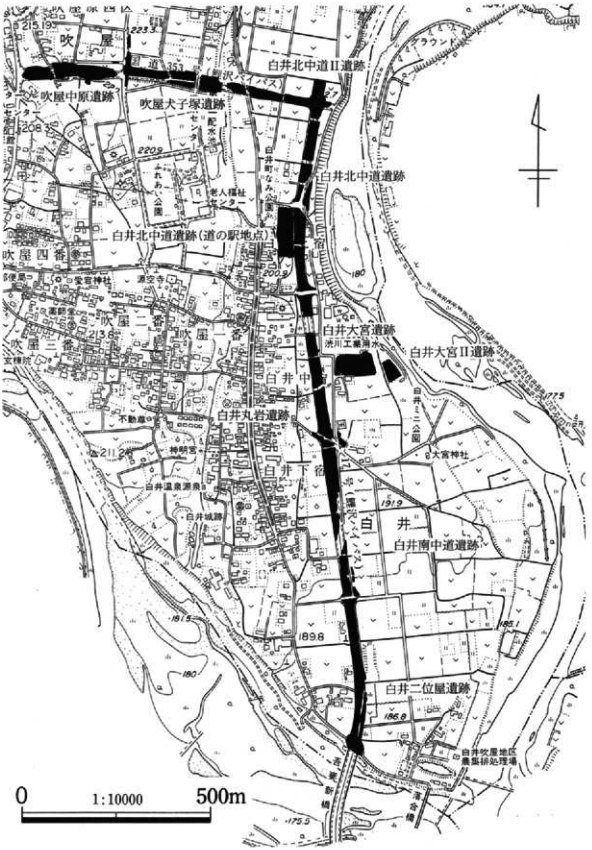
表１　群馬県、白井大宮Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析結果……94
表２　白井大宮Ⅱ遺跡出土（ＦＰ下出土）炭化材の樹種同定結果……99
表３　ＦＰ下面の馬蹄跡計測比較一覧……112
表４　ＦＰ下馬蹄跡計測値……112
表５　ＦＡ上馬蹄跡計測値……112
表６　ＦＡ下馬蹄状凹計測値……112
表７　出土石材の種類と割合……113
表８　石器の器種別点数と割合……113
遺物観察表
《土器》……117
《石器》……127
写真図版
《遺構》……写真図版１
《土器》……写真図版６
《石器》……写真図版18
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　白井大宮Ⅱ遺跡と鹿沢バイパス関連遺跡
第 2 図　基本土層柱状図……3
第 3 図　遺跡位置図……4
第 4 図　段丘面の分布と名称……5
第 5 図　Hr－FAとHr－FPの降下範囲……6
第 6 図　周辺の遺跡……8
第 7 図　1号竪穴住居……17
第 8 図　1面（FP上面）　全体図……18
第 9 図　1号竪穴状遺構……19
第10図　2・3号竪穴状遺構……20
第11図　2面（FP下面）　全体図……21
第12図　畦土層断面図……24
第13図　白井大宮・白井大宮Ⅱ遺跡遺構全体概念図…24
第14図　炭化材の分布と断面図……25
第15図　1・2号道土層断面図……26
第16図　馬蹄の形……27
第17図　4面（FA上面）グリッド配置図
　　及び馬蹄圧痕分布図……28
第18図　5面（FA下面）グリッド配置図・
　　立木痕・馬蹄状凹分布図……30
第19図　南壁土層断面図……31
第20図　1号土坑……32
第21図　1～3号立木痕……34
第22図　4～7号立木痕……35
第23図　6面　縄文土器・石器グリッド別分布……36
第24図　6面　全体図……37
第25図　231号土坑……40
第26図　230号土坑……40
第27図　1号配石……41
第28図　2号配石……42
第29図　1号集石……42
第30図　222～224号土坑……44
第31図　225～229号土坑……45
第32図　2～5号土坑……49
第33図　6～14号土坑……50
第34図　15～21号土坑……51
第35図　22～24号土坑……52
第36図　縄文時代の土器（1）……53
第37図　縄文時代の土器（2）……54
第38図　縄文時代の土器（3）……55
第39図　縄文時代の土器（4）……56
第40図　縄文時代の土器（5）……57
第41図　縄文時代の土器（6）……58
第42図　縄文時代の土器（7）……59
第43図　縄文時代の土器（8）……60
第44図　縄文時代の土器（9）……61
第45図　縄文時代の土器(10)……62
第46図　縄文時代の土器(11)……63
第47図　縄文時代の土器(12)……64
第48図　縄文時代の土器(13)……65
第49図　縄文時代の土器(14)……66
第50図　縄文時代の土器(15)……67
第51図　縄文時代の土器(16)……68
第52図　縄文時代の石器（1）……69
第53図　縄文時代の石器（2）……70
第54図　縄文時代の石器（3）……71
第55図　縄文時代の石器（4）……72
第56図　縄文時代の石器（5）……73
第57図　縄文時代の石器（6）……74
第58図　縄文時代の石器（7）……75
第59図　縄文時代の石器（8）……76
第60図　縄文時代の石器（9）……77
第61図　縄文時代の石器(10)……78
第62図　縄文時代の石器(11)……79
第63図　縄文時代の石器(12)……80
第64図　縄文時代の石器(13)……81
第65図　縄文時代の石器(14)……82
第66図　縄文時代の石器(15)……83
第67図　縄文時代の石器(16)……84
第68図　縄文時代の石器(17)……85
第69図　縄文時代の石器(18)……86
第70図　縄文時代の石器(19)……87
第71図　縄文時代の石器(20)……88
第72図　JU-84グリッドにおける土層柱状図……91
第73図　JU-84グリッドにおける
　　植物珪酸体分析結果……95
第74図　FP下出土炭化材の出土位置と樹種……101
第75図　白井北中道遺跡2区……104
第76図　白井南中道遺跡2区……104
第77図　白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区……105
第78図　白井北中道遺跡1区……105
第79図　白井丸岩遺跡3区……105
第80図　吹屋中原遺跡Ⅲ区……106
第81図　230号土坑出土土器……110

写真目次

《口絵カラー》
上空南から見た遺跡周辺
ＦＰ下面　全景（南東から）
231号土坑(縄文時代早期)遺物出土状況（西から）
230号土坑(縄文時代中期)遺物出土状況（東から）
基本土層写真(JU－84グリッド西壁) …… 3
《植物珪酸体(プラント・オパール)の
顕微鏡写真（1）・400倍》 ……96
1．ヒエ属型　試料名3
2．キビ族型　試料名3
3．キビ族型　試料名2
4．ヨシ属　試料名1
5．ススキ属型　試料名6
6．ススキ属型　試料名1
7．ウシクサ族Ａ　試料名3
8．メダケ節型　試料名3
《植物珪酸体(プラント・オパール)の
顕微鏡写真（2）・400倍》 ……97
9．メダケ節型　試料名5
10．ネザサ節型　試料名4
11．ネザサ節型　試料名2
12．クマザサ属型　試料名5
13．ミヤコザサ節型　試料名4
14．表皮毛起源　試料名2
15．多角形板状(コナラ属など)　試料名6
《白井大宮Ⅱ遺跡出土炭化材樹種》 ……102
1ａ　コナラ節(横断面) 試料5 bar : 0.5mm
1ｂ　コナラ節(接線断面) 試料5 bar : 0.5mm
1ｃ　コナラ節(放射断面) 試料5 bar : 0.5mm
《遺構写真》
写真図版1　1．調査区から子持山を望む（南から）
2．調査区から椚名山二ツ岳を望む（北東から）
3．重機による表土掘削作業風景（北西から）
4．自然科学分析サンプリング風景（北東から）
5．ＦＰ上面　1号竪穴住居掘方全景（西から）
写真図版2　1．ＦＰ上面　1号竪穴状遺構遺物出土状況（南西から）
2．ＦＰ上面　2号竪穴状遺構全景（南から）
3．ＦＰ上面　3号竪穴状遺構遺物出土状況（北から）
4．ＦＰ除去作業風景（北東から）
5．ＦＰ下面　全景（北から）
写真図版3　1．ＦＰ下面　畦状遺構近景（北西から）
2．ＦＰ下面　道と畦に残る馬蹄跡（南西から）
3．ＦＰ下面　ＦＰによる1号道堰設状況（南東から）
4．ＦＰ下面　炭化材検出状況（南東から）
5．ＦＰ下面　植物痕検出状況（東から）
6．ＦＰ下面　2号立木痕凹み状況（北東から）
7．ＦＡ上面　グリッド掘り下げ状況（南から）
8．ＦＡ上面　上面からの馬蹄圧痕（南から）
写真図版4　1．ＦＡ上面　風倒木痕検出状況（南西から）
2．ＦＡ下面　グリッド配置状況（北から）
3．ＦＡ下面　遺構検出作業風景（南東から）
4．ＦＡ下面　黒色土に残る馬蹄跡（南東から）
5．ＦＡ下面　1号土坑土層断面（南から）
6．ＦＡ下面　1号土坑全景（南から）
7．ＦＡ下面　1号立木痕土層断面（南から）
8．ＦＡ下面　3号立木痕土層断面（南東から）
写真図版5　1．ＦＡ下面　7号立木痕土層断面（南から）
2．6面　231号土坑遺物出土状況（東から）
3．6面　231号土坑全景（南から）
4．6面　230号土坑遺物出土状況（南から）
5．6面　調査区南半　遺物出土状況（南東から）
6．6面　1号集石遺物出土状況（東から）
7．6面　1号配石遺物出土状況（北東から）
8．6面　調査区南半　土坑群検出状況（北から）
《遺物写真》
写真図版6　平安時代・縄文時代の土器(1)
写真図版7　縄文時代の土器(2)
写真図版8　縄文時代の土器(3)
写真図版9　縄文時代の土器(4)
写真図版10　縄文時代の土器(5)
写真図版11　縄文時代の土器(6)
写真図版12　縄文時代の土器(7)
写真図版13　縄文時代の土器(8)
写真図版14　縄文時代の土器(9)
写真図版15　縄文時代の土器(10)
写真図版16　縄文時代の土器(11)
写真図版17　縄文時代の土器(12)
写真図版18　縄文時代の石器(1)
写真図版19　縄文時代の石器(2)
写真図版20　縄文時代の石器(3)
写真図版21　縄文時代の石器(4)
写真図版22　縄文時代の石器(5)
写真図版23　縄文時代の石器(6)
写真図版24　縄文時代の石器(7)
写真図版25　縄文時代の石器(8)
写真図版26　縄文時代の石器(9)
写真図版27　縄文時代の石器(10)
写真図版28　縄文時代の石器(11)
写真図版29　縄文時代の石器(12)
写真図版30　縄文時代の石器(13)
写真図版31　縄文時代の石器(14)



第１図　白井大宮Ⅱ遺跡と鯉沢バイパス関連遺跡

第１章　発掘調査の経緯

１．調査に至る経緯

平成11年４月28日(水)、群馬県教育委員会文化財保護課に、群馬県企業局水道課より、群馬県北群馬郡子持村大字白井371番地に所在する群馬県渋川工業用水道事務所用地内において、天日乾燥床増設増床工事事業の着工計画に伴う事前協議と試掘調査の依頼があった。

既に調査対象地は同年４月26日(月)付けで、地権者と企業局との間で用地に関しての売買契約が締結され、同年５月12日(水)には、文化財保護課文化財第１係の担当者２名の課員が、現地での試掘調査を実施した。

その結果、対象地である1,360㎡の建設予定地に２本のトレンチを設定して掘削したところ、榛名山二ツ岳を給源(６世紀中頃)とする降下軽石(Hr－FP)直下から、古墳時代後期に相当する馬の放牧地跡が確認され、該期以外にも縄文時代の文化層の存在が明らかになった。この試掘結果により対象地は遺跡地と認定され、工事に先立つ埋蔵文化財の記録保存措置が必要となった。

試掘結果は、同年５月13日(木)付で文化財保護課長名で県企業局側に伝えられ、同年６月８日(火)に、企業局、保護課、事業団の三者合同の打ち合わせ会議が、渋川工業用水道事務所で開催された。この会議の中で、工事工程計画が委託者である水道課から提示され、経費算定をしたところ、調査期間は、同年７月から開始して同年10月末日までの４ヶ月は最小限必要という回答が保護課からなされた。この回答に企業局側が再検討を要したため、同年６月22日(火)に、県企業局の大渡町庁舎で再度調整会議が開かれた。

協議の結果、算定どおり同年７月１日(木)より４ヶ月間の予定で本調査が開始されることになり、地元子持村教育委員会の協力を得て、事業団の発掘班１班、担当者２名が急遽発掘調査に対応することとなった。(小山友孝)

２．調査の方法と経過

調査の方法　調査は単独の調査区(1,360㎡)を対象にして実施された。調査面は、１面(ＦＰ上面)、２面(ＦＰ下)、３面(ＦＰとＦＡとの間層)、４面(ＦＡ上面)、５面(ＦＡ下面)、６面(暗褐色土・褐色土)のそれぞれの文化層で、延べ面積8,160㎡の多面調査である。

調査にあたっては、概ね以下の方法を踏襲した。

（１）調査グリッドの基準点測量は、北群馬郡子持村大字白井字中宿所在の鋲杭を基準として、日本測地系に基づく国家座標系(Ｘ＝56370.995，Ｙ＝－72957.312)と平行に設定した。方眼杭を設置するために行った測量作業は、鯉沢バイパスの基準点Ｔ.19とＴ.20を与点として使用し、現場内にトラバー点(Ｔ.19-1・Ｓ.1)を選定しトラバー測量により座標値を求めた。次に、方眼杭設置については先に設置した２点トラバー点を基に２点(ＫＡ－81及びＪＮ－81)の座標値を求め調査区内に逆計算により打設した。この２点から調査区内に方眼杭を４ｍグリッドで12ｍピッチに打設した。水準点(ベンチマーク)は、鯉沢バイパスの水準点、BM.４(Ｈ＝193.401)からＳ.１ｍまで直接水準測量を行い、各ベンチマーク(Ｈ＝194.500，Ｈ＝194.000)を２点設置した。

（２）遺構測量にはメッシュ、平板を使用し、住居・土坑・配石・遺物・セクション・エレベーション等は１／20・１／40作図を原則とした。また、広範囲に及ぶ測量は業者委託としたが、できる限り現場内の手実測を心掛けた。

（３）遺構の写真撮影には中型カメラによる35㎜サイズのモノクロ・リバーサル写真、及びブローニー(６×７)サイズのモノクロ写真を使用した。また、撮影対象に応じて、ローリングタワー・高所作業車を使用した。

（４）遺構番号は、各調査面から種別に通し番号を付した。また、遺物の取り上げは原位置をとどめるものについては、その都度番号を付し図面上に記録した。

（５）馬蹄痕の計測にあたっては、前蹄と後蹄の形状の違いを踏まえ、蹄の後ろ側にある切れ込み(蹄叉)が明瞭に判別できるものだけを馬蹄として認定した。

（６）本遺跡では６面の文化層を確認しており、各文化層の確認には、２種類の指標テフラ(ＦＰ・ＦＡ)を鍵層とした。

（７）縄文時代の遺物の取り上げについては、６面(暗褐色土・褐色土)の遺構確認面を上・中・下位に分層し、グリッドごとに掘り下げて遺物の位置とレベルを記録した。

（８）調査区法面は、ＦＰの崩落を防ぐために45°の傾斜角を遵守し、作業の安全には万全を期した。

調査の経過　調査は平成11年５月の試掘段階で得られた土層中の指標テフラ(ＦＰ・ＦＡ)を手掛かりにして、１面のＦＰ上面までの表土掘削と２面のＦＰ下面までの経石除去作業(ＦＰ中の遺構、遺物に細心の注意を払いながら)、５面(ＦＡ下面)から６面(暗褐色土・褐色土)にかけての遺物包含層までの掘り下げ作業は、重機を用いて行い、精査を要する遺構確認作業と個別遺構の掘削等はすべて手作業で行った。

調査及び作業工程の概要は以下のとおりである。

７月第１週

前遺跡からの調査器材等の搬入及び調査のための準備作業、調査区の設定、１面(ＦＰ上面)遺構確認のための重機掘削

７月第２週

１面(ＦＰ上面)の住居調査、２面(ＦＰ下面)の遺構確認作業と馬蹄跡調査、ＢＭ杭設置

７月第３週

１面(ＦＰ上面)の住居遺物取り上げ及び図面作成及び２面(ＦＰ下面)の遺構確認作業

７月第４・５週

２面(ＦＰ下面)の馬蹄跡検出及び計測、畦状遺構、道跡調査、地上測量(委託)、３面(黒色土中)、４面(ＦＡ上面)遺構確認作業

８月第１週

２面(ＦＰ下面)の調査区全景写真撮影、炭化材調査、４面(ＦＡ上面)までの掘り下げ作業、火山灰分析・植物珪酸体分析(委託)

８月第２週

４面(ＦＡ上面)、５面(ＦＡ下面)の遺構確認作業、炭化材樹種同定(委託)

８月第３週

４面(ＦＡ上面)、５面(ＦＡ下面)の馬蹄跡調査及び計測、立木痕調査、グリッド北壁・南壁セクション実測

８月第４・５週

６面(暗褐色土・褐色土)の縄文時代遺物包含層調査及び遺物分布図実測・取り上げ、グリッド杭打設(委託)

９月第１・２週

６面(暗褐色土上位)遺物取り上げ作業(一部委託)、遺構確認作業及び配石遺構調査、土坑実測

９月第３・４・５週

６面(褐色土中位)遺構確認作業、遺物分布図実測及び取り上げ作業

10月第１・２週

６面(褐色土中・下位)遺構確認作業、遺物分布図実測及び取り上げ作業

10月第３週

６面(褐色土下位)遺構確認作業、遺物分布図実測及び遺物取り上げ作業

10月第４週

６面(褐色土下位)遺構確認作業、遺物分布図実測及び遺物取り上げ作業、土坑写真撮影及び実測

10月第５週

調査終了に向けての調査区整地作業、次調査遺跡への引っ越しのための器材整理と引っ越し作業、調査終了及び調査事務所撤収準備

３．基本土層

本遺跡は、利根川右岸の河岸段丘中位の白井面に位置している。土層の最下層面は、河岸段丘砂礫層

を基盤として、下位から上位に向かって段丘砂礫層、暗褐色土、褐色土(漸移層)、暗褐色土、黒色土、火山灰(ＦＡ)、黒褐色土、軽石(ＦＰ)、黒褐色土(表土)の順に堆積している。黒色土の層中には、３世紀末に浅間山を給源として降下堆積した浅間Ｃ軽石(As－Ｃ)が僅かに認められ、その下位の暗褐色土の層中からも、縄文時代に浅間山から噴出したと考えられる軽石が火山灰分析によって確認されている。

また、指標テフラであるHr－FAは、厳密には12のユニットに分層できるが、そのうち本遺跡での土層断面で確認されたのは、Ｓ－１(上部)：細かく成層した褐色細粒火山灰層、Ｓ－５：灰色火砕流堆積物、Ｓ－８：白色軽石層、Ｓ－９：褐色細粒火山灰層、Ｓ－10：桃灰色火砕流堆積物、Ｓ－11：褐色細粒火山灰層の６ユニットである。Hr－FPに関しては、本遺跡においては、７ユニットが部層区分でき、単層区分では、33のユニットにそれぞれ対比できる。そして最下層の桃灰色軽石層によって、ＦＰ直下の凹凸遺構面が良好に保存されていた。

本遺跡における基本土層柱(JU－84グリッド西壁)と各層の説明は以下のとおりである。

第２図　基本土層柱状図

《基本土層》

Ⅰ　表土　黒褐色～暗褐色を呈する。ＦＰ混じりの耕作土。

Ⅱ　黒褐色土　ＦＰを多量に含む。平安時代の遺構に堆積する。今回の調査では、As－Ｂは確認できなかった。

Ⅲ　Hr－FP　ＦＰの一次堆積層。φ0.1～５cmのＦＰを主体とする。上層はやや褐色味を帯びる。最下層は桃灰色軽石層。直上が平安時代の遺構確認面。

Ⅳ　黒褐色土　ＦＰとＦＡとの間層で、約20～30年かけてＦＡを母材として土壌化してできた腐植土層。上面が６世紀中葉(古墳時代後期)の旧地表面。上面と層中に炭化材・炭化物を含む。

Ⅴ　Hr－FA　ＦＡの一次堆積層。暗褐色～純褐色を呈す。褐色土粒・炭化物を所々に含む。軟質。火砕流堆積物を層中に含む。

Ⅵ　黒色土　軟質土。上層にＦＡ粒が散見する。黄色～橙色粒(As－Ｃ)を含む。上面が６世紀初頭(古墳時代後期)の旧地表面。

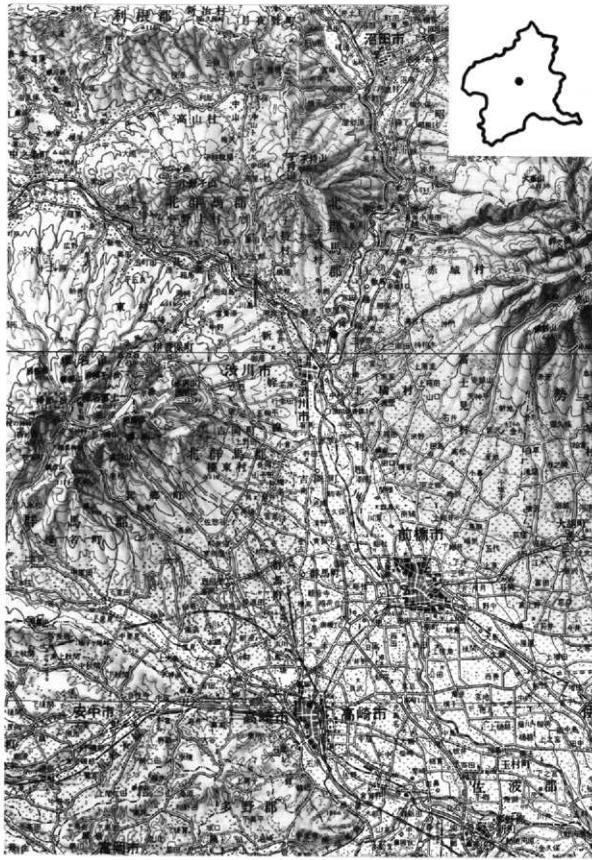
Ⅶ　暗褐色土　淡色黒ボク土。縄文時代中期から後期の遺物包含層。縄文時代に浅間山から噴出したと思われる軽石を含む。

Ⅷ　褐色土　ローム漸移層。縄文時代早期から前期の遺物包含層。

Ⅸ　暗褐色土　やや暗い。褐色土塊を含む。大型自然礫・小円礫を混在する。

Ⅹ　砂礫層　約１万年前に利根川によって形成された河岸段丘(白井面)の基盤層。

基本土層写真(JU－84グリッド西壁)



第３図　遺跡位置図　　国土地理院１：200,000「長野」「宇都宮」使用

第２章　遺跡の環境

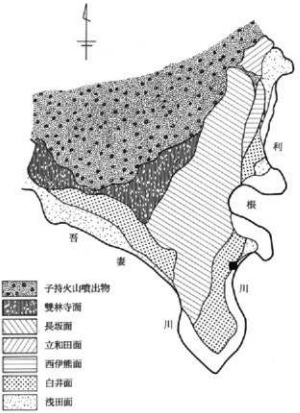
１．遺跡の立地と環境

遺跡の位置と地形　関東平野の北西部に位置する群馬県は、中央部に二つの成層火山を有する。東に赤城山(1,827.6m)、西に榛名山(1,449m)、ともに活火山に指定されその裾野は長い。この両火山を分断する形で『坂東太郎』の異名をとる利根川が南流する。利根川は渋川市と赤城村に架かる大正橋の上流部付近で、北西方向から流れ込む吾妻川と合流し、今から遡ること約２万年前、浅間山の山体崩壊に起因する火山泥流堆積物(前橋泥流)の流下によって、扇状地の前橋台地(洪積台地)を形成した。

白井大宮Ⅱ遺跡は、その利根川と吾妻川が合流する地点約1.5km上流の利根川右岸の河岸段丘上に位置する。更新世末期に利根川から離水したこの段丘面は、低位段丘の「浅田面」に次ぐ中位段丘の「白井面」と呼ばれ、他の河岸段丘と比べ形成時期も「浅田面」に次いで新しく、段丘砂礫層上に僅かにロームが堆積している状況からみて、その形成時期は約１万年前と推定される。

本遺跡の標高は193m、利根川の現河床との比高は約15mを測る。また、調査区から南西方向に位置する榛名山ニツ岳山頂までは、直線距離にして約10.5kmである。

子持村の火山噴出物と各河岸段丘面の概要は以下のとおりである。(『子持村誌』上巻1987参照による)



第４図　段丘面の分布と名称（『子持村誌』上巻より）

(１)　子持火山噴出物

火山活動に伴う泥流堆積物。村の南西から北西にかけての火山麓扇状地を形成する。形成時期は、雙林寺面よりも古いと推測される。

(２)　雙林寺面

最上位の段丘面であり、標高約250～300m。子持村中学校付近での吾妻川との比高は約65m、利根川との比高は約60mを測る。黒井峯遺跡、西組遺跡、押手遺跡等が所在する。形成時期は、時代を知るために必要な中部ローム層以下が、粘土化しているために明確ではないが、段丘面が長坂面よりも僅かに高いことからみて、おそらく沼田市街地がのる沼田面とほぼ同時期と推定される。

(３)　長坂面

村一番の占有面積をもつ段丘面。北端部での利根川との比高は約80m、南端部で約37mを測る。吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡、田尻遺跡等が所在する。形成時期は、中部ローム層の下に下部ローム層の一部が堆積している状況からみて、約６～７万年前と推定される。

(４)　立和田面

立和田付近にある東西100m、南北50mほどの規模の小さい段丘である。段丘面の高さは、唐沢を挟んだ南側の長坂面と西伊熊面のほぼ中間にあたる。どちらかの段丘の延長の可能性があるが、詳しいこ

とは分かっていない。

（５）　西伊熊面

村の一番北側に位置し、標高は約220～240mを測る。段丘面の最大幅は約150m、長さは約1.5km。利根川との比高は、北端部で約40m、南端部で約15mを測る。形成時期は、上部ローム層が堆積している状況からみて、約２万２千年前と推定される。

（６）　白井面

標高は約190～210m。白井大宮Ⅱ遺跡をはじめとして、白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡、白井北中道Ⅱ遺跡、白井大宮遺跡、渡屋遺跡等が所在する。利根川との比高は約15mを測る。前述したように、形成時期は、段丘砂礫層上の薄いロームの堆積状況からみて、約１万年前と推定される。

（７）　浅田面

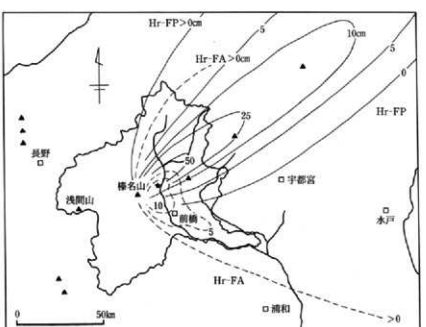
標高は約180m前後。利根川との比高は数メートルと一番低い。形成時期は、段丘礫層上にローム層が全く認められないことからみて、数千年前と推定され一番新しい。

遺跡が所在する子持村の北縁には、村と県北部の中心をなす沼田市とを隔てて子持山(1,296m)がそびえ、今なお残存する極小カルデラからは、約50～60万年前、成層火山であった面影を窺い知ることができる。

また、村の南東斜面には、前述したように火山活動に伴う泥流堆積物によって火山麓扇状地が形成され、子持五井(黒井、白井、赤井、青井、黄井)に代表されるように、谷頭の湧水を水源にして現在でも水田経営が行われている。

現耕作土下では、場所によっては層厚約２mを測るＦＰの一次堆積層が村の至る所で認められる。そしてこのＦＰの降下堆積こそが、ある日の「黒井峯むら」を火山災害の名のもとにそのままパックした被災原因であり、その一方では、古墳時代後期の集落の復元を可能としたばかりでなく、新鮮で確かな情報を考古学に提供し、さらには、経量ブロックの貴重な材料として、最近まで村の産業に貢献してきた古代の偉大なる産物なのである。

榛名山は、今から約35万年前に活動を開始したと



第５図　Hr-FAとHr-FPの降下範囲
(町田　洋・新井房夫『火山灰アトラス―日本列島とその周辺―』1992―一部加除筆)

される標高1,449mの複式火山である。噴出源は明らかでなく、火山灰の厚さも薄いために通常の路頭ではほとんど認めることはできないが、5世紀に白色軽石混じりの細粒火山灰の榛名有馬火山灰（Hr－AA）を榛名山東側一帯に降下させていることが、子持村黒井峯遺跡、渋川市の有馬条里遺跡、有馬遺跡、高崎市日高遺跡での発掘調査で確認されている。

また、6世紀には、二ツ岳を給源として二度（6世紀初頭・6世紀中葉）にわたって火砕流を伴う大爆発を起こしている。その驚異を象徴するかのように、その後の復興に尽力した人々によって、榛名山は「イカホ（怒る峰）」と呼ばれた。

その一度目の噴出物は、Hr－S（榛名ニツ岳渋川テフラ）＝FA（二ツ岳アッシュ）＋FPF－I（二ツ岳第一軽石流堆積物）と呼ばれ、主として県南東部へ、二度目の噴出物は、Hr－I（榛名ニツ岳伊香保テフラ）＝FP（二ツ岳パミス）＋FPF－II（二ツ岳第二軽石流堆積物）と呼ばれ、主として県北東部へ飛散し、その距離は、FAは約240km離れた福島県相馬市で、FPは約280km離れた宮城県多賀城市にまでそれぞれ達していることが、発掘調査によって既に明らかになっている。

FAとFPの噴火の季節は、FAが高崎市御布呂遺跡、FPが渋川市有馬条里遺跡の埋没水田の状況から、ともに初夏（六月頃）と考えられており、FAとFPの噴火の間隔は、新井房夫氏によって、尾瀬ヶ原における泥炭層の堆積速度の分析結果から、約20～30年と算出されている。

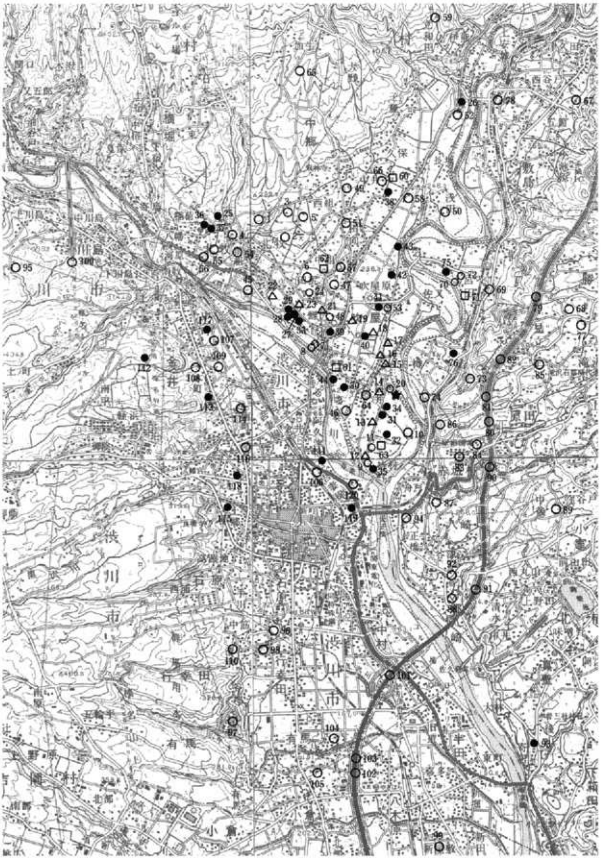
2．周辺の遺跡と環境

本遺跡周辺地域の発掘調査は、昭和57年来の子持村教育委員会関係の調査と当事業団関係の調査が数多く実施され、既に刊行されている報告書も多い。特に子持村白井地区周辺では、一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査や国道353号道路改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が、平成2年度から子持村教育委員会の協力を受けて当事業団により実施され、平成3年度から調査が開始された国道353号関係の事業においては、現在もなお調査が継続されている路線区がある。

そもそも「黒井峯遺跡」が全国的に注目を集めたのは、昭和61年1月1日の「黒井峯遺跡」の新聞報道以来であり、僅か三ヶ月の間に全国から約3万人の見学者を集めたことが、『軽石下より古墳時代の集落を正確に復元できる遺跡』としての物凄さを如実に物語っている。勿論、この軽石というのは、古墳時代後期に比定される榛名山二ツ岳を給源とした二度にわたる噴火のうちの一つ、プリニー式噴火によるFPの降下堆積のことである。

平成2年7月、子持村大字白井字北中道に所在する白井北中道遺跡VI区の調査において、新たな発見がもたらされた。FP直下の地表面から無数に点在する円い凹みが検出され、その凹みを調べてみると、何か重量のあるものが押圧した痕跡であり、おそらくは奇蹄目の動物の足跡と思われた。その後大江正直氏、西中川俊氏、宮崎重雄氏などの動物学の専門家に鑑定してもらった結果、馬の蹄跡の特徴をよく留めていることが判明したのである。古墳時代には、古墳から出土する馬埴埴輪や馬具によって、多くの馬が存在していたことは以前から知られていたが、実際に馬が多数飼育されていた場所が見つかったのは全国でも例がない。そしてこの古墳時代の夥しい数の馬蹄跡と区画を想起させる畦状遺構の発見報道によって、再び子持村は全国から注目を集め、現地説明会には県内外から大勢の見学者が訪れた。

その後、馬蹄跡と畦状遺構から推測して、農耕馬の存在や当時の遺跡地周辺は区画化された古代の「牧」であったのではという仮説が立てられた。そして畦状遺構は馬を囲うための柵木列の根固めとする説（下城、1991）、この説をさらに発展させ馬の飼育地を想定する説（前沢、1991）が論じられたが、馬蹄跡、畦状遺構の他に「牧」を囲う柵列跡、厩跡、溝、土墨等の馬と直接関係する遺構の検出や、馬具類などの馬に直接関係する遺物の出土も今なおみておらず、現時点では、馬の放牧地であったであろうという概念にとどまっている。



第６図　周辺の遺跡　　国土地理院 1：50,000「沼田」「中之条」「榛名山」「前橋」使用

「牧」に関しては、隣接する渋川市半田中原・南原遺跡で、奈良～平安時代にかけての大集落と溝と土塁に囲まれた広範囲な空閑地が調査によって確認されており、この地域が『延喜式』に記述されている「有馬島牧」の推定地だとすれば、近接する場所において、既に馬の飼育が古墳時代から継続して行われていたとしても何ら不思議ではなく、本遺跡周辺地域が馬の放牧地であった蓋然性が高いと言えよう。

平成３年度の国道353号線に伴う吹屋犬子塚遺跡の調査では、ＦＰ直下から、波状に畝立てを残す畠跡が検出された。このことから、放牧地と畠の因果関係をもとに諸説論議がなされ、畠と鞭跡との関連を、「休閑放牧を伴う輪換農法」と捉え、農耕形態を施肥技術の未熟段階での「牧畑」農法と酷似したものとの見解をとる説(能登、1993)、畦状遺構を畠に伴うものと捉え、放牧地の一部が畠として利用され、区画ごとに放牧-畑-放牧を繰り返す土地利用の変遷を想定する説(高井、1993)、民族例から畦状遺構と畠を関連づけ、粗放な農営形態としての耕地遺跡を想定する説(洞口、1997)が挙げられ、どれも妥当性を見出せるものの決定的な確証は得られていない。その理由として、白井地区では数多くの発掘調査がなされているものの、放牧地と言う広大な範囲を対象とする検証には、あまりにも調査範囲が部分的であるため、解明につながる情報が画一化していることも否めない。これも新たな発見が待たれるところである。

本遺跡周辺地域における時代ごとの遺跡の概要は以下のとおりである。(( )内の番号は、地図・表番号に対応)

旧石器時代　子持村の押手遺跡(1)、吹屋犬子塚遺跡(18)、吹屋中原遺跡(19)、赤城村の勝保沢中ノ山遺跡(79)、中畦遺跡(80)、諏訪西遺跡(81)、見立溜井遺跡(82)、濁澤石器時代遺跡(85)で該期の石器群・土坑が確認され、北橋村の房谷戸遺跡(90)では石器製作址が検出されている。

縄文時代　草創期は、子持村白井北中道遺跡(15)で隆起線文土器と有舌尖頭器、子持村の白井南中道遺跡(13)でも押圧縄文土器、押型文土器の出土が確認されている。また、北橋村の房谷戸遺跡(90)、北町遺跡(92)、赤城村見立溜井遺跡(82)では、遺構は確認されてはいないものの該期の遺物が出土している。早期は、赤城村三原田城遺跡(84)、渋川市の空沢遺跡(96)、行幸田山遺跡(97)、北橋村分郷八崎遺跡(91)で遺物が確認されている。前期は、子持村の白井南中道遺跡(13)、白井丸岩遺跡(14)、白井大宮遺跡(20)、黒井峯遺跡(2)、押手遺跡(1)、赤城村勝保沢中ノ山遺跡(79)、渋川市の中筋遺跡(98)、半田中原・南原遺跡(99)で該期の遺構、遺物が出土している。中期は、子持村吹屋犬子塚遺跡(18)、赤城村三原田遺跡(83)、渋川市空沢遺跡(96)、北橋村房谷戸遺跡(90)で該期の遺物が出土しており、後期・晩期は、子持村押手遺跡(1)の環状盛土遺構を初めとして赤城村の三原田遺跡(83)、瀧澤石器時代遺跡(85)、渋川市の空沢遺跡(96)、半田中原・南原遺跡(99)で該期の遺構、遺物が出土している。

弥生時代　前期から中期にかけての遺跡は、再葬墓が確認された渋川市南大塚遺跡(100)や子持村押手遺跡(1)が挙げられ、押手遺跡では遠賀川系の土器も出土している。また、竪穴住居跡が確認された遺跡として、渋川市の中村遺跡(101)、有馬条里遺跡(103)がある。後期になると遺跡数が増加し、方形周溝墓が確認されている渋川市有馬条里遺跡(103)、他に住居内から鉄剣が出土した北橋村田尻遺跡(94)、円形周溝墓が確認された渋川市の空沢遺跡(96)、中村遺跡(101)、住居跡が確認された渋川市の中筋遺跡(98)、有馬条里遺跡(103)、後田東遺跡(104)、有馬廃寺(105)、有馬遺跡(102)がある。また、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡では、北関東西部を代表する「樽式土器」で標識遺跡となった赤城村樽遺跡(86)が挙げられる。

古墳時代　榛名山二ツ岳の二度にわたる噴火(ＦＡ・ＦＰ)以前の遺跡としては、子持村の黒井峯遺跡(2)、八幡神社遺跡(47)、竪穴住居跡と榛名有馬火山灰(Hr－AA)に埋もれた畠跡が確認された渋川市の

有馬条里遺跡(103)や有馬遺跡(102)があり、行幸田山遺跡(97)でも前期の古墳が調査されている。

ＦＡ降下時期の代表的な遺跡としては、ＦＡに伴う火砕流によって被災集落として知られる渋川市の中筋遺跡(98)、ＦＡ下の畠跡が確認されている渋川市の有馬遺跡(102)、有馬条里遺跡(103)、ＦＡ下の水田跡、畠跡が調査された渋川市中村遺跡(101)、ＦＡによって覆われた古墳として知られる渋川市の金井前原古墳(113)、坂下古墳群(111)、東町古墳(119)、石原東古墳群、大崎古墳群、空沢遺跡(96)の初期群集墳がある。また、ＦＡ降下堆積以降に造られた円墳として、袖無型横穴式石室をもつ子持村中ノ峯古墳(25)が挙げられる。

ＦＰ降下時期の遺跡としては、竪穴住居跡の他に平地式住居、棚列、道跡、水場跡、畠跡が復元可能な形で発見された子持村の黒井峯遺跡(2)、家畜小屋が初めて発見された西組遺跡(3)、集落跡が確認されている八幡神社遺跡(47)があり、子持村での最初の発掘調査で初期の畠調査となった館野遺跡(5)の他にも、白井北中道遺跡(15)(16)、吹屋犬子塚遺跡(18)、吹屋中原遺跡(19)、田尻遺跡(6)、北牧相ノ田遺跡(54)が挙げられる。また、吾妻川を挟んで隣接する渋川市にも該期の遺跡は多く、有馬条里遺跡(103)、中村遺跡(101)、石原東遺跡、八木原沖田Ⅲ遺跡がある。

ＦＰ降下後に構築された古墳では、伊熊・有瀬古墳(26)、白井古墳群(32)、吹屋Ⅰ(27)・Ⅱ(28)・Ⅲ(29)号墳、丸子山遺跡(4)、大塚(稲荷塚)古墳(42)があり、子持村中ノ峯古墳(25)では、ＦＰ堆積後に軽石を除去して追葬したことが確認されている。他にも赤城村弁天塚古墳(76)、渋川市の金井古墳(112)、丸山古墳(117)、虚空蔵塚古墳(118)等が該当する。

奈良・平安時代　本遺跡周辺では該期の遺跡が数多く所在する。子持村の白井二位屋遺跡(11)(12)、白井南中道遺跡(13)を始めとして、白井城南郭遺跡(46)では竪穴住居が確認され、渋川市の有馬条里遺跡(103)、中村遺跡(101)、半田中原・南原遺跡(99)でそれぞれ集落跡が確認されている。前述したように、半田中原・南原遺跡では、推定６万㎡以上の範囲を取り囲むように、幅約1.5m前後、深さ0.6mの溝と土塁が確認されており、範囲内には遺構が見当たらないことから、奈良時代の「牧」と考えられている。

また、半地下式の竪形炉をもつ製鉄跡が確認された渋川市金井製鉄遺跡(116)、精錬炉遺構が確認された子持村白井二位屋遺跡(12)や波屋遺跡(10)、古代寺院跡と推定される渋川市有馬廃寺(105)が該期の代表的遺跡として挙げられる。

中・近世　中世の遺跡に、15世紀中頃に長尾氏によって築城され、17世紀初頭に廃城となった子持村の白井城跡(61)がある。他にも仁位屋城の郷の一部が確認されている白井二位屋遺跡(12)、該期の土坑が検出された白井南中道遺跡(13)、白井城の東遠構・北遠構の一部が確認されている白井北中道遺跡(15)が挙げられる。

近世を代表する遺跡としては、畑跡、水田跡が確認された渋川市東町関下遺跡(120)や水田や畑以外に水路、道、川が検出された中村遺跡(101)が挙げられる。特に中村遺跡では、天明３年(1783年)の浅間山の噴火による土石流の下から、畝立てされた畑の中から、栽培植物である大豆の鞘が緑色をしたままの状態で検出され、当時話題になったのは記憶に新しい。

なお、近世を代表する文化遺産に子持村の白井宿(64)があり、近世の町並みを今なお偲ばせる宿場町(市場町)として保存されている。

<参考文献>

原田恒弘・能登　健「火山災害の季節」『群馬県立博物館紀要』第５号　群馬県立博物館　1984

『子持村誌』上巻　子持村　1987

『火の山はるな　火山噴火と馬井峯むらのくらし』群馬県立博物館　1990

『馬井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会　1990

下城　正「古墳時代の馬の飼育地「白井北中道遺跡」」『群馬文化』第226号　群馬県地域文化研究協議会　1991

前沢和之　「上野国の馬と牧」『群馬県史』通史編2　群馬県史編さ

ん委員会　1991
町田　洋・新井房夫　『火山灰アトラス―日本列島とその周辺―』東京大学出版会　1992
能登　健・麻生敏隆「軽石直下で検出された馬蹄跡の性格について」『白井大宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
石坂　茂「埴状遺構の機能と性格について」『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊（古代・中近世編）(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996
新井房夫編『火山灰考古学』古今書院　1996
高井佳弘「ＦＰ下面の土地利用について」『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊（古代・中近世編）(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996
井上昌美「ＦＰ下面調査の成果と課題」『白井遺跡群』―古墳時代編―　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
洞口正史「馬埴遺跡としての白井遺跡群」『白井遺跡群』―古墳時代編―　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
能登　健「白井遺跡群のプラントオパール分析について」『白井遺跡群』―古墳時代編―　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
高井佳弘「馬のいる風景―日本古代における馬の飼育の景観復元―」『研究紀要』18　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000
千賀　久「古墳時代の牧と馬飼集団」『季刊　考古学』第76号　雄山閣　2001

周辺遺跡一覧

●＝古墳　□＝城跡　△＝国道17号(旧沢バイパス)関連遺跡
▲＝国道353号関連遺跡　◎＝渋川工業用水道事務所関連遺跡

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
★ ◎	白井大宮Ⅱ遺跡 北群馬郡子持村 大字白井	縄　文 古　墳 平　安	配石・集石・土坑・石器製作址？ 畦状遺構・道・ＦＰ下馬蹄跡・立木痕・側木痕 竪穴住居・竪穴状遺構	本報告書
1	押手遺跡 北群馬郡子持村 大字北牧	旧石器 縄　文 弥　生 古　墳	頁岩製の細石core１点 埋状盛土遺構・立石・列石・配石・方形柱穴列・焼失竪穴住居 再葬墓 ＦＰ下の竪穴住居・道・畠・墳墓水場(集落)	1 74 93
2	黒井峯遺跡 北群馬郡子持村 大字北牧・中郷	縄　文 古　墳	包含層 ＦＰ層中の建物の壁・崩壊屋根・立ったままの幾垣・ＦＰ下の竪穴住居・平地式建物・家畜小屋・道・水場・水田(集落)	2 74 92
3	西組遺跡 北群馬郡子持村 大字中郷字西	縄　文 古　墳	包含層 ＦＰ下の竪穴住居・平地式倉庫・高床式倉庫・畦・伊勢原	3 74 10
		平　安	水田・祭祀跡・道(集落) 竪穴住居	
4	丸子山遺跡 北群馬郡子持村 大字北牧字丸子山	縄　文 弥　生 古　墳	土坑・敷石住居 土坑・方形周溝墓 ＦＰ下の道・畦状遺構・馬蹄跡・畠・土坑・ＦＰ上の周堀型横穴式石室をもつ横石塚(長尾村４号)	4 74 10
5	館野遺跡 北群馬郡子持村 中郷字館野	古　墳	ＦＰ下の畠・竪穴住居・祭祀遺構	5 6 8 74
6	田尻遺跡 北群馬郡子持村 大字中郷字中田	旧石器 縄　文 弥　生 古　墳 平　安	集石跡 竪穴住居(集落) 竪穴住居(集落) 竪穴住居・方形墳墓・帆立貝形古墳・ＦＰ下の馬蹄跡・平地式建物・高床式倉庫・畠・道 竪穴住居	9 11 13 14 15 74 88
7	吹屋瓜田遺跡 北群馬郡子持村 大字吹屋字瓜田	古　墳	ＦＡ下の小区画水田・人足跡・ＦＰ下小区画水田	16 74
8	細沢瓜田遺跡 北群馬郡子持村 大字吹屋字瓜田	古　墳	ＦＡ下小区画水田・ＦＰ下小区画水田	90
9	白井矢野遺跡 北群馬郡子持村 大字白井字矢野	古　墳 平　安 中 ～ 近	ＦＰ上古墳 竪穴住居 墓壙	10 85 9
10	雉原遺跡 北群馬郡子持村 大字白井	古　墳 平　安	ＦＡ下竪穴住居 竪穴住居・鍛鉄遺構(集落)	85
11	白井二段屋遺跡 (トラックターミナル地点) 北群馬郡子持村 大字白井字二位屋	古　墳 奈 ～ 平 中　世	ＦＰ下の畠・馬蹄跡 竪穴住居・土坑・溝 墓・溝・城(館)跡	12 85 10 11
12 △	白井二段屋遺跡 北群馬郡子持村 大字白井	縄　文 古　墳 奈 ～ 平 中　世	遺物包含層 ＦＰ下馬蹄跡 竪穴住居・土坑・掘立柱建物・鍛鉄炉遺構(集落) 仁居谷城の堀の一部	19 20 21 74
13 △	白井南中道遺跡 北群馬郡子持村 大字白井字南中道	縄　文 古　墳 奈 ～ 平 中 ～ 近	前期の土坑・包含層 ＦＰ下の馬蹄跡・畦状遺構・人の足跡・立木痕・側木痕・ＦＡ下炉跡？・鍛跡？ 竪穴住居(集落) 土坑	19 20 21 74
14 △	白井丸岩遺跡 北群馬郡子持村 大字白井	縄　文 古　墳 中 ～ 近	前期の土坑・包含層 ＦＰ下の馬蹄跡・人の足跡・畦状遺構・道・立木痕・ＦＡ下の道 墓壙・土坑・ピット群	19 20 21 74
15 △	白井北中道遺跡 北群馬郡子持村 大字白井字北中	縄　文 古　墳	遺物包含層 ＦＰ下の畦状遺構・馬蹄跡・人の足跡・道・	19 20 21

№	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	道	中 ～ 近	立木板 白井城の東遺構・北遺構の一部・畠・墓墓・溝・道・土坑	74
16 △	**白井北中道遺跡** （道の駅地点） 北群馬郡子持村 大字白井字北中道	古　墳 近　世	ＦＰ下の畦状遺構・馬蹄跡 土坑	19 20 21 30
17 ▲	**白井北中道Ⅱ遺跡** 北群馬郡子持村 大字白井・吹屋	縄　文 古　墳 中 ～ 近	前期の土坑・集石 ＦＰ下の放牧地・馬蹄跡・畠・道 土坑・溝	18 74
18 ▲	**吹屋犬子塚遺跡** 北群馬郡子持村 大字吹屋	旧石器 縄　文 古　墳 中 ～ 近	後期のブロック 竪穴住居・土坑（前期） ＦＰ下の放牧地・馬蹄跡・畠・道・ＦＡ下水田 土坑・溝・道	18
19 ▲	**吹屋中原遺跡** 北群馬郡子持村 大字吹屋	旧石器 縄　文 古　墳 中 ～ 近	後期のブロック 掘立柱建物・土坑（前期） ＦＰ下の祭祀跡・放牧地・馬蹄跡・陸苗代・畠・道 土坑・溝	18
20 ◎	**白井大宮遺跡** 北群馬郡子持村 大字白井字大宮	縄　文 古　墳 平　安 中　世 近 現 代	遺物包含層 ＦＰ下の放牧地・道・弭本廃・立木廃・馬蹄跡 道 土壙墓 土坑	22 74
21 ▲	**吹屋三角遺跡** 北群馬郡子持村 大字吹屋	縄　文 古　墳 平　安	水場・土坑 竪穴住居跡・ＦＡ下の水田・馬蹄跡・ＦＰ下の水田・馬蹄跡・道・畠・畦状遺構 旧河道	83
22 ▲	**中郷恵久保遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷	縄　文 古　墳	包含層 竪穴住居跡・掘立柱建物・ＦＡ下水田・ＦＰ下水田・馬蹄跡・放牧地・道	84
23 ▲	**吹屋梶屋遺跡** 北群馬郡子持村 大字吹屋	縄　文 古　墳 平　安 中 近 世	包含層 竪穴住居跡・畠・ＦＰ下水田・ＦＡ上畠 竪穴住居 掘立柱建物・井戸	86
24	**東田尻遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷字田尻	古　墳	ＦＰ下竪穴住居（集落）・地下レーダーによって５基の古墳が確認されている。	4
25 ●	**中ノ峯古墳** 北群馬郡子持村 大字北牧字中ノ峯	古　墳	ＦＰによって覆われた袖無型横穴式石室をもつ円墳	23 74 4
26 ●	**伊熊・有瀬古墳** 北群馬郡子持村 大字上白井字字徳野・有瀬	古　墳	ＦＰに覆われた袖無型横穴式石室をもつ円墳・伊熊古墳・有瀬１・Ⅱ号墳がある。	4 24 74
27 ●	**吹屋Ⅰ号墳** 北群馬郡子持村	古　墳	ＦＰ上の両袖型石室をもつ円墳（長尾村６号）	4 22
	大字吹屋字羅屋			
28 ●	**吹屋Ⅱ号墳** 北群馬郡子持村 大字吹屋大道甲	古　墳	ＦＰ上の両袖型石室をもつ円墳（長尾村７号）	4 22
29 ●	**吹屋Ⅲ号墳** 北群馬郡子持村 大字吹屋大道甲	古　墳	ＦＰ上の両袖型石室をもつ円墳（長尾村８号）	4 22
30 ●	**不動塚古墳** 北群馬郡子持村 大字白井字北廊	古　墳	ＦＰ上の円墳？	4 22
31 ●	**加藤塚古墳** 北群馬郡子持村 大字白井字玉椿	古　墳	ＦＰ上円墳（長尾村17号）	25 22 4
32 ●	**白井古墳群** 北群馬郡子持村 大字白井地内	古　墳	ＦＰ上の円墳	4 22
33 ●	**三夜塚** 北群馬郡子持村 大字吹屋字羅屋	古　墳	前方後円墳？（長尾村５号）	22 25
34 ●	**金見稲塚** 北群馬郡子持村 大字白井字大宮乙	古　墳	ＦＰ上円墳（長尾村16号）	25 22
35 ●	**藤倉Ⅰ号墳** 北群馬郡子持村 大字白井字実野	古　墳	ＦＰ上円墳？	22
36 ●	**大日塚** 北群馬郡子持村 大字北牧字鍛冶谷戸	古　墳	前方後円墳？（長尾村１号）	22 25
37 ●	**ザン塚** 北群馬郡子持村 大字北牧字稲荷他	古　墳	ＦＰ上？の横穴式石室をもつ古墳	22 26
38 ●	**行人塚** 北群馬郡子持村 大字中郷字伊勢原	古　墳	ＦＰ下円墳（白郷井村８号）	22 25
39 ●	**庚人塚** 北群馬郡子持村 大字吹屋字柳	古　墳	円墳？（長尾村11号）	22 25
40 ●	**犬子塚** 北群馬郡子持村 大字吹屋字犬子塚	古　墳	円墳？（長尾村12号）	22 25
41 ●	**八講塚** 北群馬郡子持村 大字吹屋字八講塚	古　墳	不詳（長尾村13号？）	22 85
42 ●	**大塚（稲荷塚）** 北群馬郡子持村 大字吹屋字大塚北	古　墳	ＦＰ上円墳？（長尾村14号）	22 25
43 ●	**狐塚** 北群馬郡子持村 大字吹屋字大塚北	古　墳	古墳？（長尾村15号）	22 25
44 ●	**金見細山** 北群馬郡子持村 大字白井字吹屋	古　墳	円墳？	22
45	**長尾小学校南遺**	古　墳	ＦＰ下円墳？	22

№	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	跡 北群馬郡子持村 大字北牧字羽黒他			
46	**白井城南郭遺跡** 北群馬郡子持村 大字白井	平　安 戦　国	竪穴住居(集落) 土坑	4 89
47	**八幡神社遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷字田向	縄　文 古　墳	包含層 ＦＰ下の竪穴住居・畠・馬蹄跡・畦状遺構・土壙墓・平地式建物(集落)	9
48	**恵久保遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷字恵久保	古　墳	包蔵地	26
49	**池田沢東遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷	古　墳	ＦＰ下の道・畠・境界・樹木跡・硬化面	7 28 74 75
50	**浅田遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷字浅田	縄　文 弥　生 古　墳	土坑・配石・集石・敷石住居 包含層 ＦＰ下の古墳・馬蹄跡・畦状遺構・水田・道・竪穴住居・屋外竈	12 14 15 85
51	**中組遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷	古　墳 平　安	ＦＰ下の馬蹄跡・畦状遺構・道・畠 竪穴住居・平地式建物・柴垣・墓・寺跡	8 85
52	**白郷井中学校校庭遺跡** 北群馬郡子持村 大字上白井	古　墳	竪穴住居(集落)	26 27
53	**源空寺貞(寺ノ後)遺跡** 北群馬郡子持村 大字吹屋字寺ノ後	古　墳	ＦＰ下の馬蹄跡・畦状遺構・境界	9 85
54	**北牧相ノ田遺跡** 北群馬郡子持村 大字北牧字相ノ田	古　墳 平　安 中　世	ＦＰ下水田 竪穴住居 竪穴住居・井戸	12 17 91
55	**畑中遺跡** 北群馬郡子持村 大字北牧字宮地	古　墳	ＦＰ下水田	10 85
56	**後田遺跡** 北群馬郡子持村 大字北牧字宮地	古　墳	ＦＰ下水田	8
57	**中郷前田向遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷字前田向	古　墳	ＦＰ下の馬蹄跡・畦状遺構	85
58	**中郷柳堀遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷	古　墳	ＦＰ下の馬蹄跡・畦状遺構・畠・道	14
59	**雙林寺** 北群馬郡子持村 大字中郷	中 ～ 現	雙林寺面の呼称をもつ寺院家の寺院・15世紀前半～中頃に創建	4
60 □	**白井上城跡** 北群馬郡子持村 大字白井	中　世	城跡	29
61 □	**白井城跡** 北群馬郡子持村 大字白井	中 ～ 近	15世紀中頃、長尾影仲築城？	4 29
62 □	**白井遺跡** 北群馬郡子持村 大字白井	中　世	城跡	29
63 □	**二位屋城跡** 北群馬郡子持村 大字白井	中　世	城跡	29
64	**白井宿** 北群馬郡子持村 大字白井	中 ～ 近	城下町・沿場(市場)町	4
65	**加生遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷	縄　文	包蔵地	27
66	**中井遺跡** 北群馬郡子持村 大字中郷字中井	縄　文	中期の包蔵地	27
67	**六万遺跡** 勢多郡赤城村津久田字六万	縄　文	竪穴住居・土坑	31
68	**寺内遺跡** 勢多郡赤城村勝保沢字寺内	古　墳 中　世	ＦＡ下竪穴住居・ＦＰ下の竪穴住居・祭祀跡 城跡	32 24 74
69	**宮田廟ノ木遺跡** 勢多郡赤城村宮田字廟ノ木	古　墳	ＦＰ下の竪穴住居・祭祀跡	33 74
70	**宮田畦呼遺跡** 勢多郡赤城村宮田	古　墳	ＦＰ下水田	34
71	**宮田の寄居址** 勢多郡赤城村宮田	中　世	砦址	29
72	**中島遺跡** 勢多郡赤城村宮田字中島	古　墳	包蔵地	35
73	**戸狗坂遺跡** 勢多郡赤城村樽	古　墳	包蔵地	36
74	**樽田中遺跡** 勢多郡赤城村樽	古　墳	包蔵地	36
75 ●	**河岸古墳群** 勢多郡赤城村宮田字河岸	古　墳	ＦＰ上古墳群	25 35
76 ●	**舟天塚古墳** 勢多郡赤城村樽字雷水	古　墳	ＦＰ上古墳	25 35
77	**勝保沢剣刀窪遺跡** 勢多郡赤城村勝保沢剣刀窪	古　墳	ＦＰ下の竪穴住居・平地式建物・垣・馬蹄跡	37 76 74
78	**津久田板ノ木遺跡** 勢多郡赤城村津久田字北原	古　墳	ＦＰ下竪穴住居	38
79	**勝保沢中ノ山遺跡** 勢多郡赤城村勝保沢	旧石器 縄　文 古　墳 奈　良 近　世	土坑・石器群 竪穴住居・集石・土坑 竪穴住居 火葬土壙墓 炭焼窯	39 74
80	**中地遺跡**	旧石器	石器群	40

№	遺跡名・所在地	時代		主な遺構	文献
	勢多郡赤城村三原田字中畑	縄 平	文 安	竪穴住居・土坑 竪穴住居	74
81	**源訪西遺跡** 勢多郡赤城村三原田源訪上	旧石器 縄文		石器群 竪穴住居・土坑	77 74
82	**見立櫛井遺跡** 勢多郡赤城村見立字櫛井	旧石器 縄 弥～古	文 文	石器群 土坑・竪穴住居 竪穴住居(集落)	41 74
83	**三原田遺跡** 勢多郡赤城村三原田	縄	文	竪穴住居・敷石住居・土坑(集落)	42 74
84	**三原田城遺跡** 勢多郡赤城村三原田字観音前	縄 古 中	文 墳 世	竪穴住居・土坑(集落) 竪穴住居・古墳 土壙墓	43 78 74
85	**蛯澤石器時代遺跡** 勢多郡赤城村蛯澤	旧石器 縄 弥 古	文 生 墳	包含層 竪穴住居・配石遺構(集落) 包含層 包含層	44 79 74
86	**樽遺跡「標識遺跡」** 勢多郡赤城村樽字山田	弥	生	竪穴住居(集落)「樽式土器」	45 74
87	**西ノ平遺跡** 勢多郡北橘村八崎字西ノ平	縄 平	文 安	陥穴・竪穴住居 竪穴住居	46 74
88	**田ノ保遺跡** 勢多郡北橘村分郷八崎字上田ノ保	縄 古	文 墳	土器捨て場・泥炭面・杭 ＦＡ下の小区画水田・人足跡・馬蹄跡・ＦＰ下小区画水田	47 80 74
89	**前中後遺跡** 勢多郡北橘村八崎字前中後・道渡	縄	文	竪穴住居・敷石住居・土坑・配石・石棺墓・土壙墓	48 49 74
90	**房谷戸遺跡** 勢多郡北橘村八崎字房谷戸	旧石器 縄 古～平 中	文 文 世	石器製作址 竪穴住居・土坑 竪穴住居 龍の彦	50 51 74 81
91	**分郷八崎遺跡** 勢多郡北橘村分郷八崎字八幡・十二ノ上・観音之上	旧石器 縄 弥 古 奈・平 中近世	文 生 墳 世	局部磨製石斧・接合資料 竪穴住居・土坑 竪穴住居 古墳 竪穴住居・掘立柱建物・小鍛冶工房・製鉄関連炭穴 櫛列・掘立柱建物・墓壙	52 74
92	**北町遺跡** 勢多郡北橘村八崎字北町・五輪田	旧石器 縄 古	文 文 墳	文化層 竪穴住居・土坑 竪穴住居・土坑	53 80 74
93 ●	**八幡塚古墳** 勢多郡北橘村真壁字丸山	古	墳	自然石乱石横両袖型横穴式石室をもつ小円墳(７世紀後半)	54 47 74
94	**田尻遺跡** 勢多郡北橘村八崎字田尻	弥	生	竪穴住居	76
95	**川島中祖遺跡** 渋川市市川島中祖	中	世	馬場跡	55
96	**空沢遺跡** 渋川市行幸田字	縄	文	竪穴住居・柄鏡形敷石住居・土坑・列石・石	56 74

№	遺跡名・所在地	時代		主な遺構	文献
	空沢			器工房址	
		弥 古 奈～平 中 近	生 墳 世 世	円形周溝墓 初期群集墳 竪穴住居・小鍛冶跡(集落) 土壙墓 墓	
97	**行幸田山遺跡** 渋川市行幸田字石板・三重街道	旧石器 縄 弥 古 平 中	文 文 生 墳 安 世	石器包含層 竪穴住居・土坑・陥穴 石器群・方形周溝墓 方墳 竪穴住居・掘立柱建物 砦	57
98	**中筋遺跡** 渋川市行幸田	縄 弥 古	文 生 墳	竪穴住居 竪穴住居 竪穴住居・平地式建物・畠・祭祀遺構・垣根・道・溝区画・古墳・土壙墓(集落)	58 74
		平	安	竪穴住居	
99	**半田中原・南原遺跡** 渋川市半田字中原・南原	縄 弥 古 奈 平	文 生 墳 良 安	陥穴・竪穴住居・土坑 遺物包含層 竪穴式石室の円墳・土壙墓 竪穴住居・牧 竪穴住居	59 60 61 74
100	**南大塚遺跡** 渋川市川島字南大塚	縄 弥	文 生	包蔵地 土坑・再葬墓	59 6 74
101	**中村遺跡** 渋川市中村字縄島	縄 弥 古	文 生 墳	遺物包含層 竪穴住居・方形周溝墓・円形周溝墓・墓坑・溝 竪穴住居・特殊遺構・畠・ＦＡ下小区画水田・ＦＰ下小区画水田・溝・道・横穴式石室	62 74
		奈	良	竪穴住居・掘立柱建物・櫛状遺構・溝状遺構	
		中	世	竪穴住居・地下式土坑・井戸・墓・墓地	
		近	世	水田・畑・水路・道・川	
102	**有馬遺跡** 渋川市八木原	弥～古		竪穴住居・礫床墓	63 74
103	**有馬条里遺跡** 渋川市八木原	弥 古	生 墳	竪穴住居・礫床墓・溝(集落) 竪穴住居・ＦＰ下の水田・畠(集落)	64 74
		奈～平		掘立柱建物・鍛冶遺構・井戸・溝・条里遺構(集落)	
104	**後田東遺跡** 渋川市有馬字後田	縄 弥 古 平 中	文 生 墳 安 世	竪穴住居 竪穴住居(集落) 竪穴住居・円墳 竪穴住居 溝・地下式土坑	65 74
105	**有馬廃寺** 渋川市有馬字寺畑	弥 平	生 安	竪穴住居・土坑 竪穴住居・土坑	66 74
106	**堀之下遺跡** 渋川市坂下町	古 平	墳 安	ＦＡ下水田 竪穴住居(集落)	67

№	遺跡名・所在地	時代		主な遺構	文献
107	東真遺跡 渋川市東真	縄 古	文 墳	包蔵地 包蔵地	68
108	西真遺跡 渋川市西真	古	墳	竪穴住居(集落)	68
109	金井下新田遺跡 渋川市金井	古	墳	竪穴住居	68
110	堀屋遺跡 渋川市行幸田字堀屋	古 平	墳 安	竪穴住居・土坑 竪穴住居	82 74
111 ●	坂下古墳群 渋川市坂下町	古	墳	竪穴式石室をもつ横石塚(5世紀末)	5 74
112 ●	金井古墳 渋川市金井字上之平	古	墳	截石切組横両袖型横穴式石室をもつ円墳(7世紀末)	71 72 74
113 ●	金井前原古墳 渋川市金井	古	墳	FA下古墳	59
114	金井原遺跡 渋川市金井	古	墳	FP上古墳?	73
115 ●	延暦塚古墳 渋川市上郷	古	墳	FP上古墳	55
116	金井製鉄遺跡 渋川市金井字前原	平	安	製鉄炉・炭窯	59 69 74
117 ●	丸山古墳 渋川市金井字東裏	古	墳	箱式棺状横穴式石室をもつ古墳(6世紀前半)	70 74
118 ●	虚空蔵塚古墳 渋川市元町	古	墳	截石切組横横穴式石室をもつ古墳(7世紀末)	24 59 72 74 71
119 ●	東町古墳 渋川市東町	古	墳	FA下方墳	5 24
120	東町関下遺跡 渋川市東町字関下	近	世	畑・水田	87

＜参考文献＞（周辺遺跡一覧の文献番号に対応）

1 『押手遺跡発掘調査概報』子持村文化財調査報告 第5集 子持村教育委員会 1987
2 『馬井峯遺跡Ⅰ』子持村教育委員会 1985
3 『西紙遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告 第2集 子持村教育委員会 1985
4 『子持村誌』上巻 子持村 1987
5 『北群馬・渋川の歴史』北群馬・渋川の歴史編纂委員会 1971
6 『群馬県史 資料編2』群馬県史編さん委員会 1986
7 『年報7』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
8 『年報8』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
9 『年報11』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
10 『年報12』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
11 『年報13』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
12 『年報14』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
13 『年報16』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
14 『年報17』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
15 『年報18』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
16 『吹屋瓜田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
17 『年報10』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
18 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子原遺跡・吹屋中原遺跡』第1冊(古代・中近世編)・第2冊(旧石器・縄文編)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996・1998
19 『白井遺跡群』-集落編Ⅰ- 建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
20 『白井遺跡群』-古墳時代編- 建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
21 『白井遺跡群』-中世・近世編- 建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
22 『白井大宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
23 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』子持村教育委員会 1980
24 『群馬県史 資料編3』原始古代3 古墳 群馬県史編さん委員会 1986
25 『上毛古墳綜覧』群馬県史蔵名勝天然記念物調査 第5輯 群馬県 1938
26 『群馬の遺跡』群馬県遺跡台帳作成委員会 1963
27 『群馬県遺跡台帳 東毛編』群馬県教育委員会 1971
28 『都市周辺の緩石堆積地における遺跡保存方法の検討』文化庁 1989
29 『群馬県古城墓址の研究』上巻 山崎一 1972
30 『白井北中道遺跡(道の駅地点)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000
31 『六万遺跡発掘調査報告書』赤城村教育委員会 1993
32 『寺内遺跡』赤城村教育委員会 1996
33 『宮田廻ノ木遺跡』赤城村教育委員会 1995
34 『宮田旭野遺構調査概報』『時報』 第25号 群馬大学史学会 1961
35 『群馬県勢多郡 横野村誌』群馬県勢多郡横野村誌編纂委員会 1956
36 『文化財関係資料集 第3集』赤城村教育委員会 1973
37 『赤城村村内遺跡Ⅱ』赤城村教育委員会 1996
38 『神久田板ノ木遺跡』赤城村教育委員会 1997
39 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ・Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
40 『中畦遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
41 『見立堀井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会 1985
42 『三原田遺跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 群馬県企業局 1980～1992
43 『年報2』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
44 『勢多郡史』勢多郡誌編纂委員会 1958
45 『上野幡遺跡調査概報』杉原荘介『考古学』第10巻10号 1939
46 『西ノ平遺跡』北橋村教育委員会 1996
47 『村内遺跡Ⅳ』北橋村教育委員会 1996
48 『村内遺跡Ⅰ』北橋村教育委員会 1993
49 『村内遺跡Ⅲ』北橋村教育委員会 1995
50 『屏谷戸遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
51 『屏谷戸遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
52 『分郷八崎遺跡』北橋村教育委員会 1986
53 『北町遺跡』第2回石器文化研究交流会発表要旨 1995
54 『真壁向山遺跡Ⅴ』北橋村教育委員会 1995
55 『群馬県遺跡台帳 西毛編』群馬県教育委員会 1972
56 『空沢遺跡』渋川市教育委員会 1979
57 『行幸田山遺跡』渋川市教育委員会 1987
58 『中筋遺跡』渋川市教育委員会 1987
59 『渋川市誌 第二巻』通史編・上 原始～近世 渋川市 1993
60 『半田工業団地取付道路遺跡』渋川市教育委員会 1991
61 『半田中原・南原遺跡』『半田南原遺跡』群馬県企業局・渋川市教育委員会 1994
62 『中村遺跡』渋川市教育委員会 1986
63 『有馬遺跡Ⅰ・大久保B遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
64 『有馬桑里遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
65 『市内遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会 1988
66 『有馬廣寺跡』渋川市教育委員会 1986

67 『坂之下遺跡』渋川市教育委員会　1988
68 『中村遺跡』渋川市教育委員会　1986
69 『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』渋川市教育委員会　1975
70 『金井丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教育委員会　1978
71 『群馬県の史跡 古墳編』群馬県教育委員会　1996
72 『石造物と文化財』渋川市誌編さん室　1986
73 『市内遺跡VI』渋川市教育委員会　1993
74 『群馬県遺跡大辞典』編集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 製作・発行　上毛新聞社　1999
75 『池田沢東遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会　1989
76 『群馬発掘最前線』群馬県立博物館　1996
77 『渕酒西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
78 『三原田城遺跡・八崎城・八崎塚・上青梨子古墳』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
79 『国指定史跡瀧澤石器時代遺跡』赤城村教育委員会　1997
80 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教育委員会　1996
81 『厚谷戸遺跡III』北橋村教育委員会　1995
82 『市内遺跡Ｉ』渋川市教育委員会　1988
83 『年報19』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000
84 『年報20』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
85 子持村教育委員会文化財室長 石井克己氏のご教示による。
86 山口逸弘氏、山村英二氏、小保方香里氏のご教示による。
87 『東町関下遺跡』建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
88 『年報15』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996
89 『年報９』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990
90 『鯉沢瓜田遺跡』子持村教育委員会　2000
91 『北牧相ノ田遺跡』子持村教育委員会　2000
92 『馬井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会　1990
93 『群馬文化』群馬県地域文化研究協議会　1985

第3章　遺跡の概要

1．平安時代の遺構と遺物

概要　本調査区での平安時代に相当する遺構確認面は、1面(Hr－FP上面)であり、表土下約30cmのところまで重機掘削をしたところ、層厚約70cmの榛名山ニツ岳降下軽石層(以下ＦＰと記述)の一次堆積層が確認された。その白色のＦＰ上面に黒褐色土が覆土として残存し、なおかつ方形状のプランとして検出されたのが1号住居と1・2・3号竪穴状遺構である。

検出当初は、4軒の住居跡の検出とみられていたが、覆土を除去し、遺構を精査していくにつれ、1号住居のみは遺物の出土は少ないものの、カマドが確認され住居としての認定は容易であったが、JX－78、JY－77・78グリッド付近で近接して検出された2つの方形状の遺構とJV－76・77、JW－76グリッドで検出された方形状の遺構は、遺物を伴ってはいるものの、遺構の形状、埋没土の状況、住居に伴う付随施設が全く見受けられない等の状況から判断して、住居としての機能を有さない「竪穴状遺構」として位置付けた。

したがって、本調査区での1面からの遺構の検出は、ＦＰを掘り抜く竪穴住居跡1軒と竪穴状遺構3基である。

遺構ごとの調査成果は以下のとおりである。

◇1号竪穴住居　第7・8図　写図1

位置　JO－82・83グリッド

方位　N－85°－E　**規模**　南北3.60m×東西2.98m

形状　やや歪んだ横長長方形を呈する。

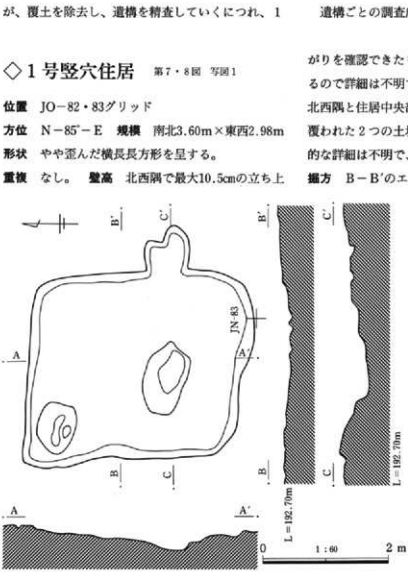
重複　なし。　**壁高**　北西隅で最大10.5cmの立ち上がりを確認できたものの、ほとんどが削平されているので詳細は不明である。　**貯蔵穴**　なし。　**床面**　北西隅と住居中央部よりやや南よりで、黒褐色土に覆われた2つの土坑状の落ち込みを検出したが機能的な詳細は不明で、貼床、柱穴列は未確認である。

掘方　B－B′のエレベーションの観察では、部分的に平坦はあるものの、中央部に向かって緩い傾斜が認められる。築造時の作業手順を示す痕跡は認められない。

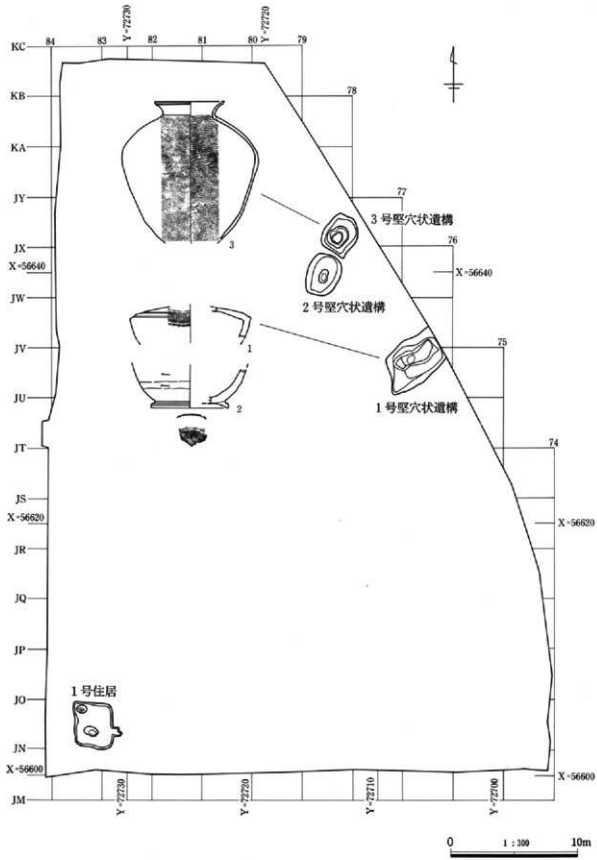
遺物　土師器甕の口縁部・胴部・底部の小破片

カマド　東壁中央部よりやや南よりに設置されている。焚口部幅0.45m　燃焼部奥行0.48m　燃焼部幅0.70m　煙道部長0.80m　煙道部幅0.39m

調査所見　残存状態は不良である。遺物量も極めて少なく小破片ではあるが、出土したコの字状口縁甕の口縁部と底部の観察から、住居の時期は9世紀後半と推測される。



第7図　1号竪穴住居



第８図　１面（ＦＰ上面）　全体図

◇1号竪穴状遺構 第8・9図 表P117 写図2・6

位置 JV−76・77、JW−76グリッド

方位 N−45°−E

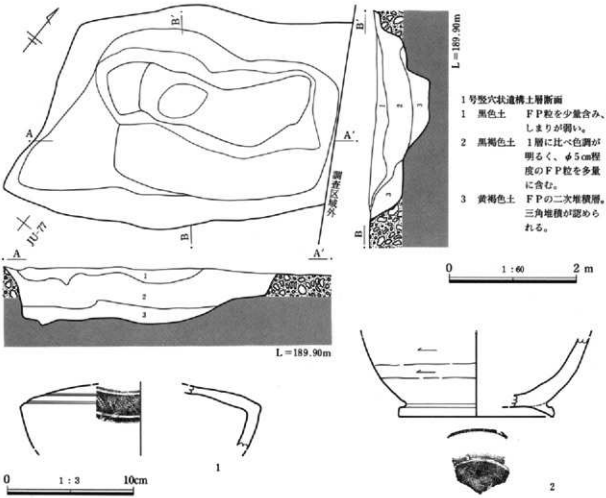
規模 南北5.47m 東西4.77m

形状 歪んだ長方形状を呈する。

重複 なし。 **壁高** 南西隅で最大0.80mを測る。

遺物 須恵器長頸壺・短頸壺・坏小破片、土師器甕小破片、小円礫

調査所見 南東壁でＦＰの二次堆積による自然埋没が認められる。調査区東壁の土層断面の観察では、ＦＰの一次堆積層が認められないことから、東側に遺構が延びる可能性がある。遺構そのものの機能的な詳細は不明であるが、時期は出土した遺物からみて８～９世紀と思われる。



第９図 １号竪穴状遺構

◇2号竪穴状遺構 第8図 写図2

位置 JX−78グリッド

方位 N−24°−E

規模 南北3.26m 東西2.86m

形状 歪んだ隅丸方形状を呈する。

重複 なし。

壁高 南東壁で0.57mを測る。

遺物 須恵器長頸壺の小破片

調査所見 底面中央部に深さ約20cmの土坑状の落ち込みがみられるが、遺構との関係やそのものの機能的な詳細は不明である。時期は９世紀。

◇3号竪穴状遺構　第8・10図　表P117　写図2・6

位置　JX－78、JY－77・78グリッド

方位　N－45°－E

規模　南北3.55m　東西2.90m

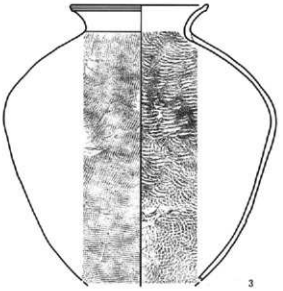
形状　歪んだ隅丸方形状を呈する。

重複　なし。

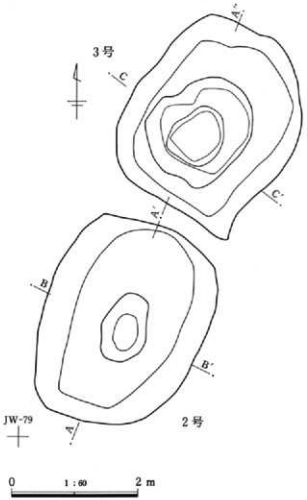
壁高　北西壁で0.55mを測る。

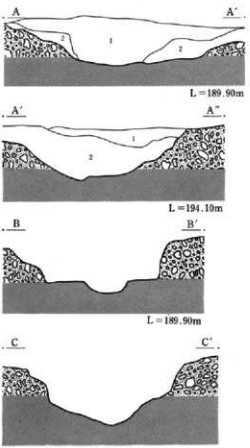
遺物　須恵器大甕・坏小破片、円礫小破片

調査所見　底面は中央部に向かって緩やかに落ち込んでいる。1・2号竪穴状遺構の遺物は小破片が多かったのに比べ、覆土中位に多く集中して須恵器大甕が出土した。須恵器大甕から時期は9世紀と推測されるが、1・2号竪穴状遺構と同様に遺構そのものの機能的な詳細は不明である。



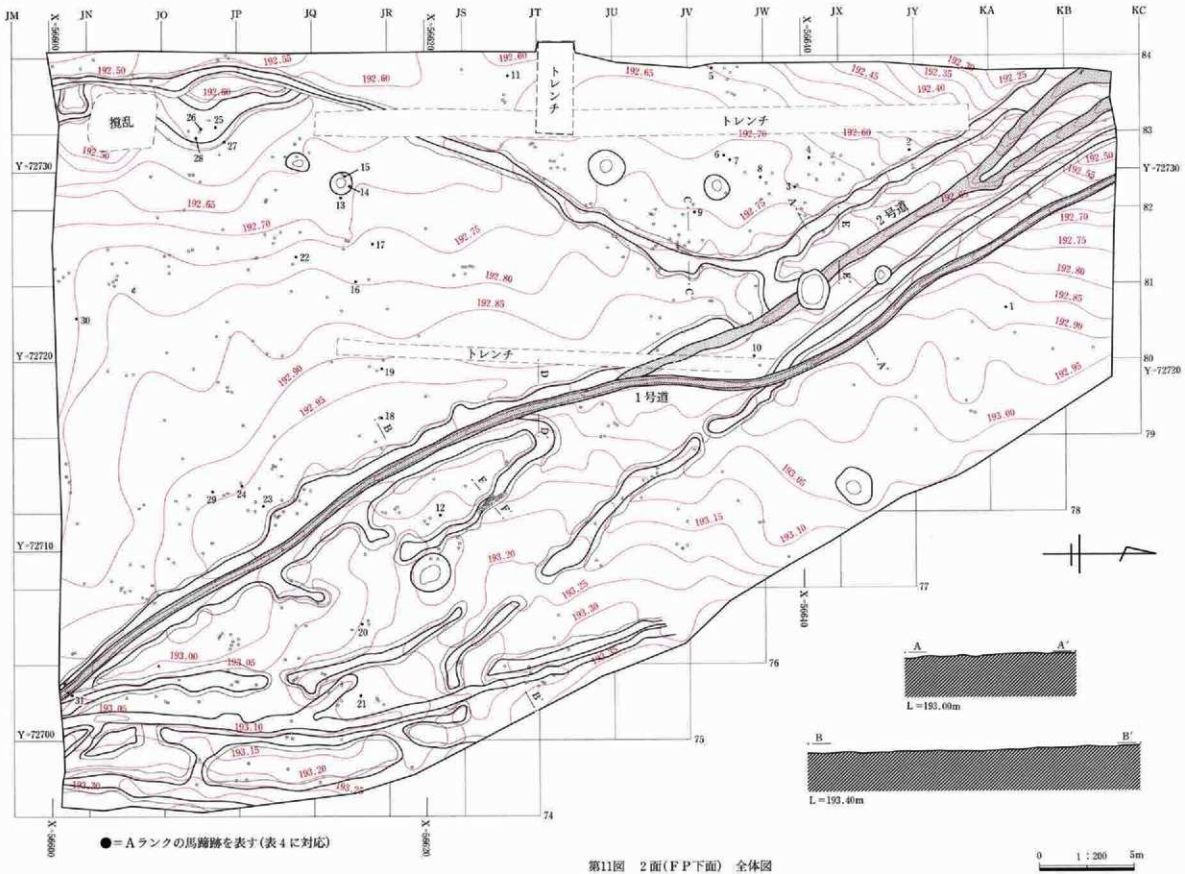
3号出土　0　1：6　20cm





2・3号竪穴状遺構土層断面
1　黒色土　FP粒を少量含み、しまりが弱い。
2　黒褐色土　1層に比べ色調が明るく、φ5cm程度のFP粒を多量に含む。

第10図　2・3号竪穴状遺構



第11図　2面(FP下面)　全体図

2．古墳時代の遺構と遺物

概要　本調査区での古墳時代に相当する遺構確認面は、Hr－FPの降下年代が6世紀中葉（第2四半期頃）、Hr－FAの降下年代が6世紀初頭（第1四半期頃）に位置づけられていることからみて、2面（Hr－FP下面）、3面（Hr－FPとHr－FAの間層の黒褐色土中）、4面（Hr－FA上面）、5面（Hr－FA下面）の各文化層が、古墳時代後期の遺構及び遺物に該当する。（以下ＦＰとＦＡと記述）

2面のＦＰ下面から5面のＦＡ下面にかけては、近接する白井大宮遺跡で検出された遺構とほぼ同様に、畦状遺構、踏み分け道、馬蹄跡、倒木痕、土坑、立木痕が確認され、特にＦＰ下面の畦状遺構や踏み分け道については、調査区が極めて近接していることから、同じ遺構面の広がりとして関連づけて捉えることが必要である。（第13図　白井大宮・白井大宮Ⅱ遺跡　遺構全体概念図参照）

各面ごとの調査成果は以下のとおりである。

（1）2面（Hr－FP下面）の調査　口絵　第11図

2面の遺構確認作業は、層厚約70cmのＦＰを除去することから始められ、どれだけ丁寧に、どれだけ遺構面を傷つけることなくＦＰ直下の黒褐色土を露出させるかが重要な鍵となる。具体的な作業手順としては、バックホーを用いて大量に堆積しているＦＰ層を残厚約15cmのところまで取り除き、次にジョレンを用いて人力で粒径約5cmの灰色軽石まで掘り下げた。さらに残った桃灰色軽石を手ボウキや竹べらを使って、軽石の一粒一粒を丁寧に取り除く手作業を行った。付加えれば、この最下層の桃灰色軽石層が極めて細粒であったために、黒褐色土上面に押圧された馬蹄跡のような僅かな凹みや、炭化材・植物痕までもが良好に保存されたのである。なお、バックホーによるＦＰの掘削時中に、黒井峯遺跡で発見されたようなＦＰ層中の建物の壁、崩れかけた屋根、立ったままの柴垣等の痕跡は一切確認されなかった。

また、JY－80・81、JW－82、JU－82・JV－82、JS－76・77、JR－82、JQ－82、JY－78、JX－80・81グリッド内において、ＦＰ直下の直径約0.85～2.20m、深さ約5～29cmの円形状の凹みを8箇所確認し、そのうち6箇所はその後のＦＡ下面の調査時において、これらは立木に伴ってできた痕跡と判明した。

ＦＰ直下の遺構面の特徴としては、全体的にススキや灌木の跡と思われる僅かな土の高まり（株痕）や茎の形状をそのまま残す植物痕が広がり、植物痕については部分的に集中している箇所もいくつか認められる。これらの植物痕は、周辺遺跡や近接する白井大宮遺跡でも放射状に倒れた状態で確認されており、黒色を呈してはいるものの炭化したものかまでは不明である。なお、この植物痕は、植物珪酸体分析の結果、ウシクサ族ススキ属（ススキ）との結果が白井大宮遺跡の自然科学分析で既に得られている。また、ＦＰを多量に伴った黒褐色土が流れ込み、ＦＡ下面にまでも及んでいるトンネル状の小穴が随所で認められたが、周辺遺跡と同様に、モグラあるいはねずみの生態の痕跡として認識されている。

2面で検出された遺構及び遺物は、畦状遺構、踏み分け道、馬蹄跡、株痕や炭化材、植物痕である。

◆畦状遺構　口絵　第11・12・13図　写図2・3

ＦＰ直下の黒褐色土上面で、幅約0.55～3.45m、高さ約2～10cmの細長く、しかも表面に凹凸のある「畦状」の土の高まりを検出した。「畦状」というのは、水田に伴う畦畔の「畦」とは明らかに性格や機能が異なり、水田に見られるような規則正しい定形の区画及び機能をもたない。したがって、本遺跡及び周辺遺跡から検出された同様の遺構は、すべて「畦状遺構」と明記され、その性格は、馬の放牧・飼育に関連する区画施設、あるいは、畠地を区画する機能をもち、なおかつその区画が耕作方法や占有範囲と何らかの関連をもっているという想定はされてはいるものの、現在のところ統一された確証は得られておらず、周辺遺跡での今後の調査成果を待ちたい。

なお、この畦状遺構については、石坂茂氏が詳細に検討を加えている。（石坂茂「畦状遺構の機能と

性格について」『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊(古代・中近世編)(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996)

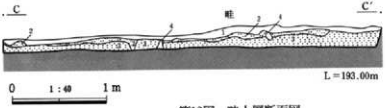
本遺跡で検出された畦状遺構(以下「畦」と記述)は、ほとんどが扁平で形状も帯状ながら極めて不定形であり、定形区画を指向した形跡は認められない。また、畦状の高まりの上に、柵列などの構造物が存在した柱穴列もなく、土寄せをした形跡も認められない。

畦の上部には、軽石と軽石下の攪乱土壌が混合したしまりの弱い軽石層が堆積し、ＦＰ除去中に汚れた軽石の帯状分布が確認できた。これによってＦＰ下での畦の存在が容易に予測でき、これは比較的高さをもった新しい畦に顕著である。

また、畦はすべて連続してつながっているわけではなく、畦と畦とが水田の水口のように途中で収束し、途切れてしまう箇所が随所で見受けられる。これらは、周辺遺跡で検出された畦の特徴と共通するものであり、本遺跡に限ったことではないが、解明につながる成果は得られていない。

なお、断ち割った断面の観察では、層中に炭化物の痕跡は認められず、区画内での畠の検出や連続した耕作痕・工具痕も確認できなかった。

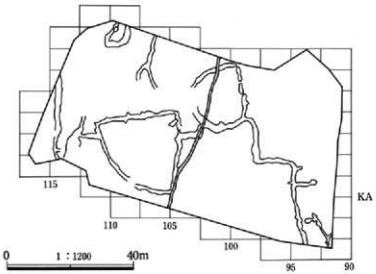
畦の走行は、明らかに東西方向に延びるものはなく、南東－北西方向に延びるものが主流を占め、そこから派生するように北東－南方向に比較的盛土の高い畦１条が走る。また、調査区の南東側に見られるように、畦が密に近接して並ぶ箇所と、調査区の南西側半分で見られるように、大区画を想定したと考えられる走行をもつ畦とが顕著であり、調査区の南東－北西方向に延びる畦では、１号道が太畦の中心走行に沿ってつくられ、途中で蛇行して他の畦を



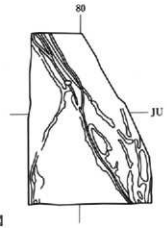
畦土層断面(JV－81)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	粗粒軽石を多く含む。火砕流堆積物。
3	ＦＡ	褐色細粒火山灰。粒子均一で微細。
4	暗褐色土	３層とＦＡ下の黒色土とのブロック混土。

第12図　畦土層断面図



白井大宮遺跡



白井大宮Ⅱ遺跡

第13図　白井大宮・白井大宮Ⅱ遺跡　遺構全体概念図

横切っている箇所も認められる。

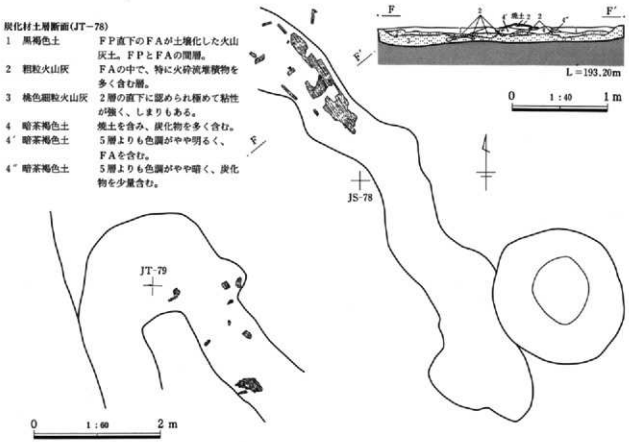
畦は、調査区東側数メートル崖下を南流する利根川の段丘崖と本調査区が乗る段丘面とを遮断するように地形に沿って走行しているようにも看て取れる。このことは、本遺跡が河岸段丘縁辺部に立地していると言うことを踏まえれば、段丘面と段丘崖との境界と畦の関係がどのようになされていたかを考える上でも重要となってくる。このことは、段丘崖寄りで、畦が密に近接して造られていることと何か関係があるのかもしれない。

前述したように、本遺跡に近接し、しかも先立って発掘された遺跡に白井大宮遺跡がある。そこでのＦＰ下面の調査時に検出された畦の区画(道を含む)と、本遺跡から検出された畦の区画とを比較したのが第13図である。これを見ると、不定形ではあるが比較的大きな区画を指向していることが看取できる。

JT－78グリッド内の畦上で、比較的まとまった８点の炭化材を検出し、それ以外にも調査区中央部から北半にかけての畦上と畦以外から12点の炭化材を採取した。畦上の炭化材の出土例は、周辺遺跡の白井北中道遺跡25号畦で、畦に沿うように約4.7mにわたって炭化物の痕跡が確認されている。検出当初は、柵の用材が炭化したものと思われていたが、柵を支える畦下の柱穴は確認されず、倒木や立木に起因する可能性も否めず、その用途は今のところ不明である。

今回JT－78グリッド内の畦上で検出された炭化材は、白井北中道遺跡検出の炭化材と同様に、畦の走行に沿って出土している。比較的大きな炭化材は、検出当初は板材と思われたが、僅かに木の丸みを残していることから自然木の一部であることが判明した。土層断面の観察から、炭化材は焼土と炭化物を含んでいる暗茶褐色土上面から出土し、畦下からの柱穴列は確認されていない。

なお、本遺跡出土の炭化材は樹種同定され、詳細は本文中の第４章で報告されている。



第14図　炭化材の分布と断面図

◆踏み分け道　口絵　第11・15図　写図２・３

ＦＰ直下の黒褐色土上面より、上幅約40～60cm、底面幅約20～35cmの踏み分け道２条を検出した。黒井峯遺跡では、幅約１ｍで両側に土盛りがある太幅の道と幅約30cmの細幅の道とが検出され、それぞれ集落と集落を結ぶ幹線道と耕作地同士を結ぶ私道としての二種類の機能をもったものが知られているが、本遺跡で検出された踏み分け道(以下「道」と記述)は、後者の細幅の道である。道の形状は、台形状に浅く凹み、底面は堅く踏み締められており、残厚約15cmのＦＰを除去した時点で、変色した軽石が下面の道をトレースした形で帯状に確認された。

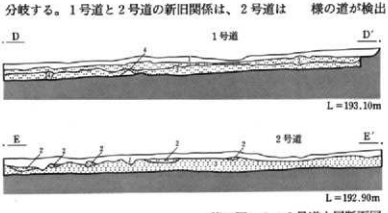
道と馬蹄跡との関係は、夥しい数の馬蹄跡が検出したのにもかかわらず、道の両際と中央の歩行面に僅かに５箇所残存していた以外はほとんど押圧されておらず、吹屋中原遺跡Ⅲ区６号道にみられるような、路面の縁辺部に無数の馬蹄跡がついているのとは明らかに様相が異なる。このことは、人間の頻繁な往来によって踏み固められた道であり、主として人間が恒常的に利用した道と推測することはできるが、決して人間のみに限定されることを示すものではなく、当然馬も同時に歩行したことは否定できない。ただ、吹屋中原遺跡Ⅲ区６号道に見られるような、道の縁辺部に無数に馬蹄跡が残る道とは明らかに状況が異なる。

１号道は緩やかに蛇行しながら南東方向から北西方向へと延び、途中JV－79グリッド付近で２号道に分岐する。１号道と２号道の新旧関係は、２号道は１号道に比べて道の凹みがやや浅く、分岐点における道底面が１号道の側面上部から派生して段差をもって僅かに高い。また、２号道底面の填圧状態も１号道に比べて弱い状況が容易に看取できることから判断して、２号道は何らかの事情によって、後に１号道から派生した道であることが窺える。

さらに２号道はKA－82グリッド付近で走行が二分し、共に１号道同様に北西方向へと進路をとる。道が途中で分岐している理由は、どちらも到達目標への最短経路を採用していることは理解できるが、限られた調査範囲内で、しかも周辺に確固たる目的地も見当たらないことから現時点での詳細は不明である。因みに北東方向の延長線上には、同時期の遺跡として白井北中道遺跡等が所在し、白井北中道Ⅱ遺跡、吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡でも同時期の同様なＦＰ下の道が検出されている。

１号道から分岐して延びる２号道に関して言えば、間隔が平行に保たれた畦と畦との中間地点を走行しているのが看取できる。このことは、白井北中道遺跡１区１号道が、２・３号畦の間を走行する例とほぼ同様であり、また、白井北中道遺跡では、６区25号畦に沿って道と思われる硬化面が認められた例や白井丸岩遺跡３区１号道が、３区９号畦と交わる所で突如途絶えている例を含めれば、明らかに道の走行が畦の走行に規制され、道と畦との間に何らかの関連性があることの証左と言える。

なお、現在の畑一筆を隔てて北西側に近接する白井大宮遺跡でも、南北方向に走行する幅約30cmの同様の道が検出されており、その走行方向からみて、



1・２号道土層断面(JT－79・JX－81)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	粗粒軽石を多く含む。火砕流堆積物。
3	ＦＡ	褐色細粒火山灰。粒子均一で微細。
4	暗褐色土	３層とＦＡ下の黒色土とのブロック混土。

0　1：40　1m

第15図　１・２号道土層断面図

今回検出された2号道の北西端部延長線上で接続し、未確認ながら周辺地域での該期のいずれかの集落への主要幹線へとつながる可能性が示唆できる。他方、南東方向の延長線上には、ＦＡ下の住居が確認された渡屋遺跡が所在するものの、該期との直接の関係は不明である。

◆馬蹄跡　口絵　第11・16図　表3・4　写図3

調査区全域より、ＦＰ直下の黒褐色土上面に押圧された馬蹄跡431個を検出した。検出された馬蹄跡は、前蹄と後蹄の区別はつくものの、検出された個数の割には遺存状態の良好なものは極めて少なく、連続した歩行形態を示すものはない。また、馬蹄跡から雌雄の別を識別することも本来不可能である。ただ、遺存状態の良いものを除いても、これだけの数量の馬蹄跡が不規則に地面に残っている状況からみて、馬蹄跡が残存するためのいくつかの条件が必要となってくる。

第一に、最初に降下したと思われるＦＰが、粒径5㎜程度の細かい粒子の桃灰色軽石層であったために、僅かな馬蹄痕の凹みを良好な状態で保護することができた。

第二に、馬蹄痕が密集して残存する当時の地面に限って言えば、現在の牧場で見られるような蹄跡の押圧を妨げる牧草などはほとんど生えておらず、ウシクサ族ススキ属などの特定の植物が、部分的に限られたエリアに繁茂していた裸地状態に近い景観が想定される。

第三に、馬蹄圧痕は乾燥状態では極めて風化し易く、数日も経たないうちに不鮮明になってしまうという事実からみて、ＦＰ降下直前には、降雨によって地面がある程度の湿り気を帯び、その後降雨が止んで馬蹄跡が押圧され易いような状態であった。

第16図　馬蹄の形
(A.Goubaux and G.Barrier 1892より)

第四に、これだけの蹄種別の様々な大きさをもった馬蹄跡の検出数と、ＦＰが極めて短期間に被覆したと思われる状況からみて、数頭の同一馬が繰り返し付けた蹄跡ではなく、ある程度まとまった個体数の放牧馬が存在した。

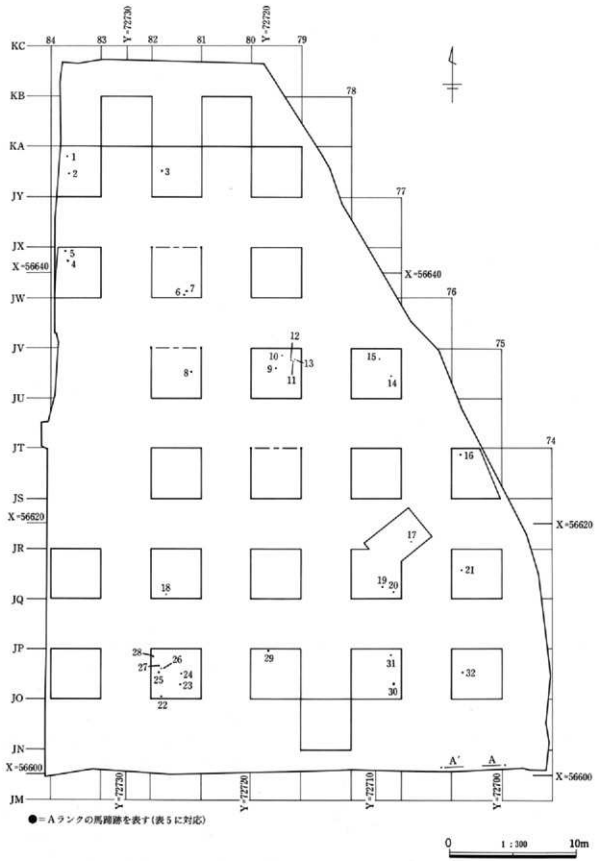
以上、四つの条件がすべて満たされることが必要であり、事実すべて満たされたものと思われる。

本遺跡での馬蹄計測の方法は、白井大宮遺跡で、宮崎重雄氏が行った方法を踏襲し、計測作業はすべて現場内の手実測で集計した。

白井大宮遺跡での計測方法は、検出された馬蹄にはそれぞれ遺存度にかなりの違いが生じているため、A・B・Cの3段階にランク分けして計測した。Aはかなり良好な遺存状況を示し、前蹄・後蹄の鑑定及び計測値に信頼のおけるもの。Cは馬蹄であることは確認されても、遺存状況が不良で、前蹄・後蹄の鑑定及び計測値にあまり信頼がおけないもの。Bはその中間であり、AとCのどちらにも属さないものである。

前蹄と後蹄の識別方法は、押圧された馬蹄圧痕の形状から判断し、円形に近いものは前蹄、卵円形で蹄尖がやや尖っているものは後蹄とした。なお、計測値のうち蹄幅のみを比較対象として扱ったのは、馬蹄の蹄尖部は地面に比較的深くめり込むが、蹄底の蹄踵部は蹄尖や蹄側部に比べずれや変形を免れず、境界線が不明瞭となり易い。したがって、蹄前後径の計測値は信頼性に欠けるという理由からである。

以上の分類方法によって計測した白井大宮Ⅱ遺跡のＦＰ下馬蹄跡の計測結果は、検出総数431個のうち前蹄については、Aランクに分類されたものが21個(表4)で、平均前蹄幅110.0㎜、同最小幅80.0㎜、同最大幅135.0㎜である。また、Bランクに分類されたものは32個で、平均前蹄幅109.3㎜、同最小幅75.0㎜、同最大幅140.0㎜である。



第17図　4面(FA上面)　グリット配置図及び馬蹄圧痕分布図

後蹄については、Aランクに分類されたものは10個(表4)で、平均後蹄幅100.0mm、同最小幅80.0mm、同最大幅110.0mmである。また、Bランクに分類されたものは28個で、平均後蹄幅99.8mm、同最小幅80.0mm、同最大幅130.0mmである。なお、宮崎氏の報告文からの引用では、中形在来馬(林田重幸、「日本在来馬の系統に関する研究」1978)に分類される木曾馬の蹄幅についての前蹄の計測が、辻井弘忠氏(「木曾馬の体型調査について」1984)によってなされている。それによれば、雌37頭の平均前蹄幅(筆者の算出)は105.1mm、同最小幅76.0mm、同最大幅129.0mmで、雄馬5頭の平均前蹄幅104.2mm、同最小幅95.0mm、同最大幅109.0mmとなっている。

以上の計測結果と辻井氏の計測結果から、本遺跡で検出された馬蹄跡と隣接する白井大宮遺跡・白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡検出の馬蹄跡の数値を比較した場合、5遺跡で得られた数値に多少の差はあるものの、同一の放牧馬集団ということを否定する計測結果とは言えず、周辺遺跡と同様に現存する木曾馬に近似した中形馬の存在が想定される。

5遺跡のFP上面での馬蹄跡の計測結果は表3のとおりである。

(2)3面(FPとFAに挟まれた黒褐色土中)の調査 第17・19図

3面の遺構確認作業は、FPとFAに挟まれた層厚約4～10cmの黒褐色土中を対象として行われた。この黒褐色土は、FAが降下堆積後に、FAを母材とし土壌化して形成された腐植土であり、土中にFAの細かい粒子を含んでいる。

調査方法は、グリッドの75・77・78・79・80・81・82・83ラインとJO・JP・JR・JT・JV・JX・KA・KBラインに沿って、4×4mのグリッドを調査区に26箇所設定し、ジョレンによる掘り下げ精査を実施した。そして必要に応じてグリッドの拡張を行った。

すべてのグリッドの北壁と西壁で、土層断面のセクション実測を行い、併せて遺構にかかったグリッド内では、畦状遺構、馬蹄痕、道跡の土層断面を図面に記録した。なお、黒褐色土中には、炭化物の他に種子が含まれていることがあるため、ウォーターセパレーション用にグリッドごとに土壌を採取し、その後洗浄して種子の有無を確認した。

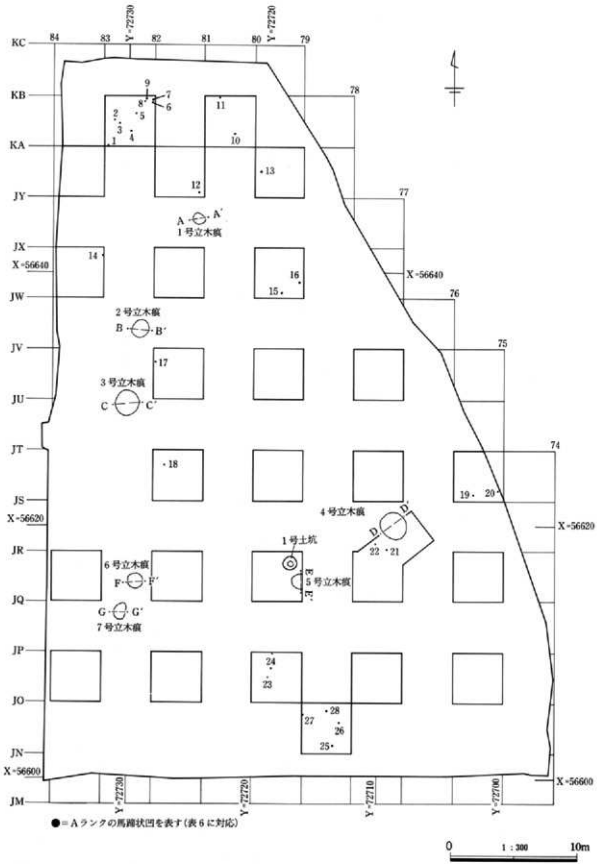
その結果、サンプリングした土壌からの種子等の採取は確認できなかったが、多量の植物根の細長い繊維が分別された。この植物根は調査時にも根を張っており、剪定バサミで切ることが可能であったが、このことは、FP下の黒褐色土がFAの土壌化した火山灰土であるにもかかわらず、植物が繁茂できる土壌に十分に成長していたと言うことであり、ヒエ属の栽培の可能性やススキ属、チガヤ属の生育する草原的な環境を推定する植物珪酸体分析の結果を補強するものと言える。

黒褐色土中からは、遺構は確認されなかったものの、土層断面の観察から、土層中に僅かに炭化物を含む箇所があることが認められた。このことは、周辺遺跡でも畦状遺構の層中や遺構面の黒褐色土中からも層状の炭化物として確認されており、畦の盛り直しあるいは農法としての火入れ・焼き払いの可能性が指摘されている。

(3)4面(Hr－FA上面)の調査 第17図 表5 写図3・4

4面の遺構確認面は、3面の黒褐色土を掘り抜いたFAの上面であり、3面の遺構確認作業で設定した同じグリッドを使用して掘り下げ精査を実施した。

調査の結果、2面で確認された馬蹄痕の踏み込み痕以外に、FAに押圧されたと思われる馬蹄圧痕が確認された。これは、FA降下直後に直接押圧された馬蹄痕ではなく、FA降下(6世紀第1四半期頃)後にFAが土壌化し3面に相当する黒褐色土が形成される過程のある時期に押圧された馬蹄痕であり、いわば上面で押圧された馬蹄痕が、下面のFAを踏み込んで変形させた部分の名残である。しかしながら、検出された馬蹄痕は、形状や蹄叉の有無によって判別し、蹄叉の残りも直接押圧したものでないためにFP下面のものとは明らかに異なっており、断定することはで



第18図　５面（ＦＡ下面）　グリット配置図・立木痕・馬蹄状凹分布図

きないものの、仮に確証が得られれば、ＦＰ直下の馬蹄跡よりも一段階古い馬の存在が提起される。因みに、白井大宮Ⅱ遺跡におけるＦＡ上面での馬蹄跡の計測結果は、検出総数171個のうち、比較的残存状態の良いもの(表３)については、前蹄が９個で、平均前蹄幅107.2mm、同最小幅104.1mm、同最大幅125.0mm、後蹄が23個で、平均後蹄幅99.7mm、同最小幅85.0mm、同最大幅125.0mmである。これはＦＰ下面で検出された馬蹄跡の計測結果を逸脱するものではない。

KA－79グリッド内では、ＦＡ面に痕跡を残す倒木痕が１箇所確認された。倒木は、北東方向に向かって倒れており、おそらくＦＡに伴う火砕流によってなぎ倒されたものと推測される。その根拠は、周辺遺跡の調査でも、該期の調査面での倒木のほとんどが北東方向か東方向へ倒れており、その原因ともなった火砕流堆積物による影響が、土層断面の観察によっても裏付けられている。

なお、２面、３面からの耕作痕らしき痕跡は、多少認められたものの確証を得るまでには至っていない。

(４)５面(Hr－FA下面)の調査 第18・19図 表６ 写図４・５

５面の遺構確認面は、ＦＡを掘り抜いた黒色土上面である。この面からも黒色土にＦＡが覆土として入り込んだ馬蹄圧痕に近似した円形状の凹みが多数検出され、遺存状態の比較的良好なものが28個認められた。しかしながら、前述したように検出された馬蹄痕は、形状や蹄叉の有無によってのみ判別しているので、４面と同様に馬蹄圧痕としての確証は得られていない。仮に該期の馬蹄跡だと仮定すれば、ＦＡ降下(６世紀第１四半期頃)以前にも当地域において、馬の存在の可能性があったことが示唆でき、当地域と馬との関わりを知る上でとても重要となってくるが、周辺遺跡での検出例も報告されていない現状では推測に過ぎない。馬蹄痕以外の馬に関わる遺構、遺物の検出が待たれるところである。

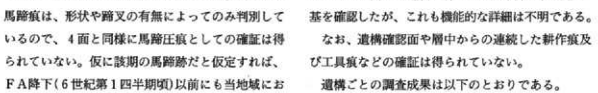
参考までにこの調査面での周辺遺跡の馬蹄圧痕以外の遺構・遺物としては、吹屋中原遺跡Ⅰ区で畦状遺構、吹屋中原遺跡Ⅱｂ区で竪穴状遺構、Ⅱ区で立木痕、吹屋犬子塚遺跡Ⅴ区で小区画水田、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ区で立木痕、白井丸岩遺跡２区でＦＡ下の道跡、白井南中道遺跡５区で畠の畝跡？、畦状遺構？と坩、鉄鏃の出土が報告されている。

白井大宮Ⅱ遺跡におけるＦＡ下面での馬蹄圧痕に近似した円形状の凹みの計測結果は、残存状態の比較的良いもの(表４)については、前蹄が17個で、平均前蹄幅107.3mm、同最小幅80.0mm、同最大幅120.0mm、後蹄が11個で、平均後蹄幅99.5mm、同最小幅95.0mm、同最大幅115.0mmであり、これもＦＰ下面で検出された馬蹄跡の計測結果を大きく逸脱するものではない。

他にJP－77グリッド内でＦＡの一次堆積層を覆土とし、遺物を伴わない円形状の浅い凹みを確認した。土層断面の観察では、下面の黒色土に攪乱を与えていない状況からみて立木痕ではなく、その性格は不明である。おそらくは下面の地表面の凹みにＦＡが部分的に堆積したものと思われる。また、JR－79グリッド内でも遺物を伴わない土坑(１号土坑)１基を確認したが、これも機能的な詳細は不明である。

なお、遺構確認面や層中からの連続した耕作痕及び工具痕などの確証は得られていない。

遺構ごとの調査成果は以下のとおりである。



南壁土層断面(JN－75・76)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。	3	桃色細粒火山灰	2層の直下に認められ極めて粘性が強く、しまりもある。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。	4	暗褐色黒ボク土	ＦＡ直下に堆積する黒ボク土との混土。

第19図　南壁土層断面図

◇１号土坑　第18・20図　写図４

位置　JR－79グリッド

重複　なし。

規模　1.08m×1.08m　深さ0.18m

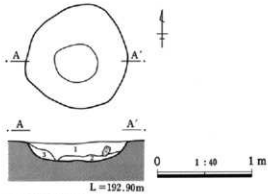
形状　平面形　ほぼ円形

断面形　周壁が緩やかな傾斜をもって底面へと続く。底面は平坦。

埋没土　暗黒褐色土・暗黄褐色土が堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　この面での土坑の検出は１基のみである。土層断面の観察から、自然埋没が看取できるが機能的な詳細は不明である。



１号土坑土層断面(JR－79)
1　暗黒褐色土　ＦＡの細粒ブロックを斑点状に含む。しまりあり。
2　暗黄褐色土　黒色土の細粒ブロックを含む。
3　暗黄褐色土　２層より色調がやや暗く、ＦＡ細粒ブロックを僅かに含む。

第20図　１号土坑

◆立木痕

前述したように、２面(ＦＰ下面)の遺構確認時に、地表面が円形状に僅かに凹む個所がJY－80・81、JW－82、JU－82・JV－82、JS－76・77、JR－82、JQ－82、JX－78・JY－78、JX－80・81グリッド内でそれぞれ８箇所確認されたが、その後のＦＡ下面の調査段階において断ち割り調査を実施したところ、土層断面の観察からJX－78・JY－78とJX－80・81グリッド内の２箇所を除いた６箇所と、JR－78・79グリッド内の凹みのない攪乱部分の１箇所が新たに立木痕と断定された。

立木痕の時期は、一番古いと思われるものはＦＡ降下以前のものがあり、続いてＦＡ降下以降からＦＡが土壌化して黒褐色土になるまでの間のもの、一番新しいと思われるものは、ＦＡ降下以降からＦＰ降下までの間のものである。

なお、JR－79グリッド内で検出された立木痕は、ＦＰ下面の段階では凹み状の落ち込みは確認されず、５面のＦＡ下面時の調査において初めて確認されたものである。周辺遺跡でも立木痕・倒木痕は数多く確認されており、ＦＰ下面の段階では、①すり鉢状の凹みを残すもの、②ピット状の凹みを残すもの、③凹みがないものの三種類が報告されている。

遺構ごとの調査成果は以下のとおりである。

◇１号立木痕　第18・21図　写図４

位置　JY－80・81グリッド

重複　なし。

規模　0.98m×0.88m　凹面の深さ0.11m

形状　平面形　卵円形

断面形　根部が淡色黒ボク土まで直に落ち込む。

埋没土　火砕流堆積物の粗粒火山灰が認められ、黒褐色土・ＦＡ・暗褐色黒ボク土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　ＦＰ下面の段階ですり鉢状の凹みを残す。断面の形状は直に落ち込むが、平面観察では、ＦＰ除去後の底面の一部にＦＡが露出している。また、毛根部に凹凸の痕跡を残す。ＦＰ下面の黒褐色土が自然堆積し、ＦＡが根元深くにまで入り込んでいる状況からみて、ＦＡ降下以前の所産と思われる。

◇２号立木痕　第18・21図　写図３

位置　JW－82グリッド

重複　なし。

規模　1.31m×1.30m　凹面の深さ0.10m

形状　平面形　卵円形

断面形　根部は比較的浅い。

埋没土　火砕流堆積物の粗粒火山灰は認められず、

暗褐色土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　ＦＰ下面の段階ですり鉢状の凹みと馬蹄痕を残す。ＦＡが一部攪乱を受け、ＦＰ直下の黒褐色土が凹み状に自然堆積し、ＦＡが根の部分に入り込んでいる状況からみて、ＦＡ降下以前の所産と思われる。

◇３号立木痕　第18・21図　写図４

位置　JU－82・JV－82グリッド

重複　なし。

規模　1.98m×1.86m　凹面の深さ0.14m

形状　平面形　ほぼ円形

断面形　根部が暗褐色土層まで直に掘り込む。

埋没土　火砕流堆積物の粗粒火山灰が一部で認められ、ＦＡ・暗褐色土・黒色黒ボク土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　ＦＰ下面の段階ですり鉢状の凹みを残す。ＦＡが根の部分に入り込み、ＦＰ直下の黒褐色土が凹み状に自然堆積している状況からみて、ＦＡ降下以前の所産と思われる。

◇４号立木痕　第18・22図

位置　JS－76・77グリッド

重複　なし。

規模　2.20m×1.90m　凹面の深さ0.19m

形状　平面形　楕円形

断面形　根部は直に掘り込み、範囲は比較的広い。

埋没土　火砕流堆積物の粗粒火山灰が認められ、ＦＡ・暗褐色黒色土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　ＦＰ下面の段階ですり鉢状の凹みと馬蹄痕を残す。ＦＰ下面の黒褐色土が自然堆積し、ＦＡに伴う火砕流堆積物の粗粒火山灰が根元深くにまで達しているもののほとんどが被覆している状況からみて、１・２・３号立木痕と同様にＦＡ降下以前の所産と思われる。

◇５号立木痕　第18・22図

位置　JR－78・79グリッド

重複　なし。

規模　1.12m×(0.89)m　凹面の深さ0.05m

形状　平面形　不明

断面形　根部は緩やかに落ち込み、範囲も広い。

埋没土　一部に火砕流堆積物の粗粒火山灰が認められ、ＦＡ・暗褐色細粒土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　２面のＦＰ下面の調査段階では、凹み面の最深部が５cmと僅かに低く、しかも形状も確認できなかったために、立木痕とは認識できなかった。したがって、５面の調査段階で初めて確認されたものである。ＦＰ直下の黒褐色土が凹み状に自然堆積し、しかもＦＡを掘りぬいている状況からみて、ＦＡ降下以降でＦＡが土壌化して黒褐色土になるまでの間の所産と思われる。

◇６号立木痕　第18・22図

位置　JR－82グリッド

重複　なし。

規模　1.24m×1.14m　凹面の深さ0.15m

形状　平面形　卵円形

断面形　根部は淡色黒ボク土まで掘り込み、範囲も広い。

埋没土　火砕流堆積物の粗粒火山灰は認められず、黒色黒ボク土・暗褐色土・褐色土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　ＦＰ下面の段階ですり鉢状の凹みと馬蹄痕を残す。ＦＰ直下の黒褐色土やＦＡが、凹み状に自然堆積し攪乱を受けていない状況からみて、１・２・３・４号立木痕と同様に、ＦＡ降下以前の所産と思われる。

◇7号立木痕　第18・22図　写図5

位置　JQ−82グリッド

重複　なし。

規模　1.28m×0.90m　凹面の深さ0.17m

形状　平面形　歪んだ楕円形

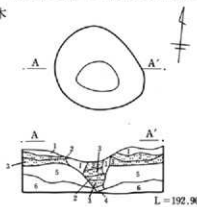
断面形　根部は浅く広い。

埋没土　火砕流堆積物の粗粒火山灰は認められず、暗褐色黒ボク土が攪乱堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　ＦＰ下面の段階ですり鉢状の凹みと馬蹄痕を残す。１・２・３・４・６号立木痕と同様に、ＦＰ直下の黒褐色土やＦＡが、凹み状に自然堆積し攪乱を受けていない状況からみて、ＦＡ降下以前の所産と思われる。

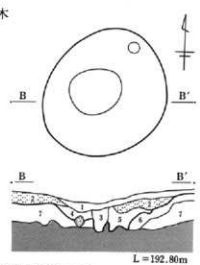
1号立木



1号立木痕土層断面(JY−80・81)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。
3	桃色細粒火山灰	２層の直下に認められ極めて粘性が強く、しまりもある。
4	暗褐色黒ボク土	ＦＡ直下に堆積する黒ボク土との混土。
5	黒色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。
6	淡色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。縄文後期の遺物出土。

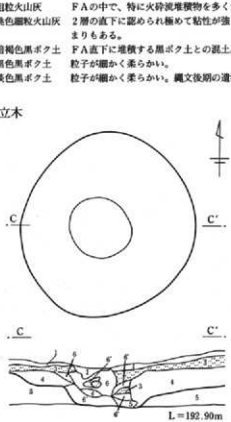
2号立木



2号立木痕土層断面(JW−82)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	Hr−FA	ＦＡの一次堆積層で、橙色ＦＡ粒・一部焼土化した炭化物を少量含む。
3	暗褐色土	大型の炭化物を含む。黒褐色土塊を含み、しまりゼしい。木痕本体部。
4	暗褐色土	やや硬い。ＦＡ下黒ボク土に近似。やや粘性に富む。
5	暗褐色土	４層に近似するが、大型の炭化物を含む。礫を含み、塊状堆積を呈する。
6	黒色土	ＦＡ直下の黒ボク土。均質で安定している。
7	淡色黒ボク土	鈍い褐色を呈する。均質で安定している。

3号立木



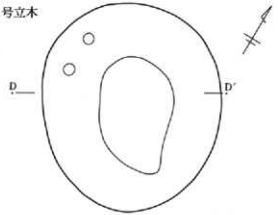
3号立木痕土層断面(JU−82・JV−82)

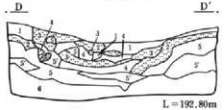
1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。
3	桃色細粒火山灰	２層の直下に認められ極めて粘性が強く、しまりもある。
4	黒色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。
5	淡色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。縄文後期の遺物が出土。
6	暗褐色土	ＦＡ細粒を多量に含む。
6′	暗褐色土	６層に土質が近似するが、ＦＡ細粒を少量含む。

0　1：40　1m

第21図　1〜3号立木痕

4号立木

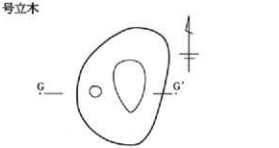


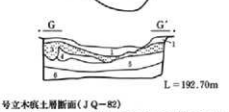


4号立木底土層断面(JS－76・77)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。
3	桃色細粒火山灰	2層の直下に認められ極めて粘性が強いＦＡ。しまりあり。
4	暗褐色黒色土	ＦＡ直下の黒ボク土との混土。ＦＡ混じり。
5	黒色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。
5′	黒褐色黒ボク土	5層と6層との混土。
6	淡色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。縄文後期の遺物が出土。

7号立木

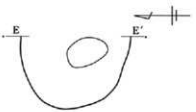


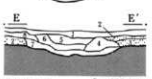


7号立木底土層断面(ＪＱ－82)

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。
3	桃色細粒火山灰	2層の直下に認められ極めて粘性が強く、しまりもある。
4	暗褐色黒ボク土	ＦＡ直下の黒ボク土との混土。ＦＡ混じり。
5	黒色土	ＦＡ下の土壌。粒子が細かく柔らかい。
6	淡色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。縄文後期の遺物が出土。

5号立木

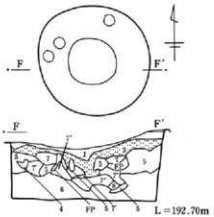




5号立木底土層断面(JR－78・79)　L＝193.00m

1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。
3	桃色細粒火山灰	2層の直下に認められ極めて粘性が強く、しまりもある。
4	桃灰褐色土	ＦＡ下部の火山灰層との混じり。しまりに富む。
5	桃灰褐色土	4層よりも色調がやや暗い。しまりに富む。
6	暗褐色細粒土	5層よりも色調がやや暗く、しまりが弱まる。
7	暗褐色細粒土	3層のＦＡ細粒ブロックを所々に含む。やや粘性あり。
8	暗褐色細粒土	しまりに富み、炭化物を少量含む。

6号立木

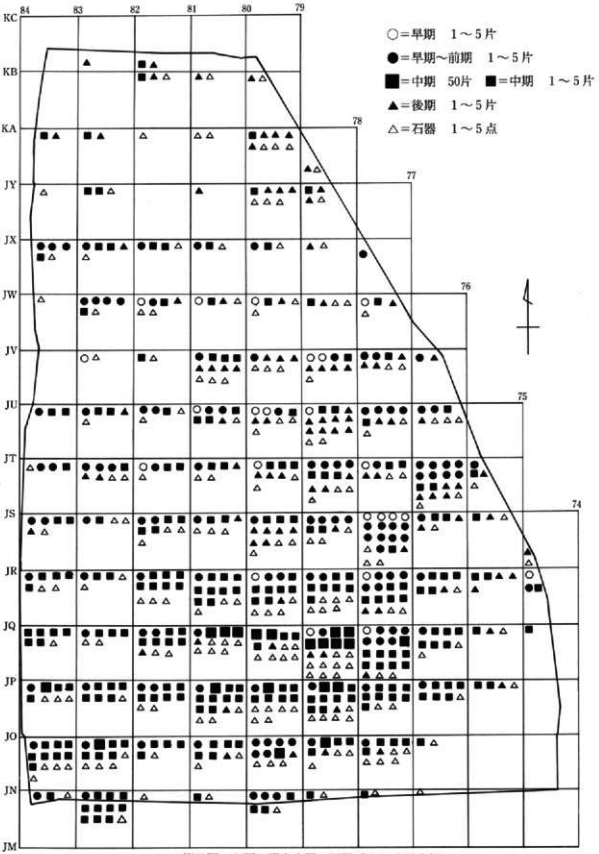


6号立木底土層断面(JR－82)

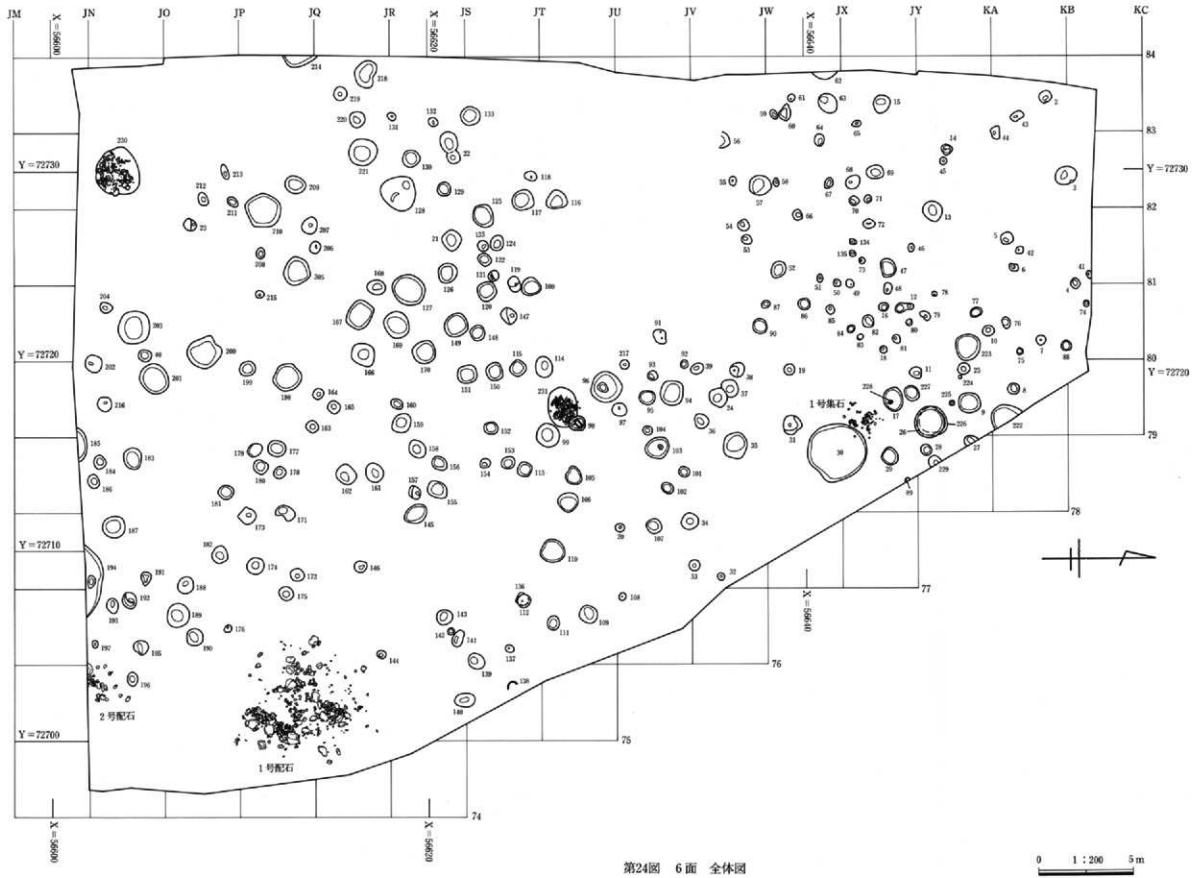
1	黒褐色土	ＦＰ直下のＦＡが土壌化した火山灰土。ＦＰとＦＡの間層。
2	粗粒火山灰	ＦＡの中で、特に火砕流堆積物を多く含む層。
3	桃色細粒火山灰	2層の直下に認められ極めて粘性が強いＦＡ。しまりあり。
4	暗褐色黒ボク土	ＦＡ直下の黒ボク土との混土。ＦＡ混じり。
5	黒色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。
6	淡色黒ボク土	粒子が細かく柔らかい。縄文後期の遺物が出土。
7	暗褐色土	焼土を含み、炭化物を多く含む。
7′	暗茶褐色土	5層よりも色調がやや弱く、ＦＡを含む。
7″	暗茶褐色土	5層よりも色調がやや暗く、炭化物を少量含む。
8	褐色土	非常に固くしまっている。

0　1：40　1m

第22図　4～7号立木痕



第23図　6面　縄文土器・石器グリッド別分布


JM
JN
JO
JP
JQ
JR
JS
JT
JU
JV
JW
JX
JY
KA
KB
KC
X=56600
X=56620
X=56640
Y=72730
Y=72720
Y=72710
Y=72700
84
83
82
81
80
79
78
77
76
75
74
1号集石
2号配石
1号配石
0
1：200
5m

第24図　6面　全体図

3．縄文時代の遺構と遺物

概要　6面の遺構確認面は、暗褐色土中と褐色土中の遺物包含層であり、それぞれ縄文時代早期から前期、中期から後期に相当する。

調査は5面で設定した4×4mのグリッドを使用し、遺物が集中した箇所をさらに拡張する調査方法を選択して、調査区全域の掘り下げ精査を実施した。その結果、調査区全域の上・中・下層から、遺物を伴わないものも含めて230基の大小様々な土坑群を検出した。なお、上層で検出された2～24号土坑、中・下層で検出された222～229号土坑に関しては、分層が可能だったため図面上に記録した。

調査の結果、調査区中央部から南東部にかけての下層からは、縄文時代早期の条痕文系土器群の集中的な出土が認められ、調査区中央部に至っては、該期の集石土坑1基(231号土坑)も検出された。近接する白井大宮遺跡でも、縄文時代前期と中期の遺物包含層が確認され、該期の貴重な資料が得られたが、今回の調査では、新たに早期と後期の希少な出土遺物が得られ、なおかつ遺構の検出も果たし得たことは貴重な成果と言える。

調査区全域で縄文時代中期から後期の遺物包含層の存在が明らかとなり、遺物包含層の層位的な調査過程において、JY－78・79グリッド内からは、石の集中する箇所(1号集石)が一箇所認められた。特に遺物が集中する箇所は調査区の南側で顕著であり、中期の土坑1基(230号土坑)、後期の配石遺構2基(1・2号配石)が確認された。

出土遺物には土器片以外にも土器片と混在して石器類が多量に出土し、剝片石器を含め石材鑑定をした総数は38種類、2,326点に上る。出土石材の種類と割合(表7)は、黒色頁岩が全体の64.4%を占めて圧倒的に多く、次いで粗粒輝石安山岩の7.2%、細粒輝石安山岩の3.4%、珪質頁岩の3.0%、石英閃緑岩の2.9%の順である。石器の器種別点数と割合(表8)では、不定形剝片石器が38.7%と最も多く、次いで磨石の36.5%、打製石斧の9.4%、石核の3.4%、スクレイパーの1.8%、石鏃の1.2%と続く。石核には№93と№94の様に接合可能な資料も含まれており、比較的大きな石核も出土している。

石材の産出地は、大部分が本遺跡地に近接して流れる利根川水系の河床であり、このことは、剝片石器類が多量に出土している割には、製品類が極端に少ないことや、出土石器類の接合資料が何点かあることからみて、縄文時代中期における河岸段丘中位面(白井面)での石器製作址の蓋然性を呈するものと言える。

遺構ごとの調査成果は以下のとりまとめである。

◇231号土坑　口絵　第24・25・36図　写図5・6

位置　JU－79グリッド

重複　98号土坑と北東隅が重複する。

規模　2.07m×1.54m　深さ0.31m

形状　平面形　楕円形

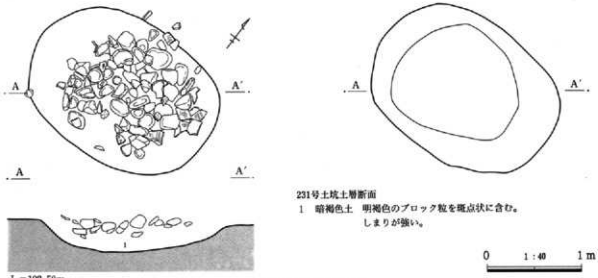
断面形　底面に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜し、西側の立ち上がりは東側の立ち上がりに比べてやや急である。

埋没土　土層上位に円礫や土器片が集中して堆積し、その下位に明褐色のブロック粒を斑点状に含むしまりの強い暗褐色土が一次堆積する。

出土遺物　縄文時代早期の条痕文系土器・磨石・円礫

調査所見　調査当初は、遺物の集中する集石とみられたが、特に土坑中位から上層にかけて、縄文時代早期の条痕文系土器片が円礫群と混在して集中して出土する集石土坑である。近接するJQ－77、JR－77・78、JS－77・78、JT－76・77・78、JU－77グリッド内からも同様の土器片の散布が認められ、特にJT－76グリッド内では集中的に土器が出土した。また、土坑の形状を示す集石箇所は、JU－79グリッド内の土坑1箇所のみである。

土坑内に集中する円礫は、粗粒輝石安山岩、石英閃緑岩などが主体を占め、人為的な遺物の集中が窺える集石土坑であるが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



第25図　231号土坑

◇230号土坑

口絵　第24・26・42～48・55図
写図5・10～15

位置　JO－82グリッド

重複　なし。

規模　2.44m×2.30m　深さ0.32m

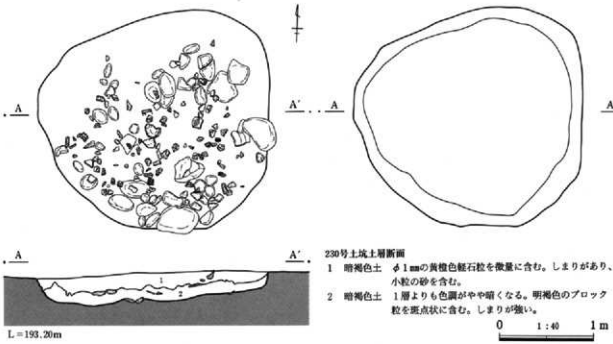
形状　平面形　歪んだ卵形

断面形　東側は底面に向かってほぼ直に落ち込み、西側は底面に向かって緩やかに傾斜する。底面はほぼ平坦。

埋没土　暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　中期の焼町型土器・北陸系浅鉢・打製石斧・不定形剝片石器・磨石・接合資料

調査所見　遺物はほとんどが破片で集中して出土する。特に土坑縁辺に大型の礫を伴って出土し、打製石斧や磨石も多く含まれる。中期の土器片が多数出土することから、土坑の形成時期は縄文時代中期と考えられる。



第26図　230号土坑

◇1号配石 第24・27・40～42・44～46・49～51・54・56・57・63・67～71図 写真25・9～11・13・16・17・20～22・25・28～30

位置 JQ－74・75・76、JR－74・75・76グリッド

重複 なし。

規模 7.50m×6.40m

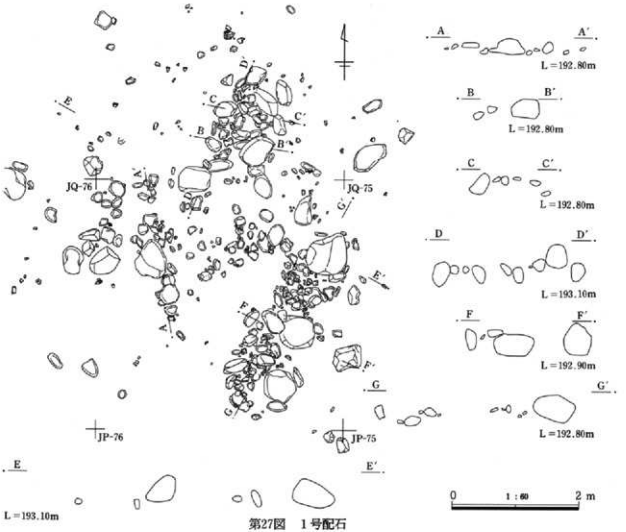
形状 平面形は不定形であり、特定の遺構を示す形状は認められない。

埋没土 暗褐色土が覆土として堆積する。

石材 粗粒輝石安山岩、ひん岩、石英閃緑岩、溶結凝灰岩、輝緑岩、変輝緑岩、砂質頁岩、変質安山岩珪質頁岩、珪質変質岩、砂岩、文象斑岩、石英斑岩、片状ホルンフェルス、変玄武岩、かんらん岩、流紋岩、黒色頁岩、閃緑岩

出土遺物 中期と後期の土器片・凹石・敲石・スクレイパー・打製石斧・石核・台石・不定形剝片石器・磨石・接合資料・剝片。

調査所見 比較的大きく間隔も一定な円礫列が、南西から北東方向にかけてライン上に2箇所、東西方向に1箇所看取でき、また、小礫が集中するブロックも全体で4箇所認められ、本来何らかの形状をもっていたものと思われる。配石に伴ったその他の痕跡は確認できなかった。土器は後期と中期の土器片が層位を異にして出土する。石器は凹石も出土し、不定形剝片や磨石も多く含まれる。出土遺物から配石の時期は後期と考えられる。自然的な要因による元位置からの礫移動が認められ遺存状態は不良であるが、配石のレベル的位置が同じことや形状も僅かに規則性を残すことなどから見て、人為的な円礫群の配置を窺うことはできる。なお、配石の機能的な詳細は不明である。



第27図 1号配石

◇2号配石　第24・28・64図　写図26

位置　JO－75・76グリッド

重複　なし。

規模　南側の延長部が調査区外、東側が廃土用の斜路にあたるため、全容は不明である。

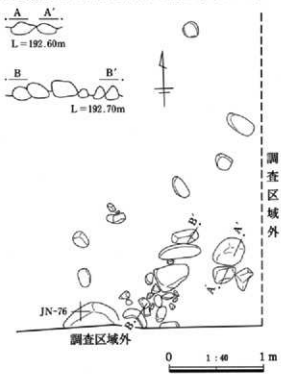
形状　一部調査区外にあたるため、平面形の全容は不明である。

石材　粗粒輝石安山岩、ひん岩、デイサイト

埋没土　暗褐色土が覆土として堆積する。

出土遺物　後期の土器片・磨石・石核

調査所見　配石のほとんどが調査区外及び調査範囲外にあたるために全容は明らかでないが、1号配石と同様に南西から北東方向にかけて、ライン上に並ぶ円礫列が看取できるものの、配石に伴ったその他の遺構は確認できなかった。1号配石と同様に、自然的な要因による元位置からの礫移動が認められ遺存状態は不良であるが、配石のレベル的位置が同じことや形状も僅かに規則性を残すことなどから見て、人為的な礫群の配置を窺うことはできる。配石の時期は、1号配石と同様に後期と考えられる。



第28図　2号配石

◇1号集石　第24・29図　写図5

位置　JY－78・79グリッド

重複　30号土坑と重複する。

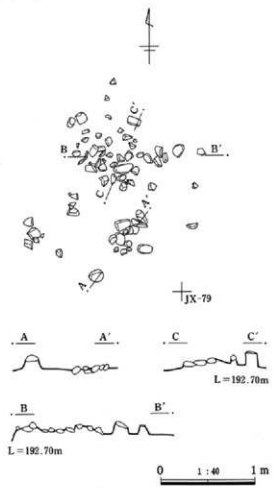
規模　1.08m×1.08m

形状　平面形　歪んだ楕円形域内に、3箇所の礫集中ブロックが認められる。

埋没土　暗黄褐色土が堆積する。

出土遺物　磨石、不定形剥片石器、円礫

調査所見　一部が30号土坑の北西部と近接するが、30土坑との関係は認められない。また、遺物取り上げ後の精査でも、集石土坑としての形状や落ち込みは認められなかった。出土石材は、粗粒輝石、安山岩、石英閃緑岩、変質安山岩、珪質頁岩、ひん岩、デイサイト、文象斑岩、黒色頁岩であり、石器は磨石が多い。



第29図　1号集石

◇222号土坑　第24・30図

位置　KB－79グリッド

重複　なし。

規模　3.20m×(1.52m)　深さ0.22m

形状　平面形　不明

断面形　南東側がやや底面に向かって落ち込む。

埋没土　暗黒褐色土・明褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　土坑の全形は調査区外にかかるために明らかではないが、掘り込みが浅く底面が不規則なため、機能的な詳細は不明である。

◇223号土坑　第24・30図

位置　KA－79・80グリッド

重複　なし。

規模　2.75m×2.55m　深さ0.22m

形状　平面形　ほぼ円形

断面形　底面に向かって緩やかに傾斜する。

埋没土　暗黒褐色土・暗褐色土・明褐色土の堆積。

出土遺物　なし。

調査所見　中央部が先行して埋没し、その後外側から徐々に自然埋没した様子は窺えるが、機能的な詳細は不明である。

◇224号土坑　第24・30図

位置　KA－79グリッド

重複　なし。

規模　0.45m×0.35m　深さ0.15m

形状　平面形　楕円形

断面形　底面に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜する。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　外側から徐々に自然埋没した様子は窺える。遺物も伴わないことから、機能的な詳細は不明である。

◇225号土坑　第24・31図

位置　KA－79グリッド

重複　なし。

規模　0.55m×0.51m　深さ0.10m

形状　平面形　ほぼ円形

断面形　底面に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜する。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　外側から徐々に自然埋没した様子は窺える。また、層中に僅かに炭化粒が含まれるが、その原因は不明である。

◇226号土坑　第24・31・53図　写図18

位置　KA－78・79グリッド

重複　なし。

規模　2.98m×3.21m　深さ0.17m

形状　平面形　楕円形

断面形　底面に向かって緩やかに傾斜する。

埋没土　暗褐色土・明褐色土が自然堆積する。

出土遺物　石匙

調査所見　中央部が先行して埋没し、その後外側から徐々に自然埋没した様子は窺える。比較的大きく浅い土坑である。石匙が1点出土したが、機能的な詳細は不明である。

◇227号土坑　第24・31図

位置　JY－79・KA－79グリッド

重複　なし。

規模　1.66m×1.58m　深さ0.16m

形状　平面形　楕円形

断面形　底面に向かって緩やかに傾斜する。

埋没土　暗褐色土・明褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　東側から徐々に自然埋没した様子は窺えるが、機能的な詳細は不明である。

◇228号土坑　第24・31図

位置　JY−79グリッド

重複　なし。

規模　0.39m×0.35m　深さ0.11m

形状　平面形　円形

断面形　底面に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜する。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　東側から徐々に自然埋没した様子は窺える。規模は小さく遺物は伴わないことから、機能的な詳細は不明である。

◇229号土坑　第24・31図

位置　KA−78グリッド

重複　なし。

規模　1.54m×(0.89)m　深さ0.43m

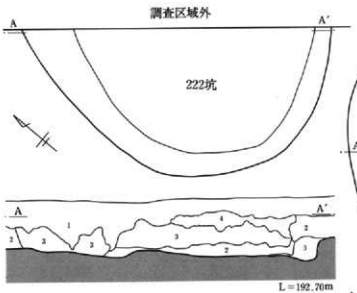
形状　平面形　不明

断面形　底面に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜する。

埋没土　黒色土・明暗褐色土・明暗褐色土が自然堆積。

出土遺物　なし。

調査所見　全形は調査区外にあるため不明である。南東側から徐々に自然埋没した様子は窺えるが、機能的な詳細は不明である。



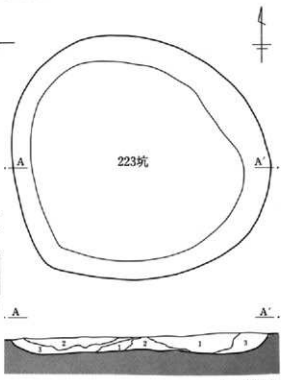
222号土坑土層断面

1　暗黒褐色土　層序の中で一番暗い。黄橙色軽石粒を斑点状に含む。しまりあり。

2　明褐色土　層序の中で一番明るい。黄橙色軽石粒を極めて少量含む。しまりに富む。

3　明褐色土　2層よりも暗い。黄橙色軽石粒を少量斑点状に含む。しまりあり。

4　明褐色土　3層よりも暗い。しまりがあり、黄橙色軽石粒を少量含む。



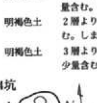
223号土坑土層断面

1　暗黒褐色土　粒子細かくしまりあり。黄橙色軽石粒を少量含む。

2　暗褐色土　1層よりもやや色調が明るく、明褐色土の細粒ブロックを少量含む。

3　明褐色土　色調が明るく粒子細かい。しまりに富む。

224坑



224号土坑土層断面

1　黒褐色土　黄橙色軽石φ1〜2mmをまばらに含む。ややしまりあり。炭化粒を少量含む。

2　暗褐色土　粒子が極めて細かく、極小の白色粒を含む。

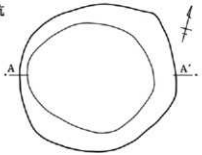
0　1：40　1m

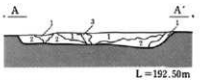
第30図　222〜224号土坑

225坑

225号土坑土層断面
1　黒褐色土　黄橙色軽石φ1～2㎜をまばらに含む。ややしまりあり。炭化粒を少量含む。
2　暗褐色土　粒子が極めて細かく、極小の白色粒を含む。

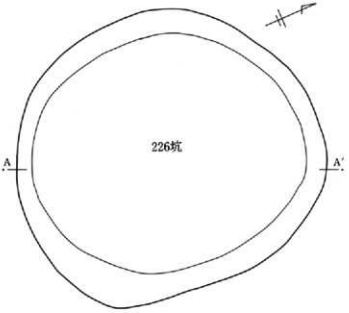
227坑





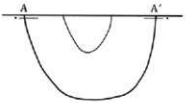
227号土坑土層断面
1　暗褐色土　粒子細かくしまりあり。黄橙色軽石粒を少量含む。
2　暗褐色土　1層よりもやや色調が明るく、明褐色土の細粒ブロックを少量含む。
3　明褐色土　色調がやや明るく、粒子が細かい。しまりに富む。

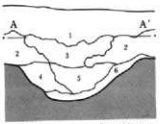
226坑



226号土坑土層断面
1　暗褐色土　粒子細かくしまりあり。黄橙色軽石粒を少量含む。
2　暗褐色土　1層よりもやや色調が明るく、明褐色土の細粒ブロックを少量含む。
3　明褐色土　色調がやや明るく、粒子が細かい。しまりに富む。

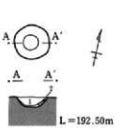
229坑





229号土坑土層断面
1　黒色土　FA下の黒色土。しまりあり。
2　明褐色土　中・小粒の白色軽石を斑点状に含む。しまりあり。
3　明褐色土　中・小粒の白色軽石を多量に含む。
4　明暗褐色土　粒子が細かくよくしまっている。
5　明暗褐色土　中粒の白色軽石を多量に含む。
6　明暗褐色土　中粒の白色軽石を少量含む。ややしまりあり。

228坑



228号土坑土層断面
1　黒褐色土　黄橙色軽石φ1～2㎜をまばらに含む。ややしまりあり。炭化粒を少量含む。
2　暗褐色土　粒子が極めて細かく、極小の白色粒を含む。

0　1：40　1m

第31図　225～229号土坑

◇2号土坑　第24・32図

位置　KB－83グリッド
重複　なし。
規模　0.64m×0.65m　深さ0.28m
形状　平面形　ほぼ円形
　断面形　東側に深く落ち込む。
埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。
出土遺物　礫片
調査所見　礫片を2点含み、底面内に小穴が3箇所。

◇3号土坑　第24・32図

位置　KB－82・KC－82グリッド
重複　なし。
規模　1.0m×1.04m　深さ0.35m
形状　平面形　楕円形
　断面形　南東側に浅く落ち込む。
埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。
出土遺物　礫
調査所見　中央やや南よりに落ち込む箇所が認められるが、機能的な詳細は不明である。

◇4号土坑　第24・32図

位置　KC－80・81グリッド
重複　なし。
規模　0.45m×0.55m　深さ0.24m
形状　平面形　歪んだ楕円形
　断面形　底面に向かって緩やかに傾斜する。
埋没土　暗褐色土・鈍褐色土が水平堆積する。
出土遺物　なし。
調査所見　鈍褐色土は淡色黒ボク土に極めて近似し、地山の可能性が否めない。

◇5号土坑　第24・32図

位置　KB－81グリッド
重複　なし。
規模　0.62m×0.65m　深さ0.25m
形状　平面形　ほぼ円形
　断面形　東側に浅く落ち込む。
埋没土　暗褐色土が自然堆積する。
出土遺物　なし。
調査所見　自然埋没したことが看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇6号土坑　第24・33図

位置　KB－81グリッド
重複　なし。
規模　0.45m×0.36m　深さ0.20m
形状　平面形　歪んだ方形
　断面形　底部に向かって緩やかに傾斜する。
埋没土　暗褐色土・鈍褐色土が自然堆積する。
出土遺物　磨石
調査所見　鈍褐色土は淡色黒ボク土に極めて近似し、地山の可能性が否めない。

◇7号土坑　第24・33図

位置　KB－80グリッド
重複　なし。
規模　0.50m×0.50m　深さ0.20m
形状　平面形　円形
　断面形　底面に向かって緩やかに傾斜する。
埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。
出土遺物　なし。
調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇8号土坑　第24・33図

位置　KB－79グリッド
重複　なし。
規模　0.55m×0.60m　深さ0.20m
形状　平面形　歪んだ楕円形
　断面形　底部に向かって急激に落ち込む。
埋没土　黒褐色土・鈍褐色土が自然堆積する。
出土遺物　なし。
調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇9号土坑　第24・33図

位置　KA−79グリッド

重複　なし。

規模　1.03m×1.13m　深さ0.12m

形状　平面形　楕円形

断面形　底部に向かって緩やかに落ち込む。

埋没土　暗褐色土・鈍褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　鈍褐色土は淡色黒ボク土ながら、明らかに地山ではなく、機能的な詳細は不明である。

◇10号土坑　第24・33図

位置　KA−80・KB−80グリッド

重複　なし。

規模　0.60m×0.55m　深さ0.29m

形状　平面形　楕円形

断面形　底部に向かって急激に落ち込む。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　中央に向かって急激に落ち込むピットは、柱痕の可能性がある。

◇11号土坑　第24・33図

位置　JY−79・KA−79グリッド

重複　なし。

規模　0.61m×0.66m　深さ0.23m

形状　平面形　歪んだ楕円形

断面形　底面に向かって緩やかに傾斜する。

埋没土　黒褐色土・鈍褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇12号土坑　第24・33図

位置　JY−80グリッド

重複　なし。

規模　0.51m×0.95m　深さ0.35m

形状　平面形　ひょうたん形

断面形　底面に向かって急激に落ち込む。

埋没土　黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　直に落ち込むピットは、柱痕の可能性があるが、機能的な詳細は不明である。

◇13号土坑　第24・33図

位置　KA−81・82グリッド

重複　なし。

規模　1.0m×1.02m　深さ0.36m

形状　平面形　歪んだ卵形

断面形　底面に向かってすり鉢状に傾斜する。

埋没土　黒褐色土・褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　レンズ状堆積が認められるが、機能的な詳細は不明である。

◇14号土坑　第24・33図

位置　KA−82グリッド

重複　なし。

規模　0.58m×0.60m　深さ0.24m

形状　平面形　歪んだ卵形

断面形　底面に向かって急激に落ち込む。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　磨石・円礫

調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇15号土坑　第24・34図

位置　JY−83グリッド

重複　なし。

規模　0.92m×0.88m　深さ0.25m

形状　平面形　卵形

断面形　西側に段差をもって緩やかに落ち込む。

埋没土　褐色土が自然堆積する。

出土遺物　不定形剥片石器

調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇16号土坑　第24・34図

位置　JY−80グリッド

重複　なし。

規模　0.46m×0.48m　深さ0.25m

形状　平面形　歪んだ楕円形

断面形　底面に向かって急激に落ち込む。

埋没土　黒褐色土・鈍褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇17号土坑　第24・34図

位置　JY−79グリッド

重複　なし。

規模　1.20m×1.0m　深さ0.21m

形状　平面形　卵形

断面形　南西側がやや低いが、底面はほぼ平坦である。

埋没土　暗褐色土・鈍褐色土が自然堆積する。

出土遺物　後期の土器片。

調査所見　後期土器片が集中して出土するが、周辺遺構外も同様な様相をみせる。故に本土坑に伴う土器ではなく、包含層あるいは住居跡に帰属するものと考えられる。

◇18号土坑　第24・34図

位置　JY−80グリッド

重複　なし。

規模　0.40m×0.39m　深さ0.23m

形状　平面形　円形

断面形　底面に向かって急激に落ち込む。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　直に落ち込むピットは、柱痕の可能性があるが、機能的な詳細は不明である。

◇19号土坑　第24・34図

位置　JX−79グリッド

重複　なし。

規模　0.60m×0.60m　深さ0.45m

形状　平面形　円形

断面形　南西側に段差をもって落ち込む。

埋没土　暗褐色土・褐色土・黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　自然埋没が看取できるが、機能的な詳細は不明である。

◇20号土坑　第24・34図

位置　JU−77・JV−77グリッド

重複　なし。

規模　0.48m×0.50m　深さ0.23m

形状　平面形　円形

断面形　底面に向かって直に落ち込む。

埋没土　暗褐色土・明褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　直に落ち込むピットは、柱痕の可能性があるが、機能的な詳細は不明である。

◇21号土坑　第24・34図

位置　JS−81グリッド

重複　なし。

規模　1.10m×1.0m　深さ0.35m

形状　平面形　ほぼ円形

断面形　底面に向かってすり鉢状に落ち込む。

埋没土　黒褐色土・暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　外側から徐々に埋没した様子は窺えるが、機能的な詳細は不明である。

◇22号土坑　第24・35図

位置　JS－82・83グリッド

重複　なし。

規模　1.68m×0.89m　深さ0.48m

形状　平面形　ひょうたん形
断面形　北東側から南西側にかけて段差をもって緩やかに落ち込む。

埋没土　黒色土・黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土・明褐色土が細かい分層で自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　北東部が埋没した後に南西部が掘り込まれたことが認められるが、機能的な詳細は不明。

◇23号土坑　第24・35図

位置　JP－81グリッド

重複　なし。

規模　0.65m×0.64m　深さ0.25m

形状　平面形　ほぼ円形
断面形　底面に向かってすり鉢状に傾斜する。

埋没土　暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物　なし。

調査所見　外側から徐々に自然埋没した様子は窺えるが、機能的な詳細は不明である。

◇24号土坑　第24・35図

位置　JW－79グリッド

重複　37号土坑と北西隅が重複する。

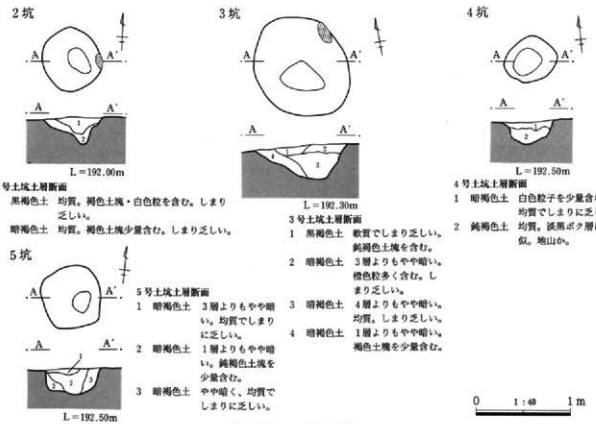
規模　0.92m×0.98m　深さ0.30m

形状　平面形　ほぼ円形
断面形　底面に向かってすり鉢状に緩やかに傾斜する。

埋没土　黒色土・暗褐色土が自然堆積する。

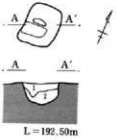
出土遺物　なし。

調査所見　外側から徐々に自然埋没した様子は窺えるが、機能的な詳細は不明である。



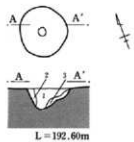
第32図　2～5号土坑

6坑



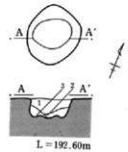
6号土坑土層断面
1　暗褐色土　褐色土塊と斑状堆積。均質でしまりに乏しい。
2　鈍褐色土　淡黒ボク層に近似。地山か。

7坑



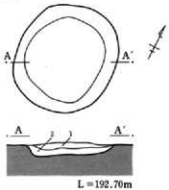
7号土坑土層断面
1　黒褐色土　小型の褐色土塊を少量含む。やや粘性をもつ。
2　黒褐色土　1層よりも暗く、均質。しまりに乏しい。
3　暗褐色土　明るいが2層よりも暗い。褐色土塊を含む。

8坑



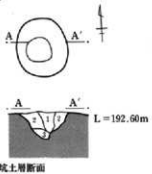
8号土坑土層断面
1　黒褐色土　均質。褐色土塊を少量含む。しまりに乏しい。
2　鈍褐色土　3層よりもやや暗い。均質でしまりに乏しい。
3　鈍褐色土　1層よりもやや暗い。

9坑



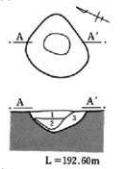
9号土坑土層断面
1　暗褐色土　白色粒を少量含む。
2　鈍褐色土　やや暗い。淡黒ボク層に近似。

10坑



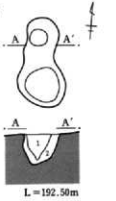
10号土坑土層断面
1　黒褐色土　均質でしまりに富む。白色粒を含み、柱痕か。
2　黒褐色土　1層よりも暗い。褐色土塊との斑状堆積。
3　暗褐色土　2層よりも暗い。褐色土塊を多く含む。

11坑



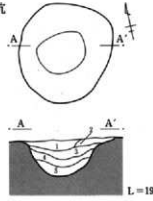
11号土坑土層断面
1　黒褐色土　白色粒・褐色土塊を含む。しまりに乏しい。
2　黒褐色土　やや明るい。褐色土塊を多く含む。
3　鈍褐色土　褐色土塊を主体とするが均質。

12坑



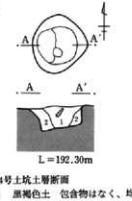
12号土坑土層断面
1　黒褐色土　白色粒を少量含む。しまりに乏しい。柱痕か。
2　黒褐色土　1層よりも暗い。大型の褐色土塊を含む。しまりに乏しい。

13坑



13号土坑土層断面
1　黒褐色土　やや明るい。褐色土塊を含み、不均質。しまりに乏しい。
2　褐色土　3層よりも暗い。洪状の堆積か。均質。
3　褐色土　4層よりも暗い。やや鈍い色調を呈す。均質でしまりに乏しい。
4　暗褐色土　5層よりも暗い。褐色土塊と斑状堆積。均質。
5　暗褐色土　1層よりも暗い。均質でしまりに乏しい。

14坑

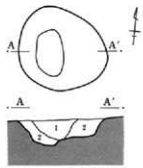


14号土坑土層断面
1　黒褐色土　包含物はなく、均質。しまりに富む。
2　暗褐色土　褐色土塊を少量含む。しまりに乏しい。

0　1：40　1 m

第33図　6～14号土坑

15坑

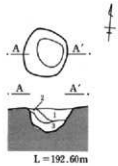


15号土坑土層断面

1　褐色土　やや鈍い色調。褐色土と斑状堆積。しまりに乏しい。

2　褐色土　1層よりも暗く、均質でしまりに乏しい。

16坑



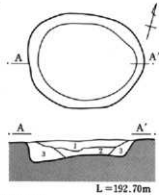
16号土坑土層断面

1　黒褐色土　均質。しまりに乏しい。

2　鈍褐色土　褐色土小塊を多く含む。しまりに乏しい。

3　鈍褐色土　褐色土塊を多く含む。しまりに乏しい。

17坑



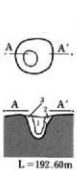
17号土坑土層断面

1　暗褐色土　褐色土塊・橙色粒を含む。均質でしまりに乏しい。

2　鈍褐色土　3層よりも暗い。黄褐色土塊を主体とする。しまりに乏しい。

3　暗褐色土　1層よりも暗い。均質。黄褐色小塊を少量含む。しまりに乏しい。

18坑



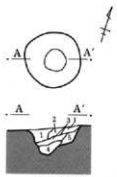
18号土坑土層断面

1　黒褐色土　包含物少なく均質。柱痕か。

2　暗褐色土　3層よりも暗い。褐色土小塊を含む。しまりに乏しい。

3　黒褐色土　1層よりも暗い。褐色土小塊を多く含む。しまりに乏しい。

19坑



19号土坑土層断面

1　暗褐色土　やや暗い。均質で褐色土塊を少量含む。

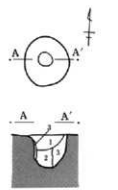
2　褐色土　黄橙色粒を多く含む。しまり良好。均質。

3　黒褐色土　やや明るい。包含物はなく均質。しまりに乏しい。

4　黒褐色土　やや明るい。褐色土小塊を少量含む。しまりに乏しい。

5　暗褐色土　褐色土塊を多く含む。しまりに乏しい。

20坑



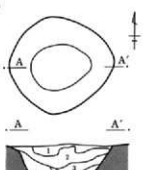
20号土坑土層断面

1　暗褐色土　橙色軽石粒φ1mmを斑点状に含む。しまりあり。

2　暗褐色土　1層に比べ、やや色調が明るく、粒子が細かく柔らかい。柱痕底部か。

3　明褐色土　橙黄色ブロックを多く含む。橙色軽石粒を上層に少量含む。

21坑



21号土坑土層断面

1　黒褐色土　色調が暗く、橙色軽石粒の少粒φ1mmをまばらに含む。柔らかいがしまりあり。

2　暗褐色土　橙色軽石粒の中粒を少量含み、黄橙色のブロックをまばらに含む。粒子が均一でしまりあり。レンズ状堆積を呈する。

3　暗褐色土　2層に土質は極めて近い。黄橙色の小ブロックを含む。色調がやや暗い。

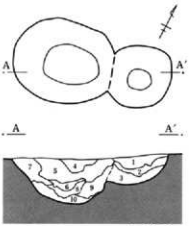
4　暗褐色土　3層に土質が近似する。しまりに富む。

5　暗褐色土　橙色軽石粒を斑点状に少量含む。小石混じり。三角堆土を呈する。

0　1：40　1m

第34図　15～21号土坑

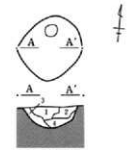
22坑



22号土坑土層断面

1　黒色土　　橙色軽石粒を斑点状に含む。
2　黄褐色土　黄橙色大ブロックが立ち上がり部分に認められる。レンズ状堆積を呈する。粒子は細かく均一。
3　暗褐色土　粒子が非常に細かく均一。しまりあり。
4　黒褐色土　橙色軽石粒を斑点状にまばらに含む。黄灰色ブロックを所々に含む。
5　暗褐色土　黄灰色大ブロックをまばらに含む。橙色軽石小粒を斑点状に少量含む。
6　暗褐色土　粒子が細かく均一。しまりに富む。橙色軽石小粒は含まない。
7　黒褐色土　４層に色調が極めて近く、橙色軽石粒を上層に少量含む。橙灰色大ブロック片を含む。
8　明褐色土　黄色橙色ブロックを多量に含み、粒子均一で細かい。しまりに富む。
9　暗褐色土　上部に橙色軽石粒が少量認められる。粒子均一。
10　明褐色土　８層に近似するが、色調がやや明るい。非常に固い。

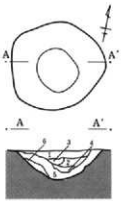
23坑



23号土坑土層断面

1　暗褐色土　４層よりもやや暗い。橙色軽石粒φ２mmを斑点状に含み、固くしまっている。底部はレンズ状堆積を呈する。
2　暗褐色土　１層よりも色調が明るく、橙色軽石粒の量は少なくなる。東側からの流れ込み。
3　暗褐色土　２層よりもやや暗い。橙色軽石粒をほとんど含まない。黄橙色ブロック粒を少量含む。西側からの流れ込み。
4　暗褐色土　３層よりもやや暗く、２層に土質が類似するが、粒子のきめが非常に細かく柔らかい。

24坑



24号土坑土層断面

1　黒色土　　橙色軽石粒φ１mmを少量含む。粒子細かく柔らかい。
2　黒色土　　１層と土質が類似しているが、色調がやや明るくなる。
3　暗褐色土　橙色軽石小粒を斑点状に含む。黄橙色のブロック片を多く含む。
4　暗褐色土　３層に土質が似ているが、橙色軽石粒をほとんど含まない。色調がやや明るくなる。
5　暗褐色土　色調は２層に近似するがやや明るい。橙色軽石粒を壁落ち込み部分に少量認められる。粒子均一で柔らかい。
6　暗褐色土　色調は層序の中で一番明るい。黄橙色ブロックが多量に混じる。粒子細かく均一。しまりあり。

0　1:40　1m

第35図　22～24号土坑

＜参考文献＞

『黒井塚遺跡発掘調査報告書』 子持村教育委員会　1990

『白井大宮遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993

『白井遺跡群』一集落編Ⅰ一（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994

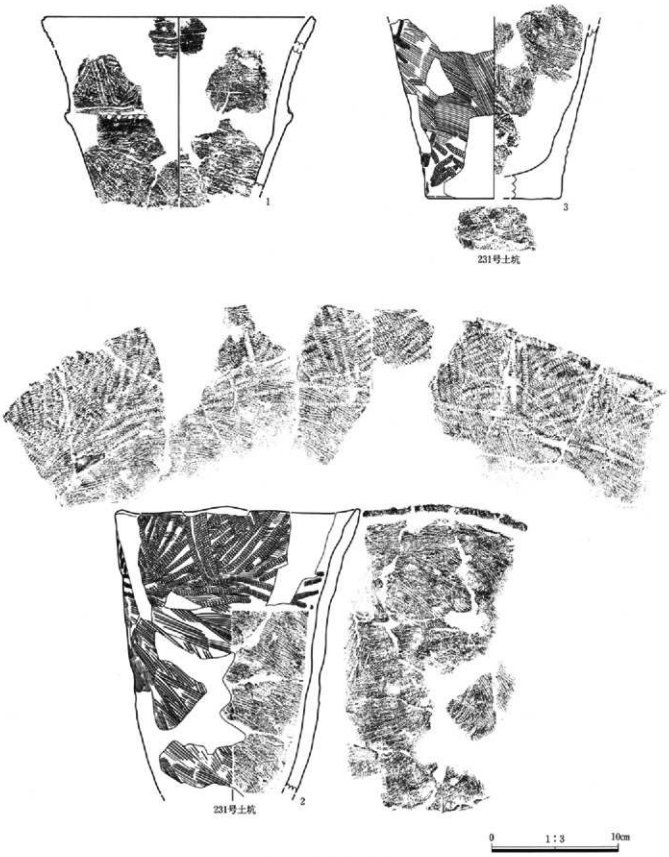
『白井北中道遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊（古代・中近世編）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996

『吹屋広田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996

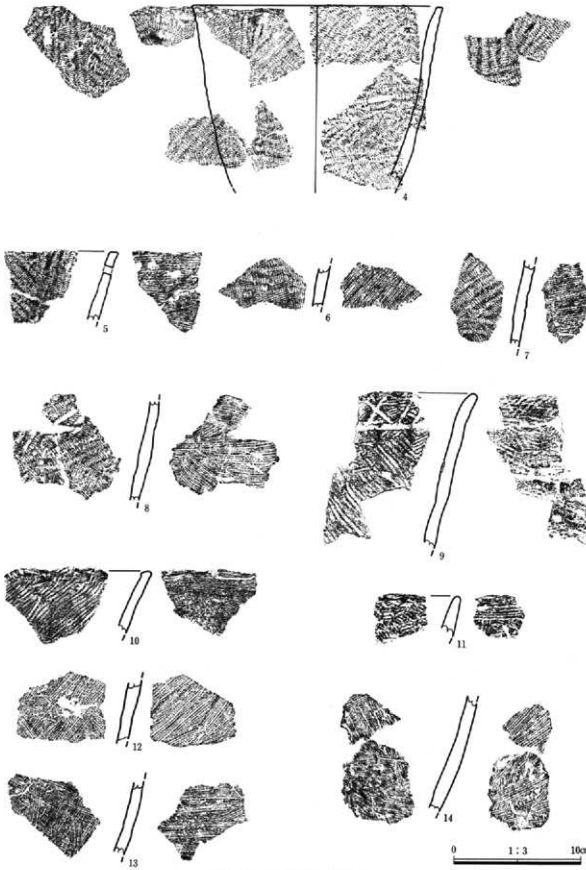
『白井遺跡群』一古墳時代編一（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997

『白井北中道遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第２冊（旧石器・縄文時代編）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998

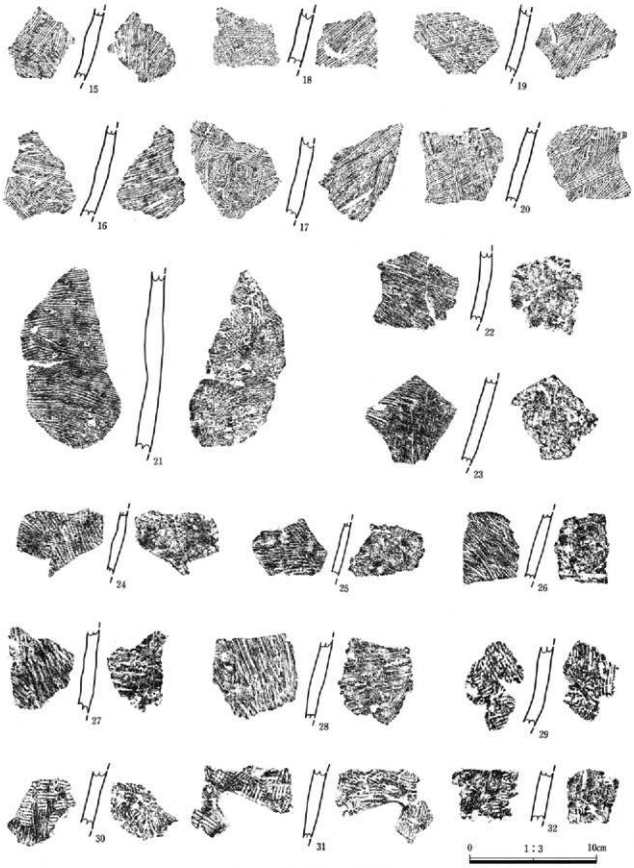
『白井北中道遺跡（道の駅地点）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000



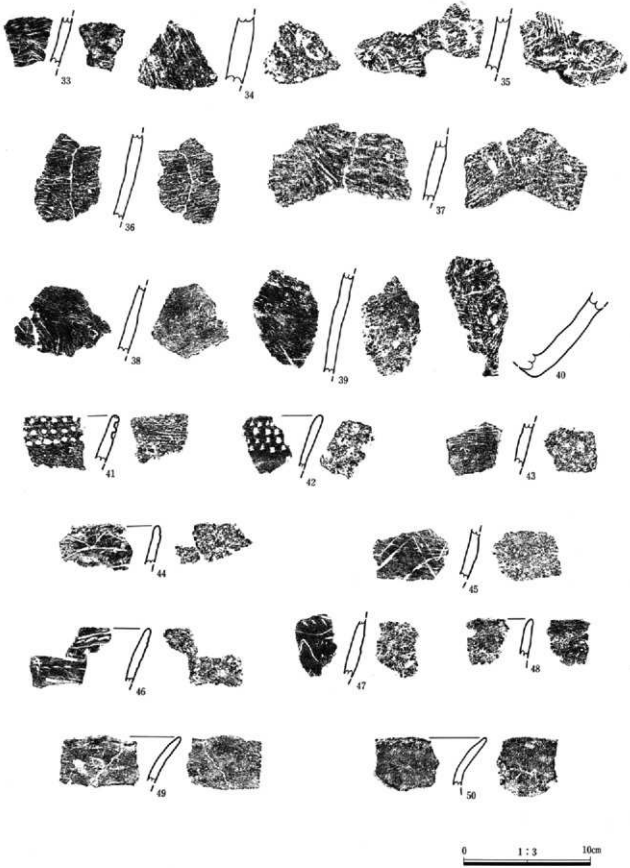
第36図　縄文時代の土器(1)



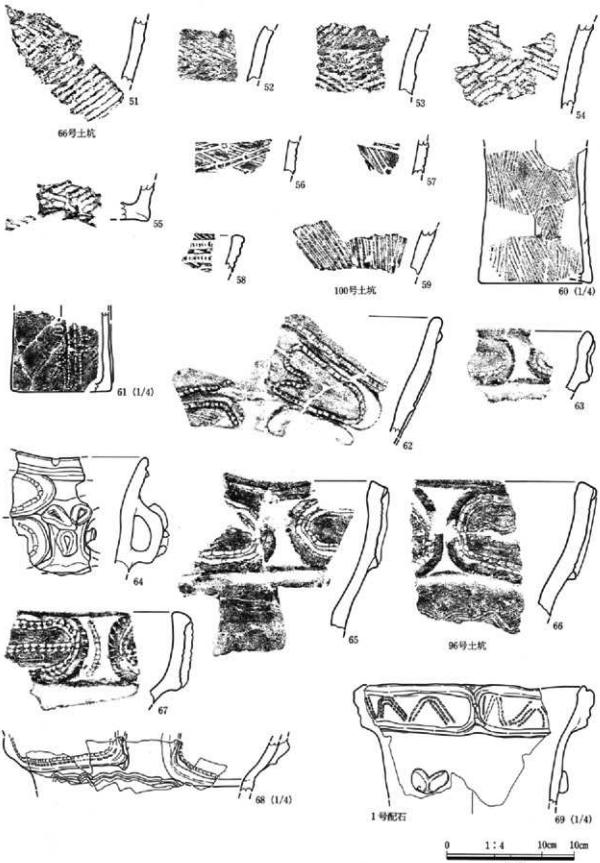
第37図　縄文時代の土器（２）



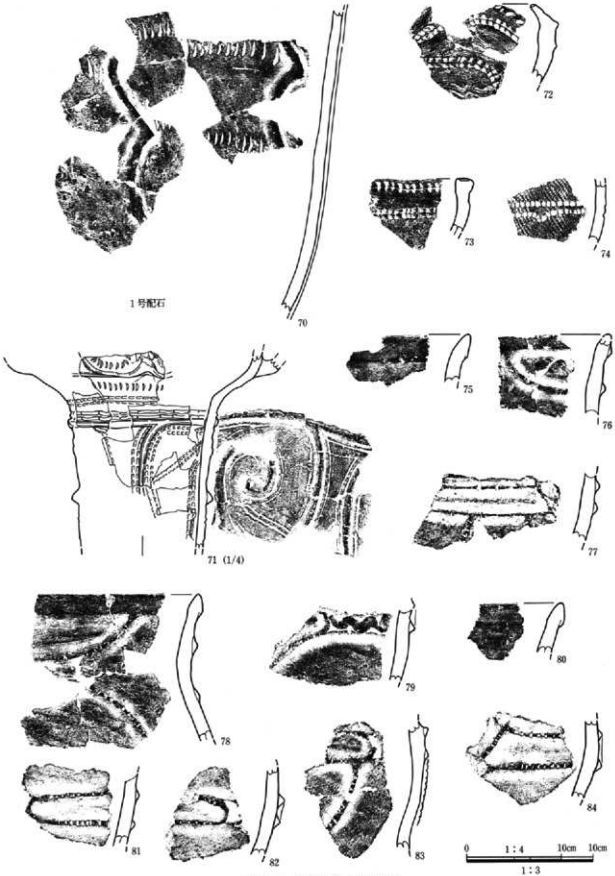
第38図　縄文時代の土器(3)



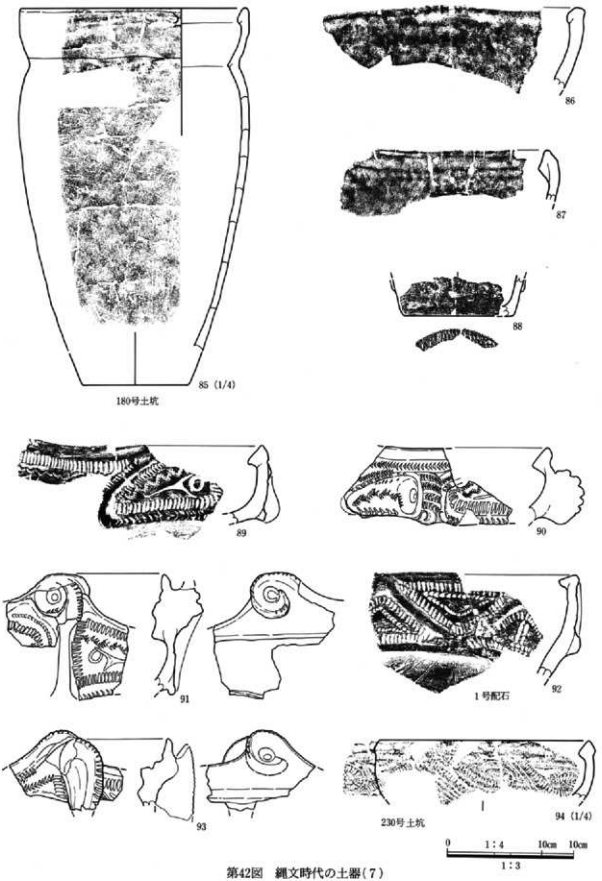
第39図　縄文時代の土器(4)



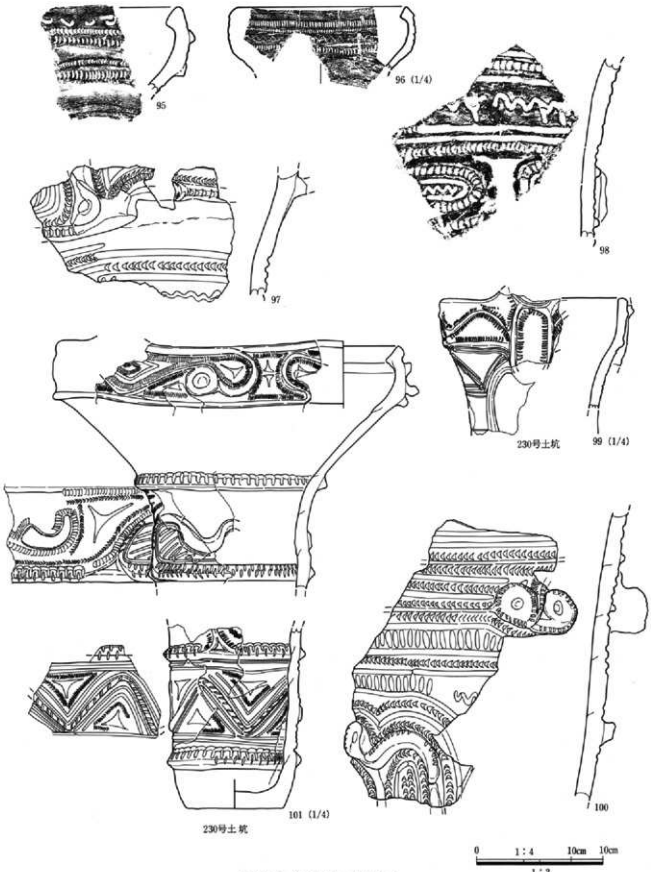
第40図　縄文時代の土器(5)



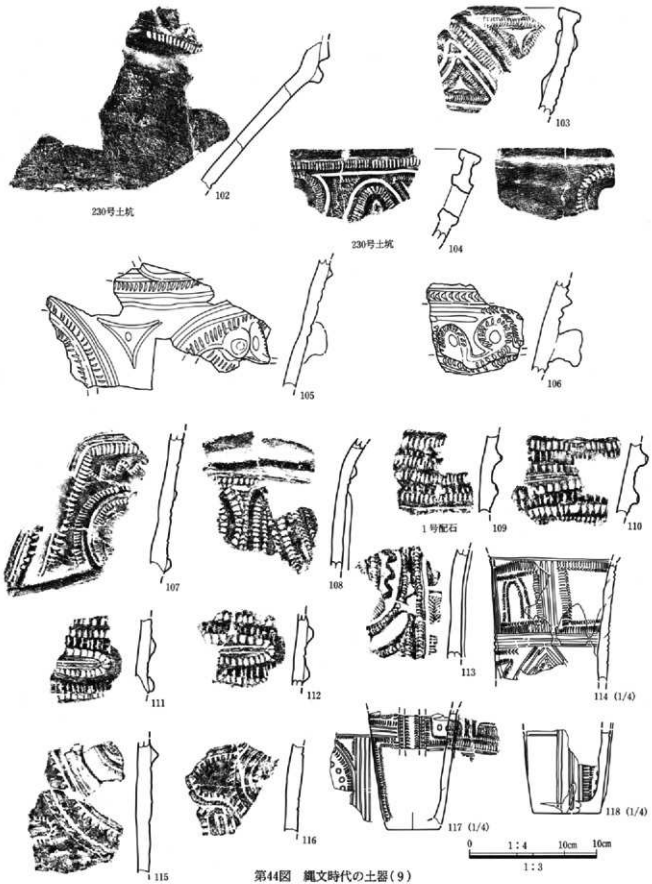
第41図　縄文時代の土器(6)



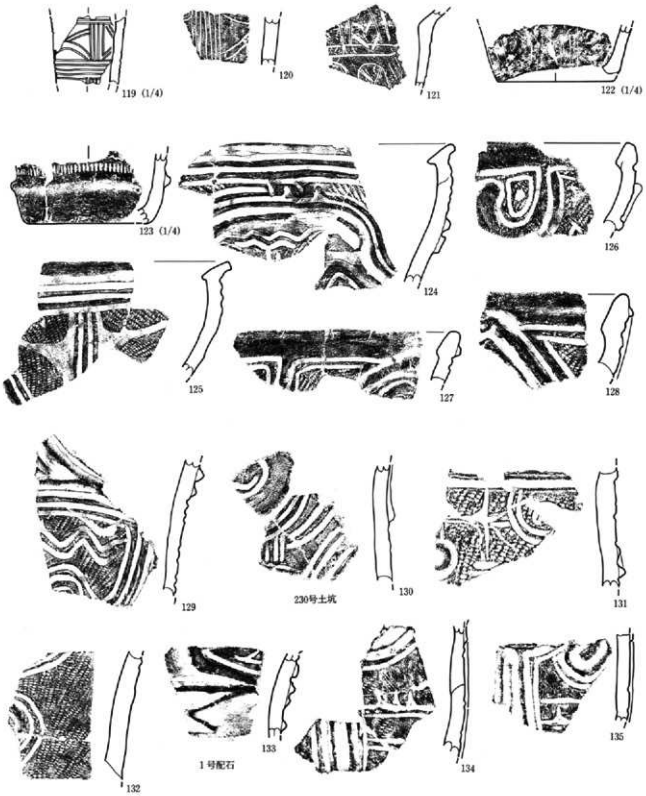
第42図　縄文時代の土器（7）



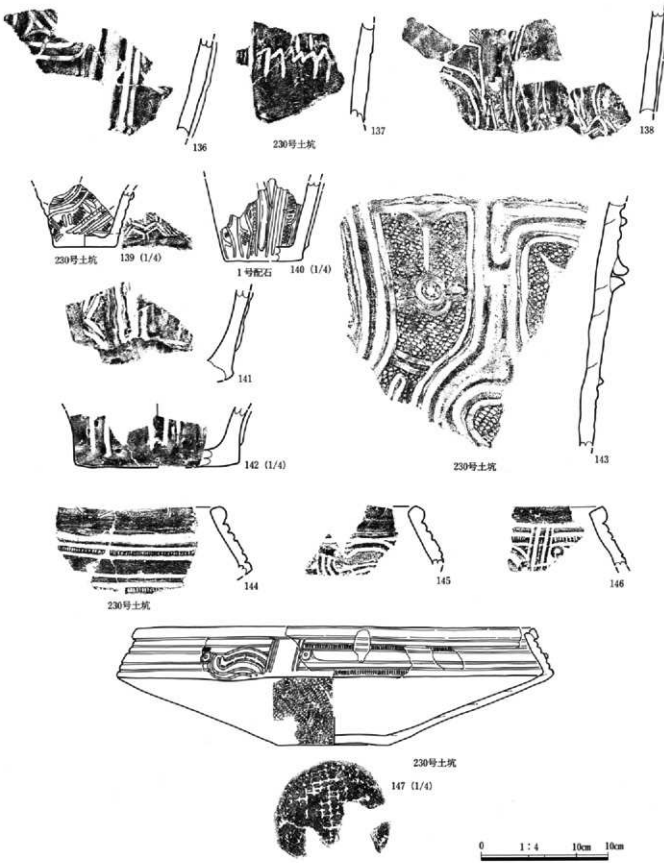
第43図　縄文時代の土器（８）



第44図　縄文時代の土器(9)

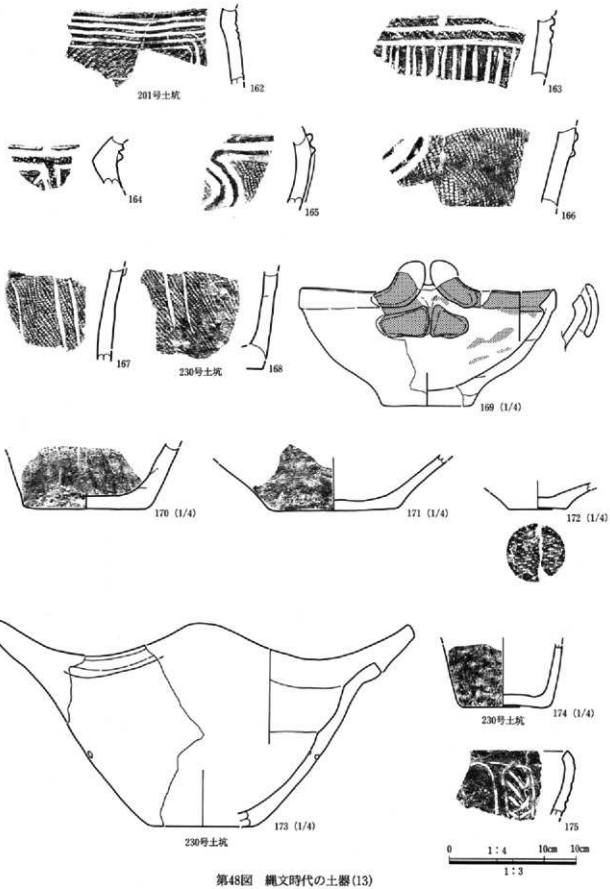


第45図　縄文時代の土器(10)

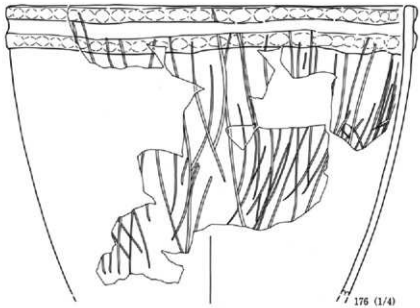


第46図　縄文時代の土器(11)

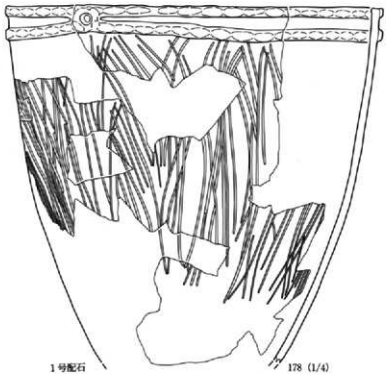
第47図　縄文時代の土器(12)

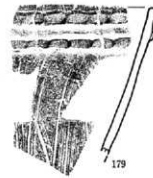


第48図　縄文時代の土器(13)



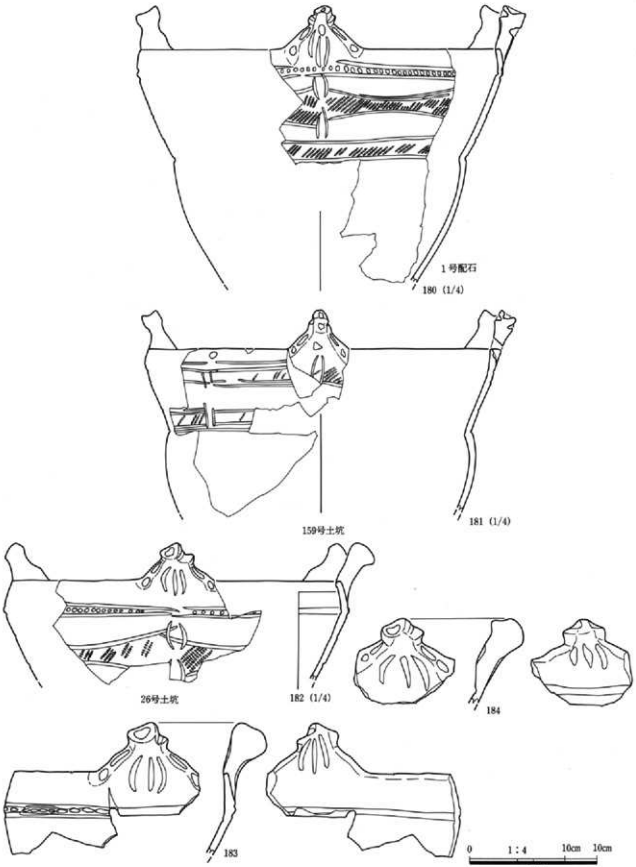
17号土坑



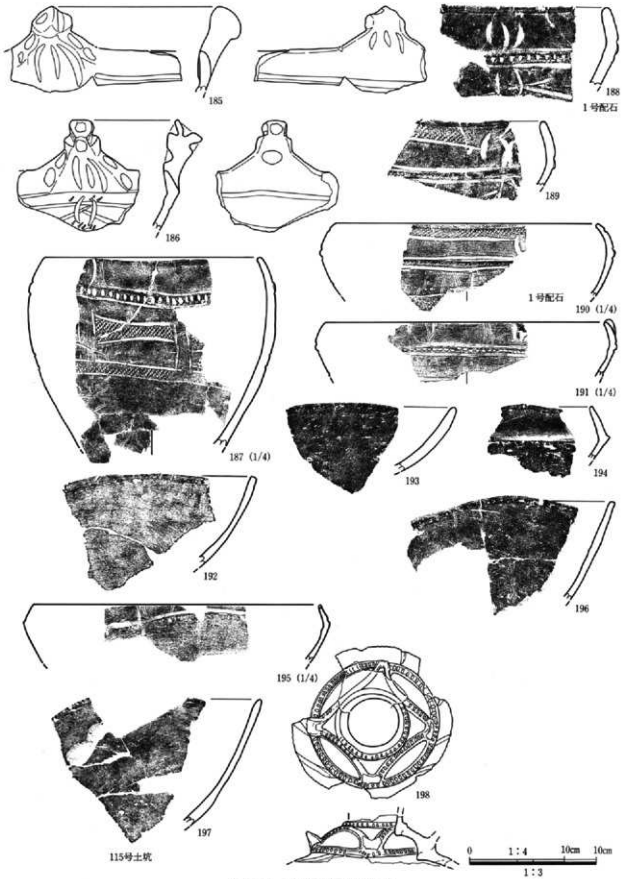


0　1：4　10cm　10cm
1：3

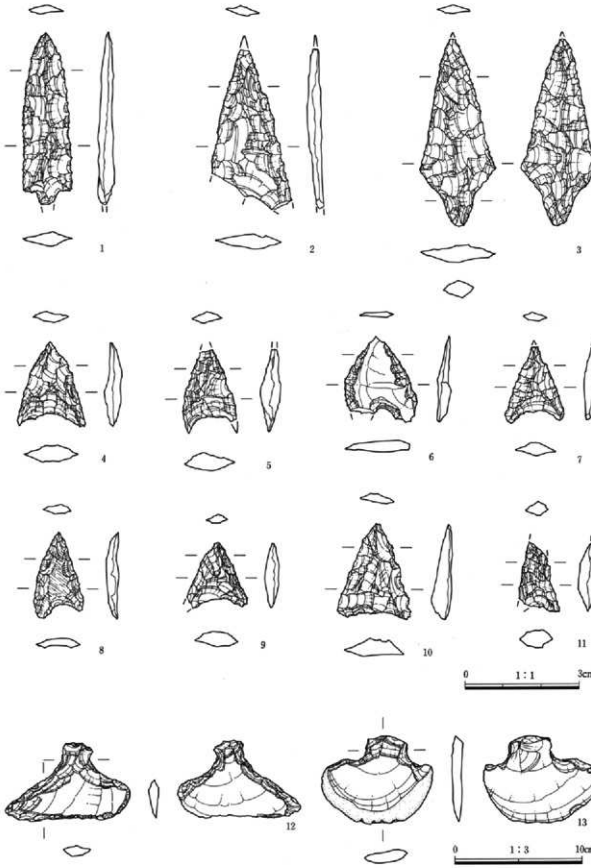
第49図　縄文時代の土器(14)



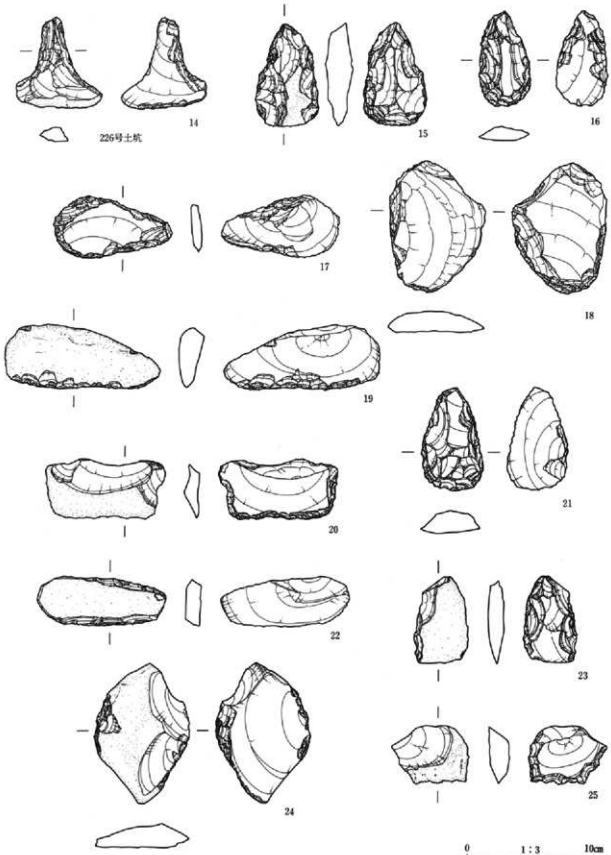
第50図　縄文時代の土器(15)



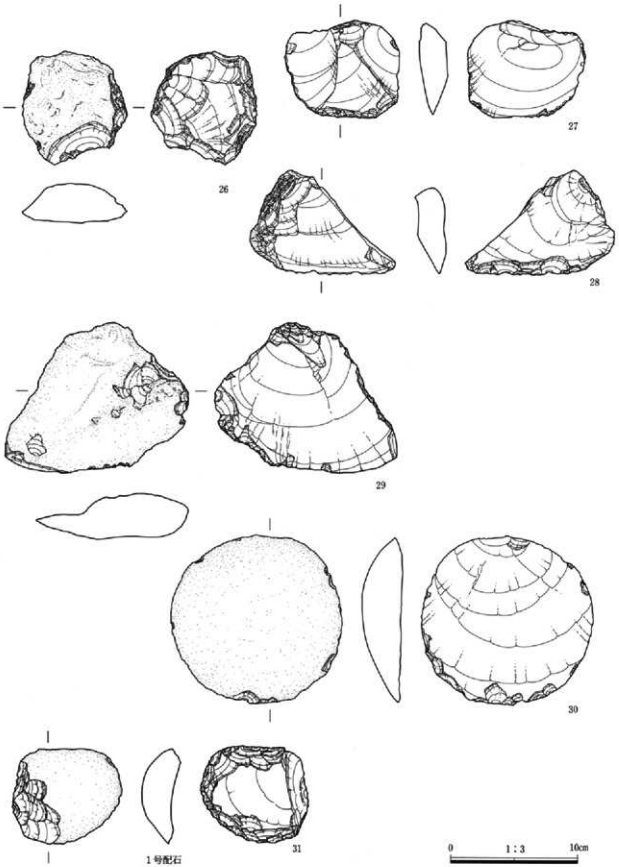
第51図　縄文時代の土器(16)



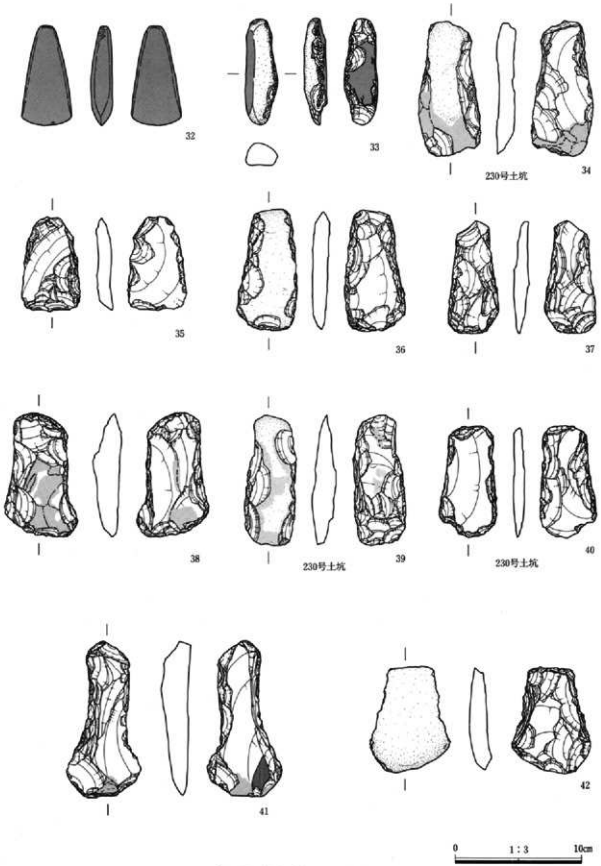
第52図　縄文時代の石器(1)



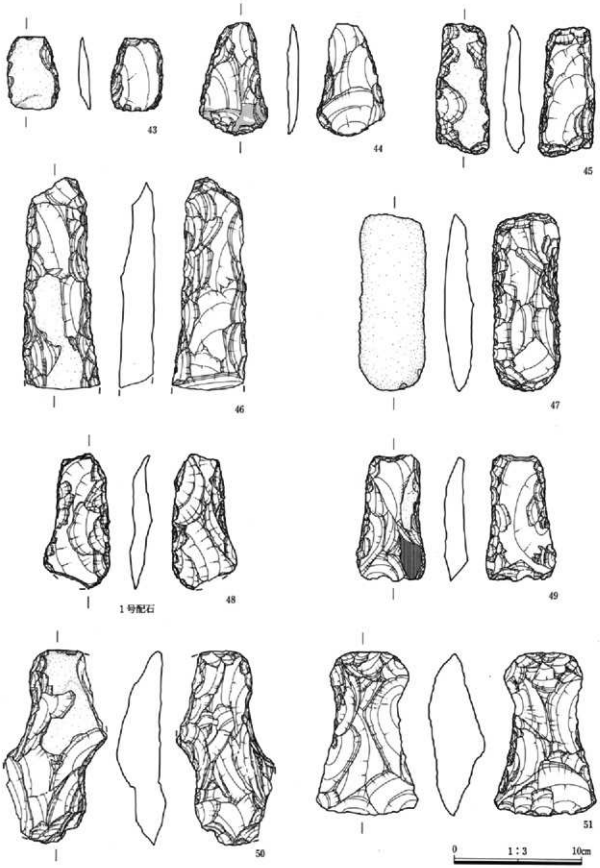
第53図　縄文時代の石器（２）



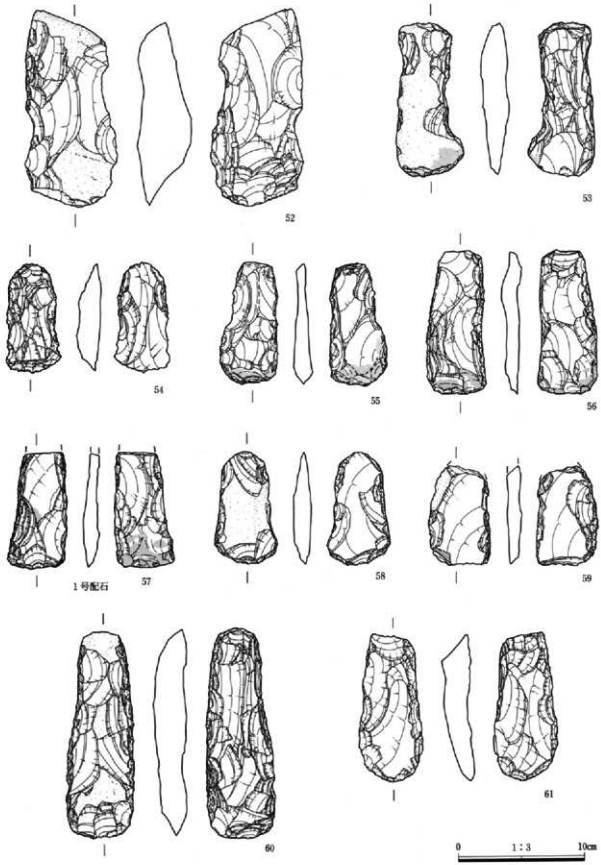
第54図　縄文時代の石器（3）



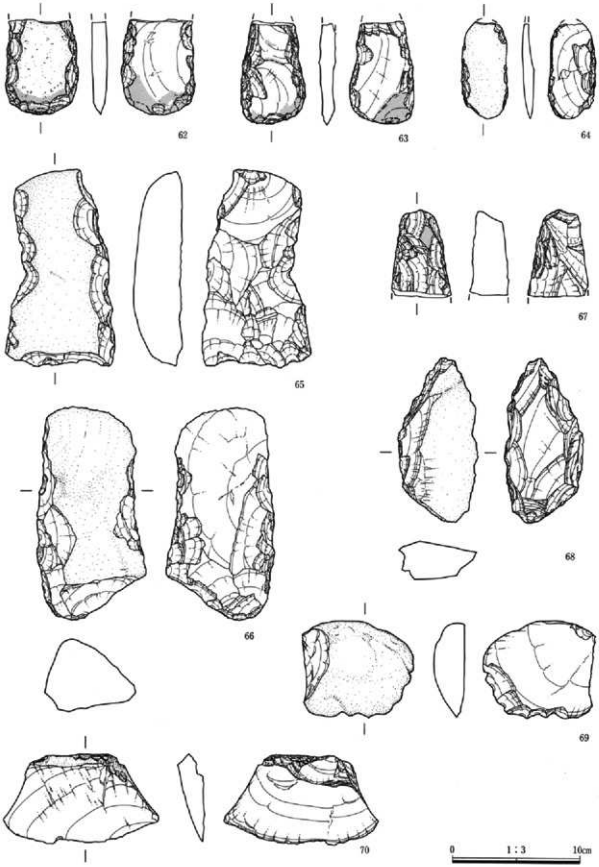
第55図　縄文時代の石器（４）



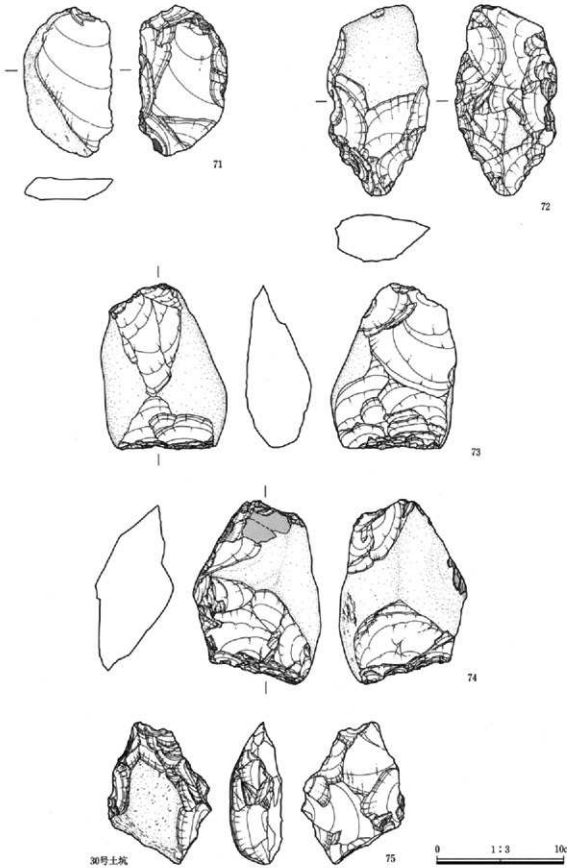
第56図　縄文時代の石器（5）



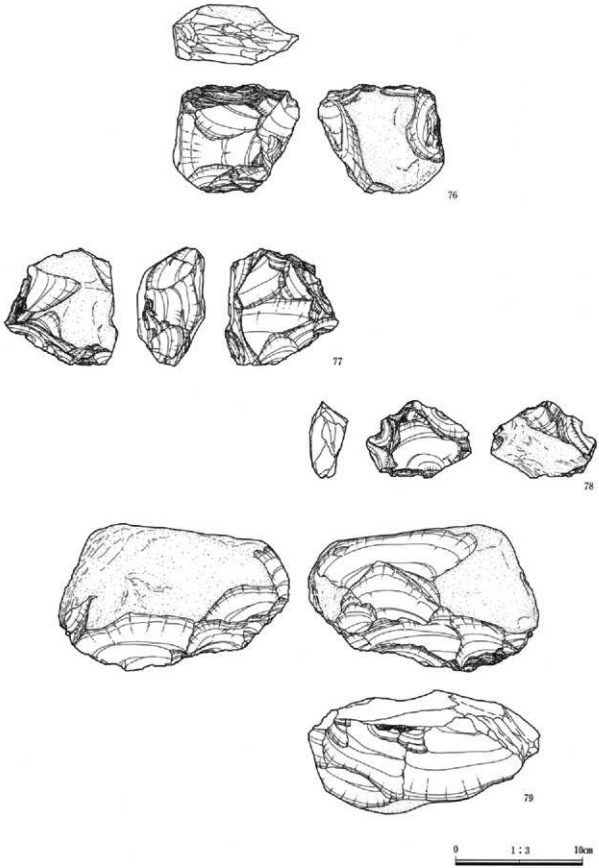
第57図　縄文時代の石器（６）



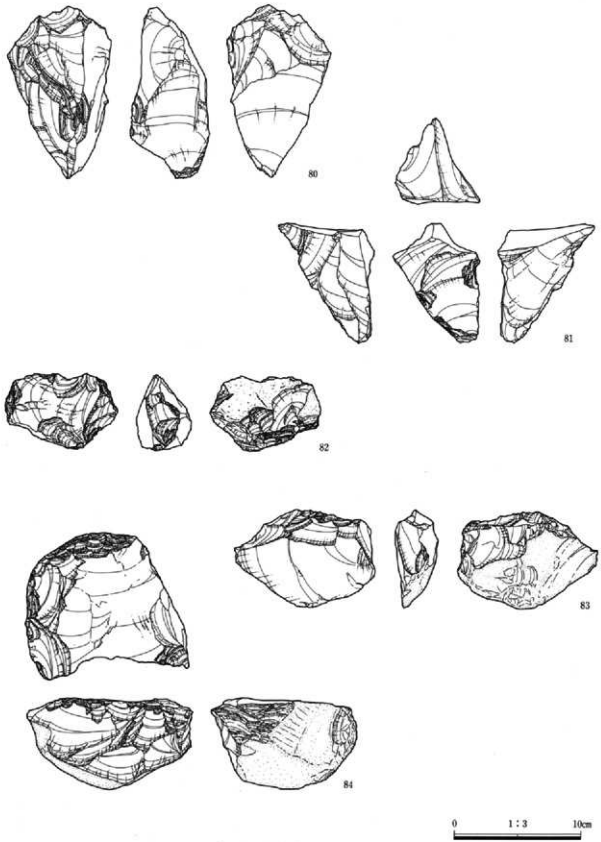
第58図　縄文時代の石器（7）



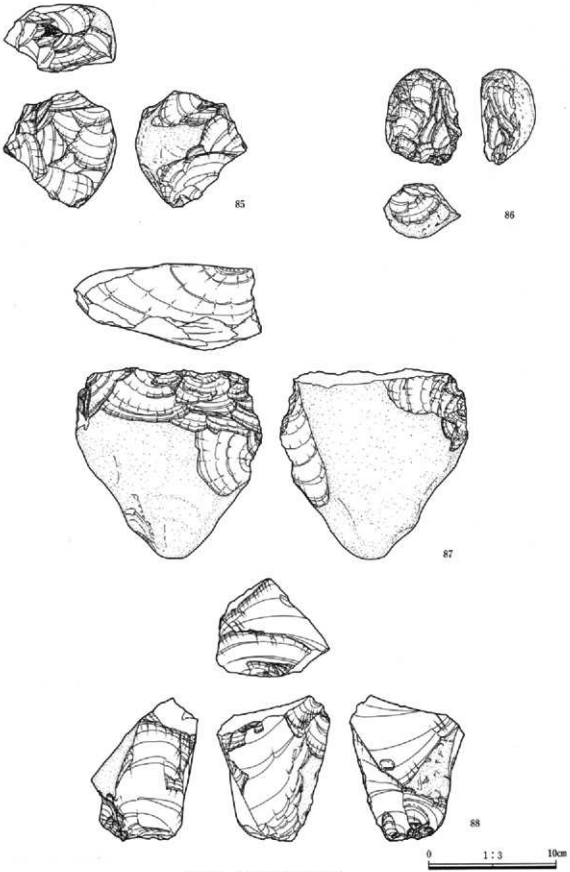
第59図　縄文時代の石器（８）



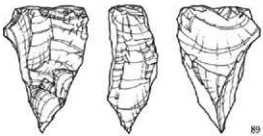
第60図　縄文時代の石器（9）



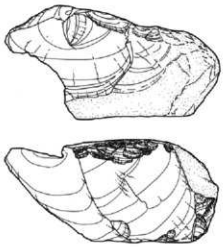
第61図　縄文時代の石器(10)



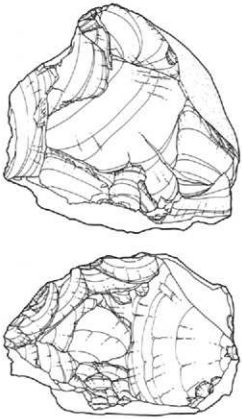
第62図　縄文時代の石器(11)



89



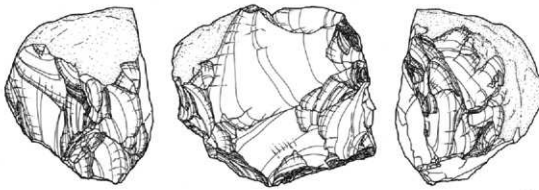
１号配石　90



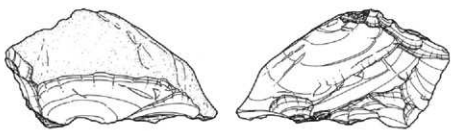
91

0　1：3　10cm

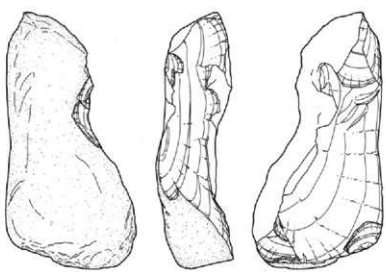
第63図　縄文時代の石器(12)



92



93

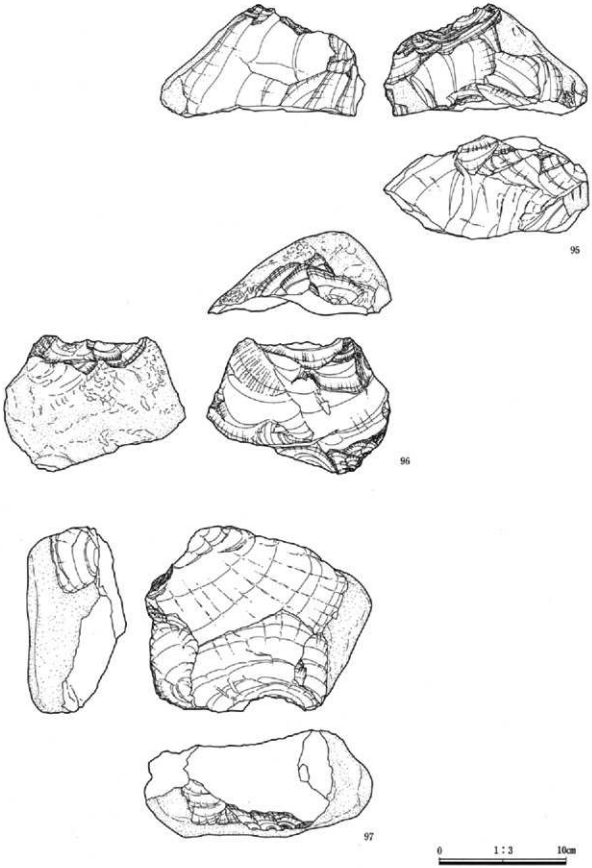


94

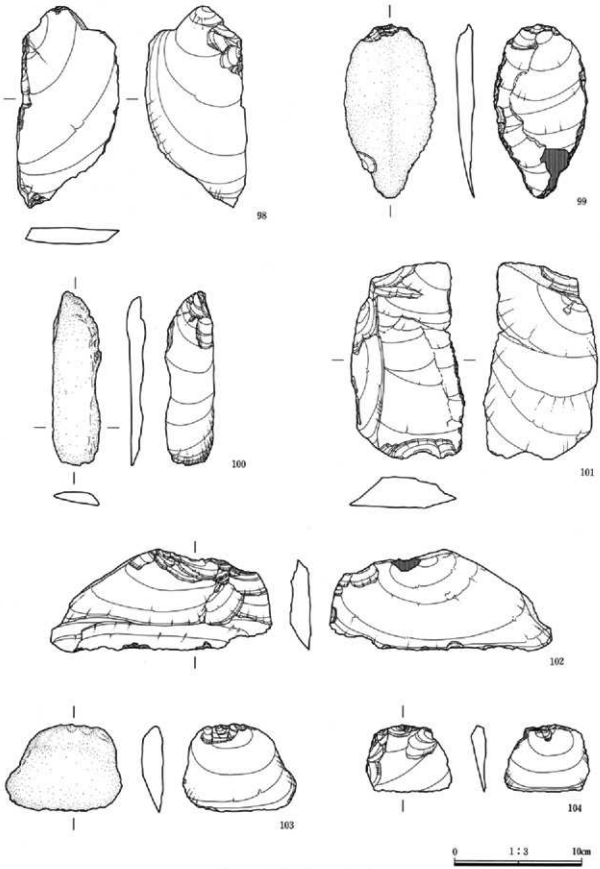
2号配石

0　1：3　10cm

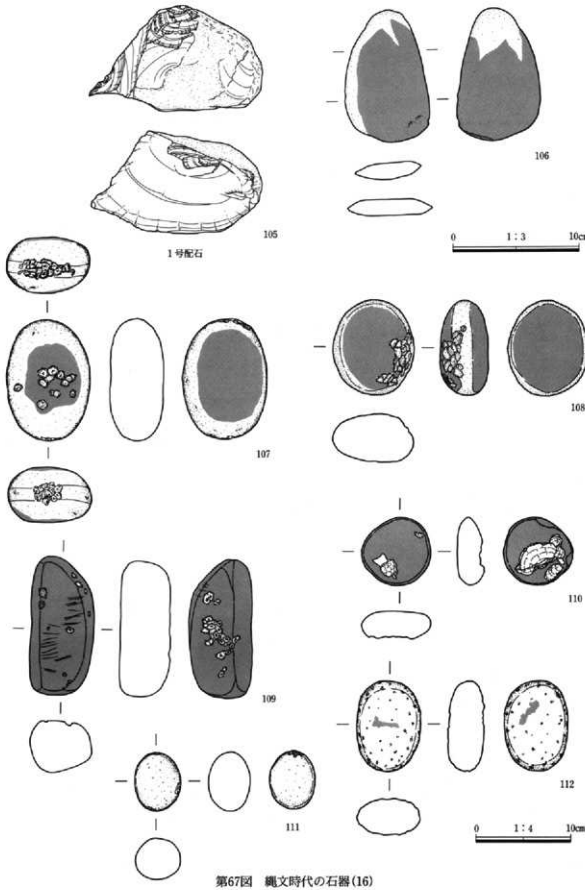
第64図　縄文時代の石器(13)



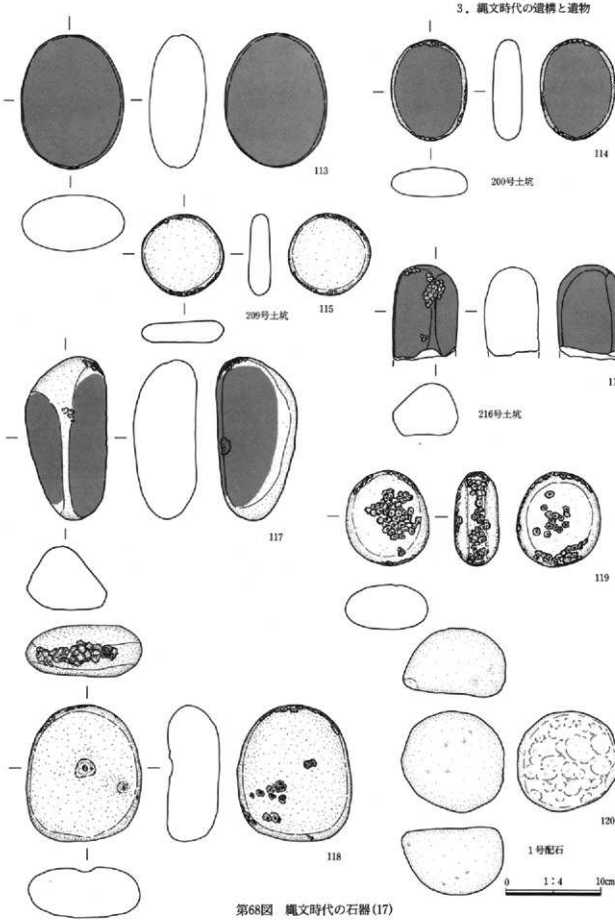
第65図　縄文時代の石器(14)



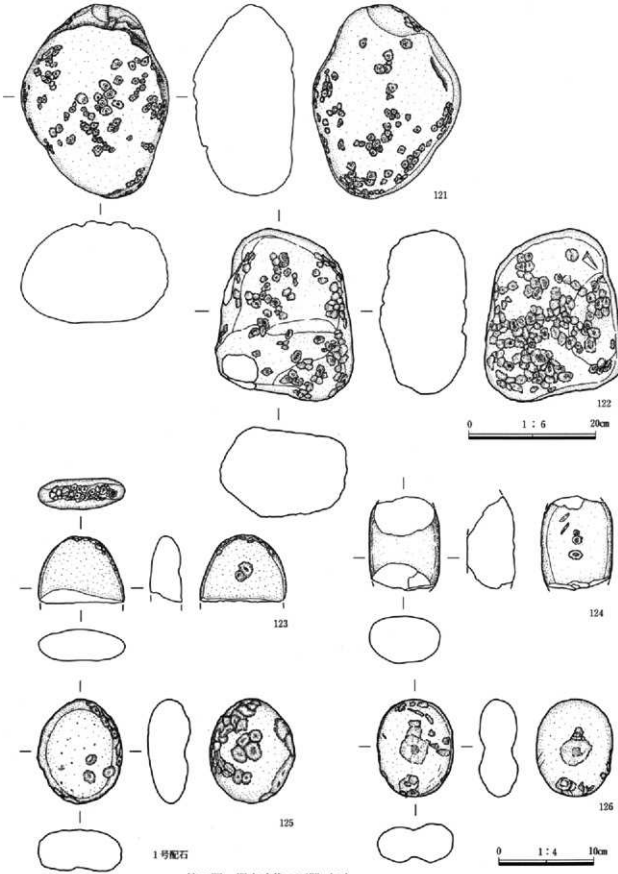
第66図　縄文時代の石器(15)



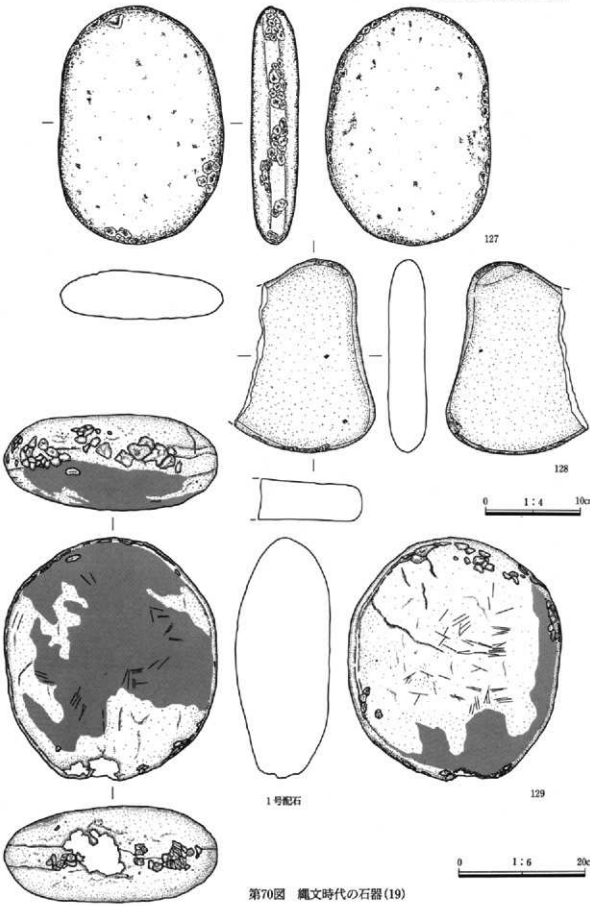
第67図　縄文時代の石器(16)



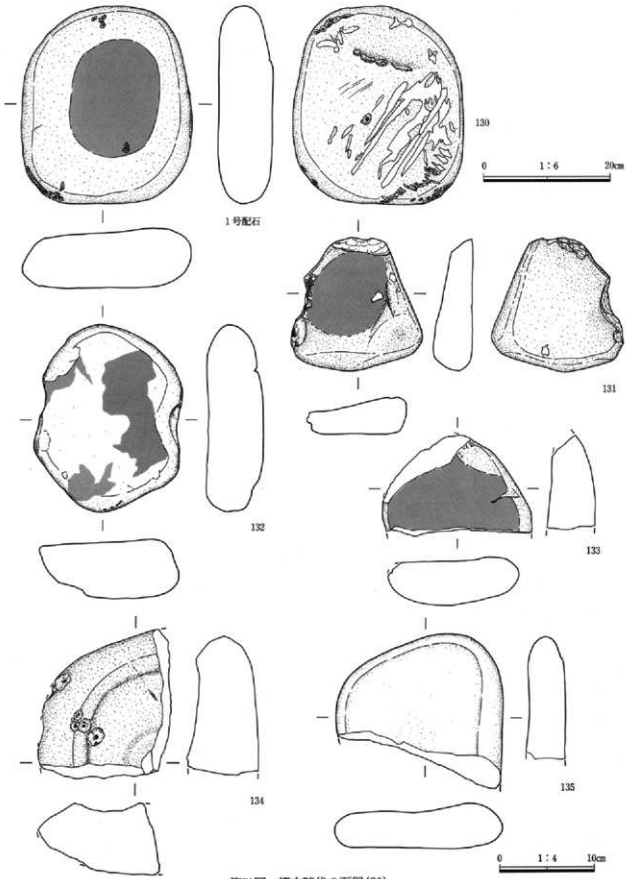
第68図　縄文時代の石器(17)



第69図　縄文時代の石器（18）



第70図　縄文時代の石器(19)



第71図　縄文時代の石器(20)

第４章　自然科学分析

１．白井大宮Ⅱ遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

（１） はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

利根川右岸の段丘面上に位置する白井大宮Ⅱ遺跡でも、テフラ層をはさむ良好な土層断面が認められた。そこで地質調査を行って、土層やテフラの層序を記載することになった。調査の対象となった地点は、遺跡の基本土層断面であるJU-84グリッドである。

（２） 土層の層序の概要

JU-84グリッドでは、下位より暗褐色土（層厚15cm以上）、黄褐色土ブロック混じり褐色土（層厚21cm）、風化した橙褐色軽石を多く含む暗褐色土（層厚10cm，軽石の最大径３mm）、灰色軽石混じり黒色土（層厚10cm，軽石の最大径３mm）、成層したテフラ層（層厚12cm）、灰褐色土（層厚４cm）、成層したテフラ層（層厚68cm）、暗灰褐色土（層厚31cm）が認められる（図１）。発掘調査では、風化した橙褐色軽石を多く含む暗褐色土から縄文時代後期の土器が、また上位の成層したテフラ層直下からウマの足跡などが検出されている。

テフラのうち、暗褐色土中に含まれる橙褐色軽石は、層位や岩相から縄文時代に浅間火山から噴出した軽石と考えられる。また黒色土中に含まれる灰色軽石は、層位や岩相などから、４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979）に由来すると考えられる。

また、２層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下位より褐色細粒火山灰層（層厚６cm）、灰色火山砂層（層厚２cm）、白色軽石層（層厚0.3cm，軽石の最大径41mm，石質岩片の最大径32mm）、褐色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、桃色火山砂層（層厚３cm）、黄褐色細粒火山灰層（層厚0.5cm）から構成されている。これらのうち、火山砂層は火砕流堆積物、それ以外は降下堆積物である。このテフラ層は、その層相から６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名渋川テフラ（Hr-S，新井，1979，坂口，1986，早田，1989）に同定される。したがって、火砕流堆積物は二ツ岳第１軽石流堆積物（FPF-1，新井，1979）、降下堆積物は二ツ岳火山灰層（FA，新井，1979）に各々対比される。

上位のテフラ層は、プリニー式噴火に由来する降下軽石層である。このテフラ層は、下位より桃灰色軽石層（層厚１cm，軽石の最大径41mm，石質岩片の最大径11mm）、成層した比較的細粒の軽石層（層厚28cm）、成層した比較的粗粒の軽石層（層厚20cm）、桃色細粒火山灰が付着した白色粗粒火山灰層（軽石の最大径５mm，石質岩片の最大径３mm）、黄白色軽石層（層厚13cm，軽石の最大径49mm，石質岩片の最大径21mm）、褐色石質岩片混じり黄色粗粒火山灰層（層厚２cm，軽石の最大径11mm，石質岩片の最大径11mm）、黄色軽石層（層厚５cm，軽石の最大径49mm，石質岩片の最大径21mm）からなる。このテフラ層は、その層相から６世紀中葉に榛

名火山から噴出した榛名伊香保テフラ（Hr-Ⅰ，早田，1989，年代：坂口，1986）のうち、降下テフラ層である榛名二ツ岳軽石（FP，新井，1962，1979）に同定される。

（３）　榛名渋川テフラ（Hr-S）と榛名伊香保テフラ（Hr-Ⅰ）の層序

白井大宮遺跡のHr-Sの構成層については、Hr-Sの部層区分（早田，1993a）との関係が検討され、褐色細粒火山灰層がS-1、灰色火山砂層がS-2、白色軽石層がS-5、桃色火山砂層がS-10、黄褐色細粒火山灰層がS-11に各々対比された（早田，1993a）。しかし、今回の調査により、白色軽石層中に非常に粒径が大きく、発泡の良くない白色軽石が検出された。このことは、白色軽石層がS-8に対比される可能性の方がより高いことを示唆しているように思える。今後、この対比作業を正確に行うためには、渋川市街地とその周辺での検討が必要である。現段階においては、褐色細粒火山灰層をS-1、灰色火山砂層をS-5、白色軽石層をS-8、褐色細粒火山灰層をS-9、桃色火山砂層をS-10、黄褐色細粒火山灰層をS-11に各々対比しておく。

また、Hr-Ⅰについて、白井大宮遺跡におけるＦＰの部層区分（早田，1993a）と比較すると、桃灰色軽石層、成層した比較的細粒の軽石層、成層した比較的粗粒の軽石層、桃色細粒火山灰が付着した白色粗粒火山灰層、黄白色軽石層、褐色石質岩片混じり黄色粗粒火山灰層、黄色軽石層は、それぞれⅠ・Ⅱ、Ⅲ－Ⅴ、Ⅵ－Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ、Ⅻに各々対比される。また、Hr-Ⅰの単層区分（早田，1993b）と比較すると、下位よりⅠ-1～5、Ⅰ-6～17、Ⅰ-18～26、Ⅰ-27、Ⅰ-28～31、Ⅰ-32、Ⅰ-33に各々対比されると考えられる。

なお、成層した比較的細粒の軽石層は、下位より白色軽石層（層厚９cm，軽石の最大径57mm，石質岩片の最大径18mm）、白色細粒火山灰混じり白色細粒軽石層（層厚２cm，軽石の最大径８mm，石質岩片の最大径３mm）、白色軽石層（層厚６cm，軽石の最大径49mm，石質岩片の最大径24mm）、白色細粒軽石層（層厚１cm，軽石の最大径11mm，石質岩片の最大径５mm）、白色軽石層（層厚７cm，軽石の最大径59mm，石質岩片の最大径27mm）、白色軽石層（層厚２cm，軽石の最大径18mm，石質岩片の最大径13mm）に細分される。

また、成層した比較的粗粒の軽石層は、下位より黄白色粗粒軽石層（層厚15cm，軽石の最大径117mm，石質岩片の最大径27mm）、黄白色細粒軽石層（層厚13cm，石質岩片の最大径５mm）、黄白色軽石層（層厚４cm，軽石の最大径37mm，石質岩片の最大径19mm）に細分される。

（４）　まとめ

白井大宮Ⅱ遺跡において、地質調査を行った。その結果、下位より浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀中葉）、榛名渋川テフラ（Hr-S，６世紀初頭）、榛名伊香保テフラ（Hr-Ⅰ，６世紀中葉）が認められた。またAs-Cの下位の土層中に、縄文時代に浅間火山から噴出したと考えられる軽石も検出された。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

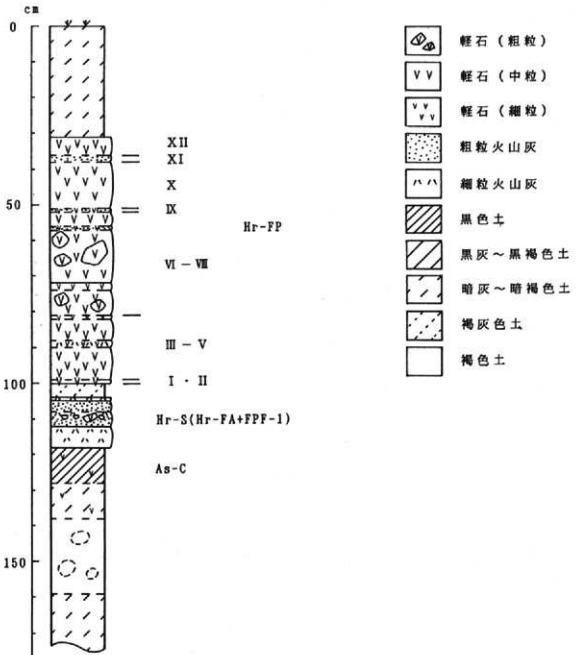
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.14，p.1-45.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源ＦＡ・ＦＰ層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・

今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1993a）地質層序とテフラ．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「白井大宮遺跡－古墳時代の畑作と放牧」，p.10-14.
早田　勉（1993b）古墳時代におこった榛名山二ツ岳の噴火．新井房夫編「火山灰考古学」，p.128-150.



第72図　JU-84グリッドにおける土層柱状図
（数字はテフラ分析の試料番号）

２．白井大宮Ⅱ遺跡の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

（１）　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

（２）　試料

分析試料は、JU-84グリッドから採取された６点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

（３）　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。ヒエ属（ヒエ）の換算係数は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（４）　分析結果

①　分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

（5） 考察

① イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ族型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、Hr-Ⅰ直下層（試料1）およびAs-C直下層（縄文時代後期の土器包含層、試料3）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか，1988）。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これら分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

② 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

最下位の暗褐色土層（試料6）では、棒状珪酸体やイネ科（未分類等）が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。その上層（試料5）からAs-C直下層（試料3）にかけては、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も増加している。Hr-S直下層（試料2）およびHr-Ⅰ直下層（試料1）でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、最下層ではヨシ属、As-C直下層にかけてはネザサ節型が卓越していることが分かる。

以上の結果から、最下層の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節なども見られたものと推定される。その後、As-C直下層にかけては、ネザサ節が繁茂してススキ属やチガヤ属、メダケ節なども生育する草原的な環境であったと考えられる。また、Hr-S直下層およびHr-Ⅰ直下層の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと推定される。

（6） まとめ

植物珪酸体分析の結果、榛名伊香保テフラ（Hr-Ⅰ，6世紀中葉）直下層および浅間C軽石（As-C，4世紀中葉）直下層からは少量ながらヒエ属型が検出され、ヒエ属（ヒエが含まれる）が栽培されていた可能性

が認められた。

最下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節なども見られたものと推定される。その後、浅間C軽石（As-C，4世紀中葉）直下層にかけては、ネザサ節が繁茂してススキ属やチガヤ属、メダケ節なども生育する草原的な環境であったと考えられ、榛名渋川テフラ（Hr-S，6世紀初頭）直下層および榛名伊香保テフラ（Hr-I，6世紀中葉）直下層の堆積当時も、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと推定される。

文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕追究のための基礎資料として―．考古学と自然科学，20，p.81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9，p.15-29.

表1　群馬県、白井大宮II遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：×100個/g）

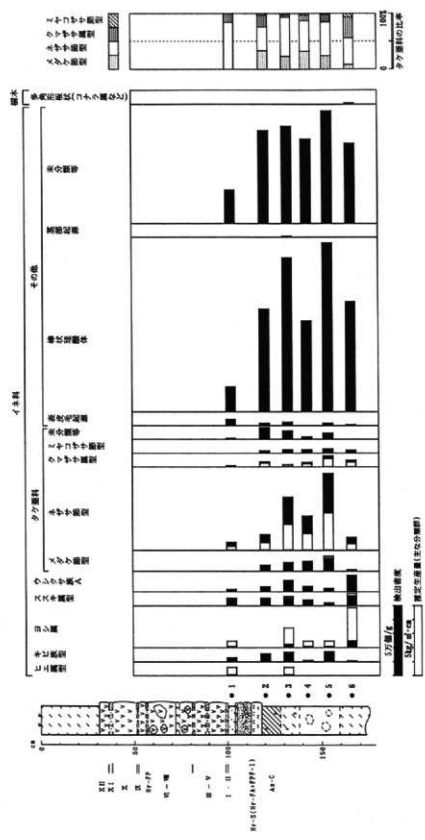
分類群	学名	地点・試料	JU-84グリッド 1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae (Grasses)							
ヒエ属型	*Echinochloa* type		7		7			
キビ族型	Panieeae type		27	55	65	7	70	6
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		7		22	7	7	45
ススキ属型	*Miscanthus* type		41	41	51	30	14	70
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		14	34	80	37	21	115
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			34	51	59	90	6
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		54	110	378	243	550	90
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		7	34	15	30	77	45
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*			14	22	22	28	19
未分類等	Others		7	82	58	15	42	
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin		7	14	22		14	6
棒状珪酸体	Rod-shaped		176	727	1097	642	1204	781
茎部起源	Stem origin				7			
未分類等	Others		237	659	690	597	800	569
樹木起源	Arboreal							
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus*)							6
植物珪酸体総数	Total		582	1805	2565	1689	2915	1760

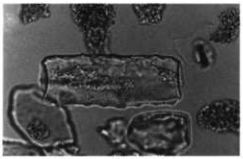
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヒエ属型	*Echinochloa* type		0.57		0.61		
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		0.43		1.38	0.47	0.44	2.83
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.50	0.51	0.63	0.37	0.17	0.87
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			0.40	0.59	0.68	1.05	0.07
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		0.26	0.53	1.81	1.17	2.64	0.43
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		0.05	0.26	0.11	0.22	0.57	0.34
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*			0.04	0.07	0.07	0.08	0.06

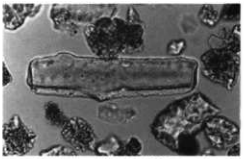
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*			33	23	32	24	8
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		84	43	70	55	61	48
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		16	21	4	10	13	37
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*			3	3	3	2	6

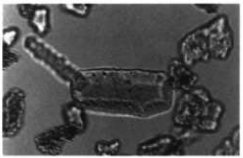

イネ科
タケ亜科
その他
根本
ヨシ属型
キビ属型
ヒエ属型
ウシクサ属型
メダケ属型
ササ属型
ネザサ節型
ミヤコザサ節型
ヤダケ属型
未分類
機動細胞
表皮細胞
未分類
ウシクサ属型
ヤシ属型
ヨシ属型
ススキ属型
タケ亜科の種類数
100%
0
1
2
3
4
5
6
5万個/g
5万個/g
検出密度
推定生産量(生体の乾燥)
50
100
150
Ⅲ-Ⅳ
Ⅲ-Ⅴ
Ⅲ-Ⅵ
Ⅲ-Ⅶ
Ⅲ-Ⅷ
Ⅲ-Ⅸ
Ⅲ-Ⅹ
Ⅲ-Ⅺ
Ⅲ-Ⅻ
Ⅲ-Ⅻ
Ⅲ-Ⅻ



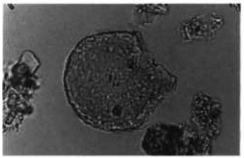
1．ヒエ属型　試料名3



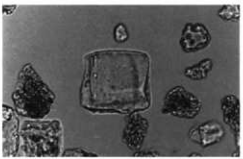
2．キビ族型　試料名3



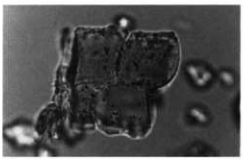
3．キビ族型　試料名2



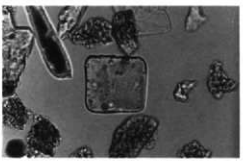
4．ヨシ属　試料名1



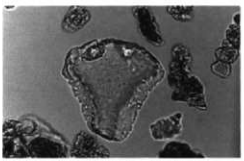
5．ススキ属型　試料名6



6．ススキ属型　試料名1

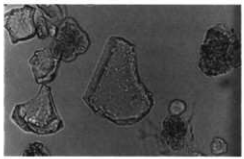


7．ウシクサ族A　試料名3



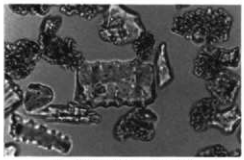
8．メダケ節型　試料名3

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真(1)

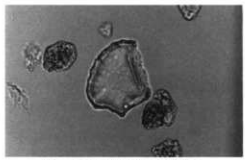


9．メダケ節型　試料名5

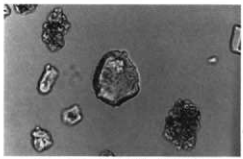
10．ネザサ節型　試料名4



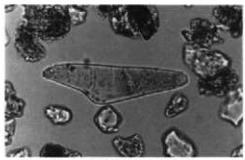
11．ネザサ節型　試料名2



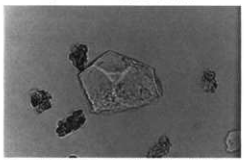
12．クマザサ属型　試料名5



13．ミヤコザサ節型　試料名4

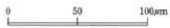


14．表皮毛起源　試料名2



15．多角形板状(コナラ属など)　試料名6

(倍率はすべて400倍)



植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真(2)

３．白井大宮Ⅱ遺跡の炭化材樹種同定

植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）

（１）　はじめに

当遺跡は榛名山麓の群馬県子持村白井地区に所在し、利根川と吾妻川の合流地点に形成された段丘面上に立地する。当地域一帯は、古墳時代に活動した榛名山の大噴火を記録しており、６世紀初頭～中葉の火山噴出物（ＦＡ）と６世紀中葉の火山噴出物（ＦＰ）が広く分布している。隣接する白井遺跡群（白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡）の火山噴出物に覆われた古墳時代の生活面からは、多数のウマの足跡や畦状遺構・立木や倒木などが検出され、当時の土地利用や景観が詳細な調査結果から検討され、放牧と畠作が行われていた可能性の高いことが報告されている（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）。

ここでは、当遺跡のＦＰ下（６世紀中葉）から出土した炭化材20点の樹種を報告する。炭化材は出土位置を記録し取り上げられており、南北に約７ｍ、東西に約4.5ｍの範囲に散在し、北東から南西に長く伸びる幾筋もの畦状遺構の付近から出土している（図）。炭化材の産状は、畦状遺構と関連しているかのようにも見える。近隣の遺跡群からも同様な産状で多数の炭化材が出土した。この中の炭化材で状況が良好であり立木・倒木と認定されたものもあるが、多くは畦状遺構に沿い生育していた立木やその倒木であったのか、畦状遺構に関連した柵や板であったのか、ＦＰ下以前のＦＡ降下により枯死した立木跡や倒木であったのかなど、いろいろな見解が成されているが確定できない出土状況の炭化材がほとんどである。ここで報告する炭化材も、立木・倒木か、柵・杭・道具などの加工木の一部なのか不明であるが、炭化材の樹種を明らかにする事は当時の古植生や木材利用を知るうえの追加資料となる。そこで、近隣の遺跡群の炭化材樹種同定結果などと若干の比較検討も行った。

（２）　炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材を手で割り横断面（木口）の特徴を実体顕微鏡で観察して分類群のおおよその目安をつける。次に分類したグループの典型的試料と、さらに高倍率で組織を観察する必要がある試料を、走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。

走査電子顕微鏡用の試料作成は、炭化材の横断面（木口）を手で割り新鮮な平滑面を作り、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽く弾くように割り面を出す。この３断面の試料を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

（３）　結果

検討した20点の炭化材すべて年輪の始めに大型管孔が１～２層配列する環孔材であり、晩材部の管孔は薄壁で極めて小型でありその孔口は多角形で散在状・火炎状に配列し、放射組織は主に単列同性で集合放射組織も認められ、道管の穿孔は単一、道管内腔には泡状のチロースが発達していた。このような形質から、すべてコナラ属コナラ亜属コナラ節であることが判明した（写真図版）。

試料の中には年輪幅が非常に詰まったぬか目材や、逆に年輪幅は広いが晩材部の管孔配列が典型的な火炎状ではなく放射状や散在状に近い配列であるため実体顕微鏡下の観察だけではクヌギ節との識別が困難な試

料が数点あった。クヌギ節の晩材部の小型管孔はコナラ節に比べ、孔口の直径はやや大きく、孔壁は厚く、孔口の輪郭は円形である。従って実体顕微鏡下でコナラ節と確定できない試料は、すべて走査電子顕微鏡で組織を拡大し晩材部の特徴を確認した。このような試料も、すべてコナラ節であった。

表2　白井大宮Ⅱ遺跡出土（ＦＰ下出土）炭化材の樹種同定結果

試　料	樹　種	試　料	樹　種	試　料	樹　種	試　料	樹　種
1	コナラ節	6	コナラ節	11	コナラ節	16	コナラ節
2	コナラ節	7	コナラ節	12	コナラ節	17	コナラ節
3	コナラ節	8	コナラ節	13	コナラ節	18	コナラ節
4	コナラ節	9	コナラ節	14	コナラ節	19	コナラ節
5	コナラ節	10	コナラ節	15	コナラ節	20	コナラ節

（4）　まとめ

当遺跡のＦＰ下から出土した20点の炭化材は、すべてコナラ節であった。近接する白井遺跡群の白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡では、ＦＰ下・ＦＡ中・ＦＡ下・縄文包含層から出土した炭化材樹種同定が報告されている（藤根、1997）。その結果は、コナラ節が各層位において圧倒的に多く検出され、クヌギ節も各層位から僅かに出土した。その他にはムクノキ・アサダ・イヌシデ節・不明散孔材・ササ類が検出され、ＦＡ下面の火砕流による２本の倒木はコナラ節とクヌギ節であった。特にＦＰ下面の炭化材は、畦状遺構の上に作られた柵と思われるものはすべてコナラ節であり、畦状遺構の上面と中からはクヌギ節・コナラ節・ムクノキ・ササ類が検出され、平坦地に散乱していた細かい破片はコナラ節が多く他にクヌギ節・ササ類が検出された。このように、３遺跡からはいずれの産状の炭化材からもコナラ節が多く出土し、当遺跡の炭化材もすべてコナラ節であり類似した結果であった。これらの炭化材が立木・倒木か加工材（柵・杭など）であったのか不明であるが、いずれにせよ当地区一帯にコナラ節の樹木が多数生育していたと推定される。コナラ節の材は強度が有り加工も比較的容易である。周辺域に豊富に生育しており入手も容易でかつ有用材のコナラ節が選択的に使用されていたと思われる。麻生(1997)も、周辺遺跡（吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡・白井北中道など）から出土した樹種にコナラ節・クヌギ節・クリが多いことから、ブナ科の樹種が木材や食物としてよく利用されていたと想定されると記している。

また、当地区は放牧や畠作に利用されていたことから乾燥した陽光地であったと推定される。コナラ節とクヌギ節は主に陽光地の同様な立地に生育するが、クヌギ節はコナラ節より肥沃で湿潤な谷筋や土壌の厚い所を好む傾向がある事から、クヌギ節よりコナラ節が優占して出土した炭化材の結果は、土地利用や地形・自然環境を反映した結果と言えそうである。

接する白井遺跡群の白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡では畠地と予想される区画の土を洗い出し得られた炭化種実の同定が行われている（新山・吉川、1997）。その結果と炭化材樹種同定結果を比較すると、いくつかの問題点に気付く。ひとつは、炭化材で圧倒的に優占出土したコナラ節の果実（いわゆる

ドングリ）が、炭化種実からはまったく検出されず、高木性樹木の種実はケヤキだけであったことである。炭化種実からはアワ・ソバ・シソ科・ササゲ属・タデ属・シロザ近似種が量的には少ないが栽培の可能性のあるものとして検出され、乾燥した陽光地を好む雑草も検出された。炭化種実の同定は畠作物を検討する目的で選定された試料であるため、樹木起源の種実がほとんど含まれていないのは当然かもしれないが、遺跡一帯からは立木・倒木の状態でコナラ節とクヌギ節と判明した倒木もあり、炭化材ではコナラ節が圧倒的多数でクヌギ節も検出されているにかかわらず、炭化後も残り易いコナラ節とクヌギ節の果実は検出されていない。もうひとつは、炭化種実の大半の試料からブナ科の虫えいが出土したことである。コナラ節とクヌギ節はブナ科に属し、その葉に虫えいが付くことは普通に見られる。従って虫えいは、クヌギ節も含まれるが主にコナラ節の葉との関連性が考えられる。炭化した虫えいが多産することから、周辺に生育していたブナ科を人為的に燃やしていた可能性が指摘されている（新山・吉川、1997）。周辺に多く生育していたコナラ節の葉を畠に入れて肥料としたか、あるいは放牧地に投入し馬糞と一緒に堆肥・肥料作りをしていたことも想像される。

コナラ節の葉と材部は発掘試料から顕著に検出され、立木・倒木も多数出土しているにもかかわらず、コナラ節やほかの樹木の果実はほとんど一緒に検出されない。このことから、コナラ節の炭化材は立木・倒木もあるが、多くは遺跡からやや離れた地点で加工されて遺跡内に木材として持ち込まれたものであったとも考えられる。また井上（1997）は、今までの様々な調査結果を総合してＦＰの噴火時の季節を春～初夏と推定している。コナラ節はこの時期に果実は付けていないが葉は展開しているので地区一帯からコナラ節の材と葉の部分は出土するが果実が検出されていないことは、この時期推定と矛盾しない。しかし、検討した空間は人為的影響が強い放牧地と畠地に限られているので、コナラ節の果実はウマや野生動物も食べたであろうし、ヒトも食料として採取したであろう。炭化種実も、層準により人為により焼かれたものか噴火災害で焼かれたものかを区別する必要があり、それにより結論も異なるであろう。今後もＦＰ下の立木・倒木周辺や、放牧地や畠地以外の環境地区で炭化材樹種と果実の有無を調査することも降灰時期を知ることに貢献できるのではないかと考えられた。

噴火物直下から検出される遺物（炭化材・種実）と噴火物の時間差は少ないので、出土した炭化材や炭化種実を総合的に検討することにより当時の樹種利用や栽培植物そして周辺の植物景観を復元できるだけではなく、噴火時の季節が解明できる可能性もあるのではないだろうか。

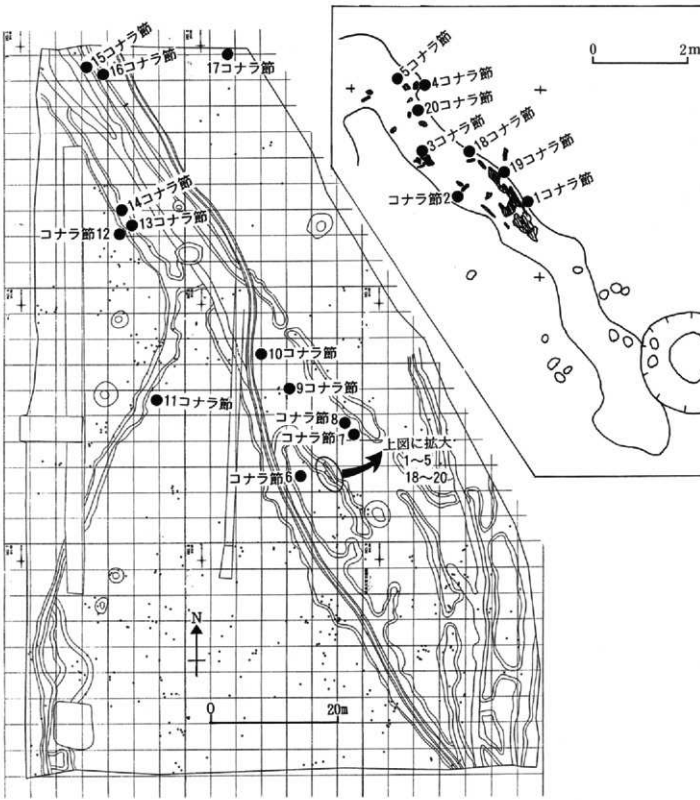
引用文献

藤根　久、1997、白井遺跡群出土炭化材の樹種同定、420-429、「白井遺跡群-古墳時代編-」、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

新山雅弘・吉川純子、1997、白井遺跡群より出土した炭化種実について、430-438、「白井遺跡群-古墳時代編-」、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

井上昌美、1997、ＦＰ下面調査の成果と課題、444-452、「白井遺跡群-古墳時代編-」、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

麻生敏隆、1997、倒木・立木について、458-464、「白井遺跡群-古墳時代編-」、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。



第74図　FP下出土炭化材の出土位置と樹種

白井大宮II遺跡出土炭化材樹種

1a　コナラ節(横断面)
試料5　bar：0.5mm

1b　コナラ節(接線断面)
試料5　bar：0.5mm

1c　コナラ節(板目断面)
試料5　bar：0.5mm

第５章　まとめ

１．ＦＰ下面の成果と景観の復元

（１）　はじめに

白井大宮Ⅱ遺跡が所在する白井地区は、利根川右岸の河岸段丘中位面の「白井面」に位置する。現在遺跡周辺の畑では、ＦＰをすき込んだ水はけの良い土壌を利用してこんにゃく栽培が盛んに営まれ、国道17号（鯉沢バイパス）が一部開通した現在でも、利根川と吾妻川に挟まれた長閑な陽光地の景観をそのまま残している。

古墳時代後期（６世紀中葉）、「黒井峯ムラ」の人々が暮らしていたのと同じ頃、この広大な白井面の草原に数多くの馬が放牧され、ある日瞬く間にＦＰの降下堆積によって被災していった風景の復元が、平成２年度より開始されたいくつかの発掘調査によって試みられてきた。そしてＦＰ下面の調査では、馬蹄跡、畦状遺構、踏み分け道、畠跡、水田跡、陸苗代、祭祀跡、立木痕、倒木痕などが検出され、その結果、特に白井地区周辺地域においては、古代、馬の放牧地であったという認識が一般的となっている。

前述したように、「馬蹄痕と畦状遺構との関係」、「畠と畦状遺構との関係」、「放牧地の土地利用について」は諸説論議がなされ、どれも統一見解には至っていないものの、景観の復元に向けて寄与した功績はとても大きい。

今回の白井大宮Ⅱ遺跡におけるＦＰ下面の調査でも、周辺遺跡と同様の遺構が検出され、これまでの調査結果をさらに追証、補強する内容になったことは一つの成果と言える。

なお、国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴って調査された周辺遺跡の「白井遺跡群」におけるＦＰ下面の調査成果については、遺構ごとに井上昌美女史が詳細に検討を加えている。（井上昌美「ＦＰ下面調査の成果と課題」『白井遺跡群』―古墳時代編―（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997）

（２）　畦状遺構について

帯状の土の高まりである畦状遺構（以下「畦」と記述）は、この遺跡の周辺では馬蹄跡とともに必ずといっていいほど検出される遺構であるが、その性格や機能は不明なことが多い。そして、両者を直接的に関連づけて考えた場合、馬と放牧地の関係となり、さらに畠を関連づけて考えれば、農法との関係へと発展していく。このことは、畦の性格や機能が不明であるが故に、推測の域を脱し得ない一つの大きな障害となっている。

井野修二氏による子持村内におけるＦＰ下馬蹄痕、畦状遺構検出遺跡一覧（井野修二『白井北中道遺跡（道の駅地点）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団2000）によれば、両者の分布域は白井地区の段丘面にとどまらず、中郷、吹屋、北牧の各地区にも及んでいる。このことは、白井地区だけが馬の限られた放牧域ということではなく、当時、ムラの至る所に馬が放たれていた光景が想起できる。

白井大宮Ⅱ遺跡及び周辺遺跡での現在までの調査成果や諸説を踏まえ、畦の景観の復元を試みた。

第一に、畦は高さが最大でも約15cm程度の土の高まりで概して扁平である。このことと、柵列に伴う柱穴が地中から認められないことから、土塁のような高さを有する構造物を意識したものではない。また、無数の凹凸をもった畦表面の状況からみて、ネザサ属、チガヤ属などのある程度の高さをもつ茎が密集して生える植物、あるいは地中浅く根が張る柴垣や灌木などが考えられる。因みに、白井丸岩遺跡１区１号畦、白井北中道１区１号畦では、ネザサの地下茎が生えていたままの状態で炭化していた例がある。さらに比較的高さをもった畦の上部は、軽石と軽石下の黒褐色土が混じり合うしまりのない汚れた軽石層の堆積が認められる。これはＦＰの降下によって植物が立ったまま腐食し、浮き上がった土壌の間隙にＦＰが入り込んだ結果と考えられる。

第二に、畦の形状は帯状を呈しているものの、その幅が一定せず乱れた形状を示している状況からみて、近接した植物株同士の外側への拡張が看て取れる。

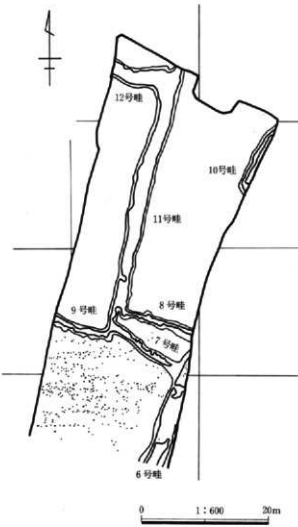
第三に、畦には区画を隔てる遮断物としての働きと、単なる境界線を示す二種類の機能が考えられる。前者の景観は、白井北中道遺跡2区(第75図)にみられる馬蹄痕のある区画とない区画に代表され、畦によって明らかに他区画への行き来を妨げたことを示す高さをもった障害物の存在が想起でき、すなわち区画の範囲を囲う放牧地、すなわち、「牧」と密接な関係をもってくる。一方、後者は区画を意識しているものの、自由な往来ができる開放的な景観が想起でき、畦をまたぐ馬蹄痕や畦上を横断する踏み分け道などにその根拠を見出すことができる。そして後者は、畠や農宮形態などと関連づけない限りは、畦そのものの存在が曖昧となってしまう。

第四に、畦には新旧の違いが看て取れる。交差した畦同士の区別は難しいが、限りなく同平に近いものであれば、古い畦から新しい畦へと、意図的に造り替えられていることを意味する。このことは、盛られた畦の断面に、時として1～3層の炭化層があることからも看て取れる。

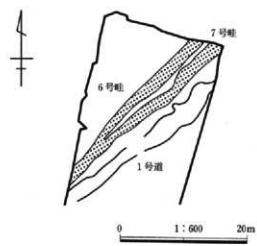
(3)　踏み分け道について

踏み分け道(以下「道」と記述)は、幅約30～40cmの上からの踏み付けによってできた細幅の道である。広範囲な調査区で検出された場合、その道の特徴は直線方向を指向しているものの、そのほとんどが獣道とは異なり緩やかに蛇行している。このことは、意識して蛇行させているわけではなく、無意識のうちに曲がってしまう人間の歩行習性によるものが大きいと考えられる。道のもついくつかの機能的な側面を以下に記した。

第一に、人間がつくった道は、蛇行を考慮しても目的地同士を結ぶ最短経路を採用する。それが何らかの事情により大きく曲がって反れている場合は、立ち入ることのできない何らかの障害物、あるいはエリアが存在していたということである。周辺遺跡から検出された道には、区画内を無意識に横断して通るものと、畦に関係して通るものの二種類が看取できる。前者は、道幅が狭く区画内での占有面積がいくら少ないからと言って、何度も通過して踏み付

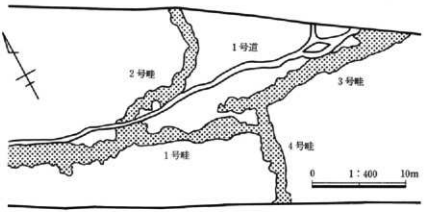


第75図　白井北中道遺跡2区



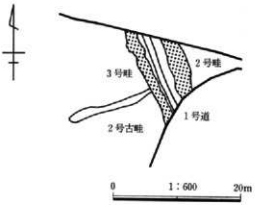
第76図　白井南中道遺跡2区

けている状況からみて、道のできた当初は、区画内に踏み入っても何ら支障がなく、さほど意識するものが存在しなかったことを意味する。一方、後者は区画内への進入を意識的に断念してつくられ、畦のつくられた時期が道よりも古いと仮定するならば、区画内に何ら影響を及ぼさないルート、すなわち、白井南中道遺跡２区１号道(第76図)・白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区１号道(第77図)にみられる畦脇や、白井北中道遺跡１区１号道(第78図)・白井大宮Ⅱ遺跡２号道(第11図)にみられる畦間、あるいは白井大宮Ⅱ遺跡１号道(第11図)のように畦上を意識的に通過している。



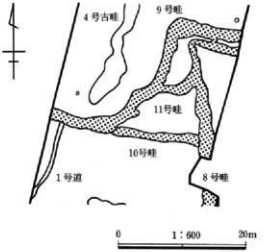
第77図　白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区

第二に、道は一度や二度程度の往来では存続することは不可能であり、生活路線としての目的地同士からの頻繁な往来があったことによってつくられる。そして、道の縁辺部に馬蹄痕が頻繁に押圧されていたならば、馬や人間の歩行形態までも窺うことが可能である。

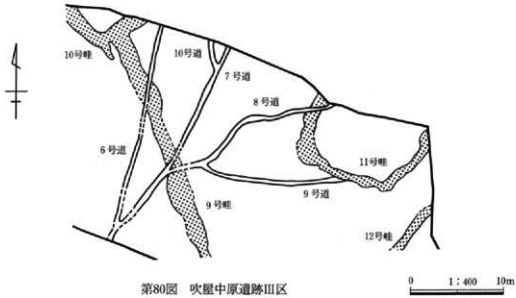


第78図　白井北中道遺跡１区

第三に、道によって、道同士や道と畦との新旧関係を知ることができる。このことは、道底面の硬度の違いや道の分岐の仕方、あるいは、方向によって新旧関係を知ることができ、畦を横切って道が横断(第77図、第80図)してたり、畦上を畦の走行に沿うようにしてつくられている場合(第11図)などは、単純に道の方が畦よりも新しいと言える。また、白井丸岩遺跡３区１号道と９号畦(第79図)、吹屋中原遺跡Ⅲ区９号道と11号畦(第80図)に看られるように、９号畦の手前で１号道が、11号畦の手前で９号道がそれぞれ途絶えている場合はその逆のことが予想でき、道先端部の消滅の原因としては、畠作などによる地面の耕起、使用頻度の減少による自然風化などが考えられる。



第79図　白井丸岩遺跡３区



第80図　吹屋中原遺跡Ⅲ区

第四に、道の走行方向によって当時の人たちが向かったであろう目的地のある程度の場所を推定することができる。吹屋中原遺跡Ⅲ区に見られる６・７・８・９・10号道(第80図)などの分岐の仕方などから、北ないしは北東方向への道の集中、分散が看取でき、場合によってはその方向には、集落に伴う住居やその他の施設が存在する可能性が考えられる。

（４）　馬蹄痕について

前蹄と後蹄の形状や大きさの違い、ＦＰ面に押圧された時の蹄叉の特徴は、既に本文で述べたとおりである。ここでは、馬蹄痕から得られる情報を再度考えたい。

白井北中道遺跡での馬蹄痕の発見以来、当時の白井地区と馬の関係は密接なものとなり、「牧」の景観と結びついて考えられてきた。しかしながら、最近では、検出数の大小はあるにせよ村内一帯のＦＰ下から馬蹄痕が検出されている。その範囲は、子持村内に限らず近隣の渋川市、北橘村、赤城村にまで及ぶ。この馬蹄痕からわかることは以下のとおりである。

第一に、馬蹄痕の分布によって、ＦＰ降下直前の区画内での馬の所在を知ることができる。しかしながら、馬蹄痕の検出数から、何頭の馬が存在していたかを想定するのは難しいと言える。仮に蹄幅の異なる数頭の馬によって集中的に付けられた馬蹄痕がほとんどであったとするならば、今まで考えられてきた景観が大きく変化する。因みに、遺存状態の良い馬蹄痕（Ａランク）が数多く検出された吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡の２遺跡で得られた蹄幅の数値(吹屋犬子塚遺跡＝前蹄111、後蹄89、吹屋中原遺跡＝前蹄90、後蹄88)を、前後別馬蹄痕の頻度として集計した。これによると、吹屋犬子塚遺跡は前蹄幅が43、後蹄幅が45の階級、吹屋中原遺跡では前蹄幅が40、後蹄幅が33の階級の頻度が認められた。単純に考えれば階級の頻度だけの頭数が飼われていたと言うことになるが、１㎜単位の馬蹄痕計測では、誤差によって同一馬を重複して集計してしまうおそれもあるので、蹄幅が３㎜以下の範疇にあるものについては同一個体として扱った。なお、３㎜の範疇に設定した理由は、井上昌美女史らの実験によれば、実際の馬の蹄幅とその蹄跡の幅との関係は、±1.5㎜の範囲に72.4％が収まるという現生馬による実験結果を採用したことによる。

その結果、吹屋犬子塚遺跡では前蹄で16頭、後蹄で18頭、吹屋中原遺跡では前蹄で18頭、後蹄で12頭という数値が得られた。したがって、誤差範囲の数値を操作することによって、得られた数値を下限として当時の馬の最少頭数が推測できるものと考えられ、仮に計測値の誤差が少なければ少ないほど頻度

別の頭数に近づき、また、Aランク以外のBランク、Cランクの中にも信頼のおけるものがあればあるほど、さらに得られた数値よりも推定頭数が増えるものと思われる。このことは、馬蹄痕は数頭の馬によって押圧されたものではなく、明らかに数十頭単位の馬が飼われていたことを想定できる根拠となるものである。

第二に馬蹄の押圧状況から、FP降下直前の地面の状態が窺える。本文でも述べているが、乾燥状態では極めて風化し易いことから、FP降下以前には降雨によるある程度の地面の湿潤化が推定される。これに伴って、馬蹄痕を多く残す区画はほぼ裸地状態に近く、馬蹄痕の押圧を妨げる草などは生えていなかったということになり、FP下の黒褐色土面が露出している一種異様ともとれるこの景観の要因は、おそらく新芽を馬が食したか、馬蹄圧による地面の踏み付けによって新芽の成長が妨げられたか、あるいは、焼き払い後に畠作に伴う何らかの地面の耕起が行われたことによるものと考えられる。もちろん、馬蹄痕が少ない場所においてはこの限りではない。

なお、FP下の黒褐色土はFAを母材として腐植、土壌化したものであり、火山灰土特有の酸性土壌の影響により植生が妨げられ裸地化していたという根拠は、FP下での水田や畠の検出、自然科学分析による生育環境の復元、土壌分析、調査時点での上層からの植物根の繁茂の状況などからみて否定される。

第三に、放牧されていた馬は、馬蹄痕の計測値、歩幅から中形の在来種と考えられる。このことは、宮崎重雄氏による遺跡検出の馬蹄痕の計測結果と、木曾馬の馬蹄サイズが極めて近似していることからみて、少なくても小形在来馬や大形タイプに属するものではないと言う考えに基づくものである。

第四に、子馬の馬蹄痕がまとまって検出された箇所があり、馬の繁殖時期に照らし合わせて、FPの噴火の季節は、春から初夏にかけてと言うことになり、埋没水田の研究から推定されている季節と矛盾しない。

第五に、馬蹄痕のみ残存し、それ以外の馬の骨や歯などの遺体に関連したものが出土していない状況からみて、FP噴火以直前には、人も馬もある程度の避難ができる猶予があったということであり、このことは、軽石が多量に堆積した割には、人的被害は極力抑えられたものと思われる。おそらくは、FPの噴火の前兆として火山性微動などが頻繁に発生し、ある程度の異変を予知することができたものと思われる。加えて、この噴火よりも約20～30年前と推測されるFA災害の教訓も生かされていたのではないだろうか。

(5) 白井地区におけるFP降下以前の景観

白井地区は、自然科学分析の一つである植物珪酸体分析の結果によって、ヨシ属などが生育する湿地的な環境からネザサ節が繁茂し、ススキ属、チガヤ属、メダケ節などが生育する草原的な環境へと変化した。また、FAとFPが降下した頃には、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったことが推定されている。

6世紀第1四半期頃の初夏、FAの噴火とそれに伴う大火砕流が発生し、その威力は吾妻川を乗り超えて河岸段丘上の白井地区一帯を襲った。雑木林で人の手があまり入っていなかった辺り一帯は、FAと火砕流堆積物によって植物が繁茂しない殺伐とした風景へと一変し、約20～30年かけて、FAは腐植し黒褐色土へと土壌化していった。さらに、ススキ属やチガヤ属の生息がこの土壌化に拍車をかけた。

その後、この段丘面の開発が着手され、ススキ、チガヤ、メダケなどの植物の伐採及び焼き払いが行われた。一部刈り取らない部分や焼き払いを行わなかった部分を残して、それが帯状の畦として残存し、あるいは、墳圧を受けずに畦状に残った部分にのみにチガヤなどが生育した。そしてこの行為は、古い畦や土層断面に炭化層を伴わない畦があることなどからみて、区画域を変えて何度か行われた。残された畦上に生息する植物の根株周辺には、風などによって運ばれてきた土が次第に堆積して僅かな高まりを形成し、根株はその生息域を外へと拡張して畦の平面形状を不規則なものにしていった。

第5章　まとめ

定形区画をあまり指向しない区画内では、層厚約4～10cmの黒褐色土を利用して、畝立てを必要としない直播作物が栽培され、一方、水はけの良い傾斜地を利用して畝立てされた畠では、豆類などの作物が栽培されていた。畠の耕作や馬の放牧を行わない区画はあまり手入れをされず、植物遺痕として検出されたようなススキなどが繁茂した。そしてその年の耕作を施す区画については、土壌の薄さや放棄された畠などの状況からみて、連作障害や馬の放牧域を考慮して決められたものと思われる。もちろん、ＦＰ降下後に立ち枯れた立木痕も確認されていることから、区画域周辺には比較的高い樹木何本かは繁茂していた景観も想定できる。

馬の放牧は、定形を意識しない既存の区画を利用して行われ、必要であれば区画内を囲って馬の外出を阻害し、畠作に支障がなければ季節に応じて自由に放牧された。

放牧された馬については、官馬として飼われていたものか、あるいは、私馬である家畜として飼われていたものかまでは特定することはできないが、後に『延喜式』左右馬寮の御牧条に登場する九牧に比定される利刈牧(子持村・渋川市)、有馬島牧(渋川市・前橋市)、市代牧(中之条町・東村)、大塩牧(月夜野町)などは、いずれも榛名山周辺地域が推定地とされる。特に利刈牧の推定地は、子持村大字白井・北牧～渋川市南牧一帯とされ、現在でもその地名が使われている。本文でも述べたとおり、近接する渋川市半田中原・南原遺跡では、奈良時代の堀と土墨が範囲を囲むようにみつかっており、かつてこの地域が「牧」として利用されたものと考えられている。

いずれにせよ、律令制のもとで官牧が設置されていく前段階としての白井地区と馬との関係や、激動する歴史的推移の中で、馬の担った政治的、経済的役割を考える上でとても興味深い。　(梶岸)

＜参考文献＞

原田恒弘・能登　健「火山災害の季節」『群馬県立博物館紀要』第5号　群馬県立博物館　1984

『火の山はるな　火山噴火と黒井峯むらのくらし』群馬県立博物館　1990

『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会　1990

下城　正「古墳時代の馬の飼育地「白井北中道遺跡」」『群馬文化』第226号　群馬県地域文化研究協議会　1991

前沢和之「上野国の馬と牧」『群馬県史』通史編２　群馬県史編さん委員会　1991

町田　洋・新井房夫『火山灰アトラス―日本列島とその周辺―』東京大学出版会　1992

能登　健・麻生敏隆「軽石直下で検出された馬蹄跡の性格について」『白井大宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993

石坂　茂「畦状遺構の機能と性格について」『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊（古代・中近世編）(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996

新井房夫編『火山灰考古学』古今書院　1996

高井佳弘「ＦＰ下面の土地利用について」『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 』第１冊（古代・中近世編）(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996

宮崎重雄「白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡の馬蹄跡」『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊（古代・中近世編）(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996

井上昌美「ＦＰ下面調査の成果と課題」『白井遺跡群』―古墳時代編―(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997

井上昌美・宮崎重雄「ウマの蹄跡の認定について」『白井遺跡群』―古墳時代編―(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997

能登　健「白井遺跡群のプラントオパール分析について」『白井遺跡群』―古墳時代編―(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997

洞口正史「耕地遺跡としての白井遺跡群」『白井遺跡群』―古墳時代編―(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997

Masami INOUE and Hajime SAKAGUCHI「Estimating the Withers Height of the Ancient Japanese Horse from Hoof Prints」『Anthropozoologica』№25-26　1997

高井佳弘「馬のいる風景―日本古代における馬の飼育の景観復元―」『研究紀要』18 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000

『白井北中道遺跡(道の駅地点)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000

千賀　久「古墳時代の牧と馬飼集団」『季刊　考古学』第76号　雄山閣　2001

2．縄文時代の出土土器について

白井大宮Ⅱ遺跡では、縄文時代早期～後期の遺物がⅦ・Ⅷ層より多量に出土した。これは前回調査の白井大宮遺跡でもⅦ層中の出土が集中したが、時期は前期と中期を中心としている。今回の調査で得られた早期条痕紋系土器群及び中期中葉の土器、後期中葉の一群は当地域においても従来出土量が希薄であり、今回の調査により周辺地域の縄文時代土器様相を充実するものとなった。ここでは、早期条痕紋系土器と中期中葉の出土土器を中心に特徴や問題点を述べておきたい。

(縄文時代早期)

本遺跡からは早期後半の茅山下層式土器、絡条体圧痕文系土器、薄手のつくりで沈線や貝殻腹縁文、刺突文を施す土器が出土した。そのなかでも絡条体圧痕文系土器の出土量が多く、早期土器の主体を占めている。なかには、ほぼ完形に個体復元できる資料もあり、器形や文様構成を知ることのできるものとして貴重である。今まで群馬県内では当該期土器の出土例は非常に少なく、研究も停滞していたのが実情である。そのような状況のなかで、数個体ではあるが本遺跡の新資料が加わったことは大変意義のあるものといえるであろう。

本遺跡から出土した復元個体の土器を中心に絡条体圧痕文系土器の様相を概観してみると、器形は緩やかに立ち上がる単純な深鉢形を呈する。文様は条痕を地文とし、口縁部に絡条体を縦位、斜位あるいは鋸歯状に密に押捺して、その下を横位の絡条体圧痕で文様帯を区画している例が多い。№4のようにこれを2段重畳するものもある。このように口縁部文様帯に絡条体圧痕を施し、それ以下は条痕となるタイプが主流である。群馬県内では松井田町の横川大林遺跡(福山1997)で当該期の資料がまとまって出土しているが、文様構成の上で横川大林遺跡資料との共通性が見られるものの、本遺跡の土器群は絡条体を密に、より複雑に施文している傾向が見受けられる。

そのほか特徴的なものとしては№3、№9がある。№3は平底の底部破片であり、底部付近まで絡条体圧痕を施している。№9は絡条体ではなく貝殻腹縁文を施文している。絡条体を貝殻腹縁文に置換したものであろう。このように絡条体圧痕を施す土器群の中にもいくつかのタイプが見受けられるようである。

また本遺跡から出土した土器の中で、沈線、貝殻腹縁文、刺突文を施文した土器群がある(№41～47)。全体的に器壁は薄く、条痕が施されないことから、絡条体圧痕文系土器とは明確に区分することができる。より後出の早期終末段階に位置づけられるものであろうか。№48～50も無文であるが、この時期に伴うものか、あるいは近い時期のものであろう。

以上簡単ではあるが、本遺跡出土の早期土器について概観してみた。やはり特筆すべきは群馬県内では出土例の少ない早期後半の絡条体圧痕文系土器がまとまって出土したことであろう。前にも述べたように、茅山下層式以降と考えられている絡条体圧痕文系土器の出土例は群馬県内ではまだ非常に少なく、数遺跡程度を数えるに過ぎない。近年、上記した松井田町の横川大林遺跡で当該期のまとまった資料が出土している以外は、散見される程度である。今回報告する本遺跡の資料は、絡条体圧痕文系土器のまとまった資料としては県央部では初であり、当該期土器研究の上で重要な資料となり得るであろう。

(橋本　淳)

<参考文献>

福山俊彫　1997『横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡』群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会

縄文セミナーの会　2000『早期後半の再検討』

(縄文時代中期)

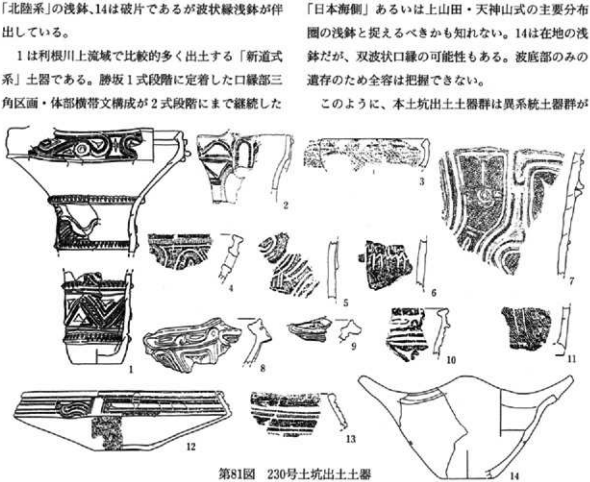
本遺跡遺物出土量では最も多い時期である。調査区ほぼ全域から出土が見られ、周辺地域への広がりを考えると、集落跡の近接が予想されよう。しかしながら、本遺跡の調査では当該期の有機的な遺構としては230号土坑のみが抽出されただけである。その他の土坑出土遺物として180号土坑があるが、出土状態は、埋置あるいは廃棄行為ではなく周辺からの流入を示唆している。他の出土遺物も殆どが包含層出土であり遺構に伴う状態ではなかった。

ここでは、唯一遺構出土として捉えられた230号土坑出土土器の概要を述べ、縄文時代中期のまとめにかえたい。

第81図に230号土坑出土土器を挙げた。1～4は勝坂2式、5～7は「新巻類型」、8～10は「焼町類型」。11は不明であるが、縄文施文であり収斂的な様相を示す土器底部の可能性がある。12・13は同一個体で「北陸系」の浅鉢、14は破片であるが波状縁浅鉢が伴出している。

1は利根川上流域で比較的多く出土する「新道式系」土器である。勝坂1式段階に定着した口縁部三角区画・体部横帯文構成が2式段階にまで継続した例である。特に体部が細長く長胴形を呈する器形は、当地域に特徴的に出土する深鉢である。2は口縁部に大型突起を付す例であり、これも在地的な特徴である。さらに体部横位小区画が沈線で行われる特徴を持つ。3は口縁部が内彎し、隆帯装飾を行わない勝坂式である。比較的簡素な器形であり、2式後半段階に顕著に組成に加わるようだ。5・6は一応「新巻類型」とした破片であるが、縄文は施文しておらず、縄文施文の「新巻類型」とは系統的・時間的な差であろうか。検討を要す。7の「新巻類型」は縄文施文する安定した例と見ることができる。8の「焼町類型」は口縁部文様帯が狭く、口縁突起も小型である。また、沈線施文方法も1本描きで間隔が広い、「焼町類型」においても前半段階の所産と考えられる。12は、「北陸系」の浅鉢と判断した。口縁部文様帯の半内彫的な手法と体部縄文施文がその根拠ではあるが、一概に「北陸系」と短絡的な判断はできず、「日本海側」あるいは上山田・天神山式の主要分布圏の浅鉢と捉えるべきかも知れない。14は在地の浅鉢だが、双波状口縁の可能性もある。波底部のみの遺存のため全容は把握できない。

このように、本土坑出土土器群は異系統土器群が



第81図　230号土坑出土土器

共伴する様相を示しており、これは当地域の中期中葉の普遍的な出土状態を示している。おそらく図示した土器のうち、殆どが同時期であり、土器群相互が共伴実態を認識し得る状況と考えられる。また、本土坑出土の土器群の組み合せ―土器組成を概観するに勝坂２式がやや優勢な組み合せを示しており、前代の例えば阿玉台Ⅰｂ式やⅡ式段階の阿玉台主体組成から勝坂式主体へとの変化を示していると捉えられる。しかしながら、本土坑の組成を見るに、「焼町類型」や「北陸系」との共伴例が顕著であり、極めて独立的な存在感を各個体が示している。

その中で、勝坂２式と「焼町類型」の共伴は、「焼町類型」の発生から展開期にあたるため、注意しなければならない。8の口縁部突起も小型であり環状突起への変化を予想させている。

また群馬県では、この段階に「北陸系」の様々な個体が単体とはいえ、組成に入る例が屡々見られる。本遺跡の12もその例と見たい。この特徴的な浅鉢は、道訓前遺跡Ｊ－15住、沼南遺跡319坑、郷原遺跡Ｊ－２住等に見られ、「北陸系」土器の県内への搬入が具体化した資料である。

次に、230号土坑出土土器組成の中で比較的優勢な勝坂式を見てみよう。４点の土器（１～４）が出土しており、すべて連続刺突文が施文された勝坂１式からの伝統手法を継続した勝坂２式土器である。しかしながら、個体図示し得た１～３を見ると各々文様構成に差が見られる。これは勝坂式内部での多種類型の存在が背景に求められ、同型式・同系統の共伴といえども、内在する異類型を共伴させる現象と見たい。

さて、出土土器のうち個体として確認できるのは１・12であり、深鉢と浅鉢の共伴―異器種共伴例と見ることができる。通常は深鉢相互の共伴例が知られるが、浅鉢との共伴も以外に多く、両者に何らかの関係性が求められて選択されたものと考える。この場合、土坑の性格を土坑墓と考え、鉢被り葬と足下に置く副葬土器としての位置付けも可能であろう。石皿等との伴出も併せて理解を重ねるべきである。

また、勝坂式と「北陸系」の土器の共伴は異系統の土器相互の共伴であり、両者に同時性を与えるばかりではなく、文様の変容や変化に相互の影響が観察される現象で、該期土器群の主要な特徴の一つとなっている。信州地域では勝坂式と「北陸系」土器群との相互の交渉実態が早くから注目されているが、群馬県の「北陸系」土器も異系統土器群内の組成中にあって、どのような変容要素を他に与えたのか、先に述べた「焼町類型」との関係は極めて深い交渉が予想され、勝坂式―「北陸系」―「焼町類型」といった異系統土器共存による相互変化の動態は今後明らかにしなければならないだろう。

次に、勝坂式と「北陸系」土器がなぜ共伴するのか。様々な土器群が共存する中期異系統土器群共存社会において、本土坑では勝坂式と「北陸系」土器に対して意図的な選択行為のもと埋置あるいは廃棄が行われたと考えたい。すなわち、共存する周辺型式群内部からの選択行為をもって勝坂式と「北陸系」浅鉢が選ばれたものと位置付けたい。

以上のように、230号土坑出土土器の提示する問題は数多い。無論他の包含層出土土器に関しても、個別の検討を加え資料価値を高めなければならないだろう。今後も白井大宮遺跡における縄文時代資料は様々な視点で分析を加えるべきであり、その都度この資料群に再検討の手を加えてなければならないだろう。最後になったが、本来ならば出土土器と伴出した多量の剥片石器や石核について、石器製作址としての可能性や石器製作に係る剥片抽出方法など、整理・分析の手を広げるべきであった。一重に調査担当者としての不備であり、反省項目として明記しておきたい。この課題に関しても、将来的に取り組みたい所存である。

（山口）

<参考文献>

大工原　豊　1985　『郷原遺跡』吾妻町教委

長谷川福次　2001　『道訓前遺跡』北橋村委

松村和男他　1999　『沼南遺跡』群埋文

表3　FP下面の馬蹄跡計測比較一覧

遺　跡　名	白井大宮II遺跡	白井大宮遺跡	白井北中道II遺跡	吹屋犬子塚遺跡	吹屋中原遺跡
検出総数	431	329	303	409	326
前蹄Aランクの個数	21	7	19	111	90
平均前蹄幅　mm	110.0	106.6	102.5	102.7	100.2
同最小　mm	80.0	85.0	83.0	58.0	62.0
同最大　mm	135.0	120.0	134.0	130.0	129.0
後蹄Aランクの個数	10	13	19	89	88
平均後蹄幅　mm	100.0	92.4	98.8	96.6	95.0
同最小　mm	80.0	75.0	64.0	58.0	72.0
同最大　mm	110.0	115.0	119.0	123.0	118.0

表4　FP下馬蹄跡計測値

No	グリッド	推定蹄	左右径	前後径	信頼度
1	KB-80	前	80	80	A
2	JY-82	後	80	100	A
3	JX-82	後	110	120	A
4	JX-82	後	100	110	A
5	JW-83	後	100	110	A
6	JW-82	後	105	135	A
7	JW-82	後	100	115	A
8	JW-82	前	95	95	A
9	JW-81	前	110	110	A
10	JW-80	後	105	115	A
11	JT-83	前	100	100	A
12	JS-77	前	105	105	A
13	JR-82	前	95	100	A
14	JR-82	前	105	110	A
15	JR-82	後	105	115	A
16	JR-81	前	105	105	A
17	JR-81	前	115	110	A
18	JR-79	後	85	110	A
19	JR-79	前	105	110	A
20	JR-76	前	135	140	A
21	JR-75	前	135	140	A
22	JQ-81	前	115	110	A
23	JQ-78	前	115	110	A
24	JQ-78	前	110	110	A
25	JP-83	前	120	125	A
26	JP-83	前	110	110	A
27	JP-82	前	115	120	A
28	JP-82	前	110	115	A
29	JP-78	後	110	135	A
30	JN-80	前	110	115	A
31	JN-75	前	120	125	A

表5　FA上馬蹄跡計測値

No	グリッド	推定蹄	左右径	前後径	信頼度
1	KA-83	前	110	110	A
2	KA-83	前	105	110	A
3	KA-81	前	125	130	A
4	JX-83	後	115	125	A
5	JX-83	後	110	130	A
6	JX-81	後	110	130	A
7	JX-81	後	110	135	A
8	JV-81	後	105	115	A
9	JV-79	後	100	115	A
10	JV-79	後	100	120	A
11	JV-79	後	110	100	A
12	JV-79	後	125	130	A
13	JV-79	後	105	120	A
14	JV-77	後	110	125	A
15	JV-77	後	105	125	A
16	JT-75	前	100	95	A
17	JS-76	後	85	100	A
18	JR-81	前	90	95	A
19	JR-77	後	100	110	A
20	JR-77	後	100	110	A
21	JR-75	前	115	120	A
22	JP-81	後	90	100	A
23	JP-81	後	100	110	A
24	JP-81	後	90	105	A
25	JP-81	前	105	110	A
26	JP-81	前	105	110	A
27	JP-81	後	110	120	A
28	JP-81	後	110	110	A
29	JP-79	後	105	120	A
30	JP-77	後	100	115	A
31	JP-77	前	110	115	A
32	JP-75	後	100	110	A

表6　FA下馬蹄状凹計測値

No	グリッド	推定蹄	左右径	前後径	信頼度
1	KB-82	前	115	110	A
2	KB-82	後	95	95	A
3	KB-82	後	100	105	A
4	KB-82	前	115	115	A
5	KB-82	後	95	125	A
6	KB-82	前	100	100	A
7	KB-82	後	100	110	A
8	KB-82	前	105	105	A
9	KB-82	前	110	110	A
10	KB-80	後	100	110	A
11	KB-80	後	95	115	A
12	KA-81	前	110	105	A
13	KA-79	後	115	125	A
14	JX-83	前	115	115	A
15	JX-79	後	110	115	A
16	JX-79	後	95	95	A
17	JV-81	前	80	80	A
18	JT-81	前	100	105	A
19	JT-75	後	95	110	A
20	JT-75	前	110	110	A
21	JS-77	前	100	100	A
22	JS-77	前	120	115	A
23	JP-79	前	110	110	A
24	JP-79	前	110	110	A

№	グリッド	推定脚	左右径	前後径	信頼度
25	JO-78	後	95	110	A
26	JO-78	前	105	115	A
27	JO-78	前	115	115	A
28	JO-78	前	105	105	A

表7　出土石材の種類と割合

	石材の種類	個数	%
1	黒色頁岩	1,498	64.4
2	粗粒輝石安山岩	168	7.2
3	細粒輝石安山岩	81	3.4
4	硅質頁岩	70	3.0
5	石英閃緑岩	68	2.9
6	黒色安山岩	61	2.6
7	ひん岩	52	2.2
8	変質玄武岩	44	1.8
9	硬質頁岩	41	1.7
10	変質安山岩	39	1.6
11	灰色安山岩	36	1.5
12	砂岩	35	1.5
13	溶結凝灰岩	26	1.1
14	黒曜石	20	0.8
15	デイサイト	11	0.4
16	流紋岩	11	0.4
17	硅質変質岩	8	0.3
18	輝緑岩	7	0.3
19	変玄武岩	6	0.2
20	ホルンフェルス	6	0.2
21	変輝緑岩	5	0.2
22	点紋頁岩	5	0.2
23	砂質頁岩	5	0.2
24	文象斑岩	4	0.1
25	かこう岩	2	0.08
26	閃緑岩	2	0.08
27	蛇紋岩	2	0.08
28	凝灰質砂岩	2	0.08
29	緑色片岩	2	0.08
30	赤碧玉	1	0.04
31	頁岩	1	0.04
32	凝灰質硅質岩	1	0.04
33	ぎょくずい	1	0.04
34	石英	1	0.04
35	硅化変質凝灰岩	1	0.04
36	かんらん岩	1	0.04
37	石英斑岩	1	0.04
38	片状ホルンフェルス	1	0.04
	合　計	2,326	100

表8　石器の器種別点数と割合

№	器　種	個数	%
1	不定形剥片石器	342	38.7
2	磨石	322	36.5
3	打製石斧	83	9.4
4	石鏃	30	3.4
5	スクレイパー	16	1.8
6	石錘	11	1.2
7	錐器	5	0.6
8	石皿	5	0.6
9	凹石	4	0.5
10	台石	4	0.5
11	石匙	3	0.3
12	多孔石	2	0.2
13	敲石	2	0.2
14	スタンプ形石器	1	0.1
15	磨製石斧	1	0.1
16	砥石	1	0.1
17	剥片	7	0.8
18	接合資料	17	1.9
19	その他	27	3.1
	合　計	883	100

遺物観察表

遺物観察表

＜須恵器＞

遺物番号 挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・成形・整形の特徴、その他
1 第9図 写図6	須恵器 長頸壺	1号竪穴状 遺構	胴部上位片	肩径 19.0	①微砂粒 ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形。肩縁部に沈線区画。列点状刺突紋。
2 第9図 写図6	須恵器 短頸壺	1号竪穴状 遺構	胴部下位片	底径 －	①微砂粒 ②還元焔 ③灰色	ロクロ整形、回転右回りか。高台貼付。胴部下位回転ヘラ削り。
3 第10図 写図6	須恵器 大甕	3号竪穴状 遺構	口縁～胴部 上半	器高 － 口径 20.0 底径 －	①粗砂粒 ②還元焔 ③暗赤灰色	ロクロ整形。胴部外面平行叩き。内面同心円状アテ具痕。

＜縄文土器＞

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
1 第36図 写図6	深鉢	JT-76・77	口縁部～体部下半4/5	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③鈍橙色	緩やかに屈曲する深鉢で、屈曲部に円形刺突を施した隆帯を巡らし、口縁部文様帯を区画。口縁直下にも1条の円形刺突列を施し、その下を平行沈線で横位、斜位(鋸歯状？)の文様を描く。内外面条痕。	茅山下層
2 第36図 写図6	深鉢	231号土坑	口縁部～胴部下半4/5	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③鈍橙色	口縁下に絡条体圧痕文を鋸歯状に施文し、文様下を2条の横位圧痕文で区画。口唇部にも絡条体圧痕文を施文。内外面条痕。	早期後半
3 第36図 写図6	深鉢	231号土坑	底部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③鈍橙色	平底の深鉢。底面直上に絡条体圧痕文を横位矢羽状に巡らす。体部にまばらに圧痕文を施文。内外面条痕。	早期後半
4 第37図 写図6	深鉢	JO-83 JR-83 JS-77	口縁部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③黒褐色	口縁下に絡条体圧痕文を鋸歯状に施文。基本的に施文方向が変わる位置に絡条体圧痕文を縦位に数条施すが、無いところもある。文様下を横位圧痕文で区画し、さらにその下を斜位の絡条体圧痕文を施文。同様に文様下を横位圧痕文で区画して2段の文様構成となる。内外面条痕。	早期後半
5 第37図 写図6	深鉢	JW-81	口縁部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③黒褐色	口縁部にV字状に絡条体圧痕文を施文。小波状を呈し、波頂部下に内面から外面に向けて円孔を穿つ。口唇部にも圧痕文を施文。内外面条痕。	早期後半
6 第37図 写図6	深鉢	JO-83	体部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③黄橙色	№2と同様の文様構成と思われる。文様下を巡る横位絡条体圧痕文の部位。内外面斜位の条痕。	早期後半
7 第37図 写図6	深鉢	JP-83	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③鈍橙色	斜位に絡条体圧痕文を施文し、文様下を2条の横位圧痕文で区画。内外面条痕。	早期後半
8 第37図 写図6	深鉢	JP-83	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③鈍橙色	斜位に絡条体圧痕文を施文。内外面条痕。	早期後半
9 第37図 写図7	深鉢	JT-76 JU-77 JX-81	口縁部破片	①繊維・白色粒 ②やや軟質 ③黄橙色	口縁下に斜位、X字状に貝殻腹縁文を施文し、文様下を1条の横位貝殻腹縁文で区画。内外面条痕。	早期後半
10 第37図 写図7	深鉢	JW-81	口縁部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③鈍橙色	口唇部に絡条体圧痕文を施文。内面の口縁直下に貝殻腹縁文を斜位に施文。外面は斜位の条痕。内面は口縁下に横位の条痕。	早期後半
11 第37図 写図7	深鉢	JR-77	口縁部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③黒褐色	内外面条痕。	早期後半
12 第37図 写図7	深鉢	JS-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③鈍橙色	外面斜格子状の条痕。内面斜位の条痕。	早期後半

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
13 第37図 写図7	深鉢	JN-83	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③純黄橙色	外面斜格子状の条痕。内面斜位の条痕。	早期後半
14 第37図 写図7	深鉢	JN-83 JP-83	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③橙褐色	外面横位、斜位の条痕。内面横位の条痕。	早期後半
15 第38図 写図7	深鉢	JS-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③純橙色	外面斜格子状の条痕。内面斜位の条痕。	早期後半
16 第38図 写図7	深鉢	JQ-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③橙褐色	№15と同一個体。	早期後半
17 第38図 写図7	深鉢	JS-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③橙褐色	№15と同一個体。	早期後半
18 第38図 写図7	深鉢	JO-83	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③暗橙褐色	外面斜格子状の条痕。内面斜位の条痕。	早期後半
19 第38図 写図7	深鉢	JN-81 JQ-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③暗橙褐色	№18と同一個体。	早期後半
20 第38図 写図7	深鉢	JO-83	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③暗橙褐色	№18と同一個体。	早期後半
21 第38図 写図7	深鉢	JR-74 JW-77	体部破片	①繊維・白色粒・小礫 ②良好 ③純橙色	外面横位の条痕。	早期後半
22 第38図 写図7	深鉢	JT-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③純橙色	外面斜位の条痕。	早期後半
23 第38図 写図7	深鉢	JT-77	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③橙褐色	外面斜位の条痕。	早期後半
24 第38図 写図7	深鉢	JN-79	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純褐色	外面斜位の条痕。	早期後半
25 第38図 写図7	深鉢	JS-81	体部破片	①繊維・白色粒・石英 ②良好 ③純褐色	外面横位、斜位の条痕。	早期後半
26 第38図 写図7	深鉢	JT-76	体部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③暗褐色	外面斜位の条痕。	早期後半
27 第38図 写図7	深鉢	JR-76	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純橙色	外面斜位の条痕。	早期後半
28 第38図 写図7	深鉢	JP-26	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純橙色	№27と同一個体。	早期後半
29 第38図 写図7	深鉢	JS-77	体部破片	①繊維・白色粒・小礫 ②良好 ③純褐色	内外面ともに斜位の条痕。	早期後半
30 第38図 写図7	深鉢	JR-77	体部破片	①繊維・白色粒・小礫 ②良好 ③純橙色	貝殻を横位に押圧。	早期後半
31 第38図 写図7	深鉢	JO-83 JS-77	体部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③純褐色	外面斜位の条痕。	早期後半

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
32 第38図 写図7	深鉢	JR-77	体部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③純褐色	外面斜位の条痕。	早期後半
33 第39図 写図7	深鉢	JR-78	体部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③純橙色	外面斜位の条痕。	早期後半
34 第39図 写図7	深鉢	JO-83	体部破片	①繊維・白色粒・小礫 ②良好 ③純黄橙色	外面斜位の条痕。	早期後半
35 第39図 写図8	深鉢	JN-83	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②やや軟質 ③純褐色	外面斜位の条痕。内面縦位の条痕。	早期後半
36 第39図 写図8	深鉢	JQ-77	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純褐色	外面横位、斜位の条痕。	早期後半
37 第39図 写図8	深鉢	JQ-77	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純橙色	内外面ともに斜位の条痕。	早期後半
38 第39図 写図8	深鉢	JO-79	体部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③純赤褐色	外面斜位に擦痕。	早期後半
39 第39図 写図8	深鉢	JT-76	体部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③純赤褐色	外面斜位に擦痕。	早期後半
40 第39図 写図8	深鉢	JR-79	底部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③純黄橙色	緩やかに開く尖底の深鉢。斜位の条痕。	早期後半
41 第39図 写図8	深鉢	JU-76	口縁部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③黒褐色	口縁下に2条の円形刺突列を横位に巡らす。口唇部にも円形刺突を施す。	早期後半
42 第39図 写図8	深鉢	JN-79	口縁部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③黒褐色	口縁下に角錐状の刺突列を巡らす。規則的でないが、4段に施文。器厚薄手。	早期後半
43 第39図 写図8	深鉢	JU-77	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③黒褐色	三角状の刺突列を施文。器厚薄手。	早期後半
44 第39図 写図8	深鉢	—	口縁部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純赤褐色	2条の沈線を横位に巡らし、口縁下に沈線による鋸歯状文を施す。器厚薄手。	早期後半
45 第39図 写図8	深鉢	JO-79	体部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純赤褐色	2条の沈線による鋸歯状文。器厚薄手。	早期後半
46 第39図 写図8	深鉢	JQ-81	口縁部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③黒褐色	2条の沈線を横位、斜位に施し、沈線間に貝殻腹縁文を充填する。縦位に貝殻腹縁文を施し区画。口唇部に刻みをもつ。波状口縁で、波頂部を基点に三角形状の意匠となるのか？器厚薄手。	早期後半
47 第39図 写図8	深鉢	JQ-81	体部破片	①繊維・白色粒・黒色粒 ②良好 ③黒褐色	沈線による曲線文。波状文。沈線間に貝殻腹縁文を施す。器厚薄手。	早期後半
48 第39図 写図8	深鉢	JT-76	口縁部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純灰褐色	無文。器厚薄手。	早期後半
49 第39図 写図8	深鉢	JT-76	口縁部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純灰褐色	小波状の口縁であり、頸部でやや強く外反する器形を呈する。器厚薄手。	早期後半
50 第39図 写図8	深鉢	JS-78	口縁部破片	①繊維・白色粒・雲母 ②良好 ③純灰褐色	№49と同一個体。	早期後半

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
51 第40図 写図8	深鉢	66号土坑 JW-82	体部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③純橙色	無節Lと無節Rの横位羽状構成。内面平滑な研磨。	黒浜式
52 第40図 写図8	深鉢	JW-82	体部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③純橙色	無節Rの横位施文。内面研磨。No51と同一個体か。	黒浜式
53 第40図 写図8	深鉢	JX-82	体部破片	①繊維・白色粒 ②良好 ③褐色	無節Lと無節Rの横位施文。あるいは菱形状構成か。内面平滑。	黒浜式
54 第40図 写図8	深鉢	JW-82	体部破片	①繊維・白色粒・小礫 ②やや軟 ③暗褐色	無節Lと無節Rの横位施文による菱形状構成。内面研磨。	黒浜式
55 第40図 写図8	深鉢	JX-82	底部破片	①繊維・白色粒 ②やや軟 ③褐色	僅かに上げ底を呈す。無節Lと無節Rの横位施文による菱形状構成が底部にまで至る。内面研磨。No54と同一個体か。	黒浜式
56 第40図 写図8	深鉢	JO-81	体部破片	①白色粒 ②良好 ③純橙色	平行沈線による小菱形文を連続する。交点に円形刺突文を加える。	諸磯b式
57 第40図 写図8	深鉢	JO-81	体部破片	①白色粒 ②良好 ③純橙色	横位平行沈線以下斜位沈線と円形刺突文。また、斜位浮線文が付され刺みが施される。No56と同一個体か。	諸磯b式
58 第40図 写図8	深鉢	JO-81	口縁部破片	①白色粒 ②堅緻 ③純褐色	形骸化した横位浮線間にC字状爪形文が連続する。浮線上には刺み及び刺突文が加わる。	諸磯b式
59 第40図 写図8	深鉢	100号土坑 JU-81	体部破片	①細粒・白色粒 ②良好 ③褐色	平行沈線の縦位・斜位施文。比較的密接な施文。	諸磯c式
60 第40図 写図8	深鉢	JU-81	底部1/2 残存	①粗砂粒・白色粒・黒色粒 ②良好 ③褐色	張り出し底。縦位・斜位平行沈線による懸垂文構成を基準に空白部を縦位矢羽状沈線で充填する。	諸磯c式
61 第40図 写図8	深鉢	JV-80	底部1/2 残存	①砂粒・白色粒 ②良好 ③純褐色	僅かに張り出し底を呈す。細隆線垂下による懸垂文構成。側線に単列の結節沈線。縦位波状意匠が沿う。縄文は縦位RL。	阿玉台Ⅰa式併行
62 第40図 写図8	深鉢	JX-80・81 JW-77	口縁部破片	①石英・雲母 ②堅緻 ③純褐色	緩波状口縁を呈す。波頂部に円孔状の抉りをいれる。細隆線による区画文。区画内及び隆線側縁は単列の結節沈線を施文する。	阿玉台Ⅰa式
63 第40図 写図8	深鉢	JQ-79	口縁部破片	①石英・雲母 ②堅緻 ③褐色	波底部あるいは平縁か。隆線による楕円状区画文。区画内は単列の結節沈線を施す。施文工具先端は尖る。	阿玉台Ⅰb式
64 第40図 写図8	深鉢	JW-77	口縁部破片	①石英・雲母 ②良好 ③暗褐色	楕状把手を付す波状口縁波底部。口縁部文様帯と把手帯に多段の区画帯を設ける。区画内は単列結節沈線が沿う。把手には細粘土紐による意匠文が貼付される。	阿玉台Ⅰb式
65 第40図 写図8	深鉢	JO-77・83 JP-81	口縁部破片	①粗細粒・石英・雲母末 ②良好 ③暗褐色	波状口縁波底部。隆線で区画された口縁部楕円状区画文。区画内は複列の結節沈線を側縁とする。	阿玉台Ⅱ式
66 第40図 写図9	深鉢	96号土坑 JU-79	口縁部破片	①粗砂粒・石英・雲母 ②良好 ③純褐色	平縁か。隆線による口縁部楕円状区画文。区画内は複列の結節沈線が沿う。無節は横位狭状沈線が巡る。	阿玉台Ⅱ式
67 第40図 写図9	深鉢	JO-77	口縁部破片	①石英・雲母 ②良好 ③橙色	平縁。隆線による口縁部楕円状区画文。区画内は複列の結節沈線を側縁とし、中位に横位結節沈線を充てる。弧状隆線上に刻みを施す。	阿玉台Ⅱ式
68 第40図 写図9	深鉢	JP-83 JQ-81 JS-78・79	頸部破片	①石英・雲母 ②良好 ③橙色	波状口縁波頂部下。扁状把手か。隆線による口縁部区画文。区画内は複列の結節沈線が沿い、頸部は横位波状沈線が巡る。	阿玉台Ⅱ式
69 第40図 写図9	深鉢	1号配石 JR-76	口縁～体部 1/3残存	①石英・雲母 ②良好 ③純褐色	平縁を呈す。細状突起と隆線による口縁部区画文。側縁を施さず波状結節沈線を区画内に充てる。体部上半にV字状小突起を付す。懸垂文構成か。	阿玉台Ⅰb式

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
70 第41図 写図9	深鉢	1号配石 JQ-78 JR-78	体部破片	①石英・雲母 ②良好 ③鈍橙色	体部中位。隆線による波状懸垂文を配し、横位爪形状刻み目列を多段に施す。	阿玉台Ⅱb式か
71 第41図 写図9	深鉢	JP-77・78 JQ-77・78 JR-77・78	頸部～体部1/3残存	①粗砂礫・雲母 ②良好 ③暗褐色	口縁部下端に隆線状突起。区画は小楕円状区画か刻み目列が巡う。頸部は横位刻み目列と結節沈線が巡る。体部は大柄の浅巻文等を配し、側線は複列の結節沈線。	阿玉台Ⅱ式
72 第41図 写図9	深鉢	JR-81	突起破片	①石英・雲母 ②良好 ③鈍橙色	小型の扁状把手か。頂部及び口唇部に幅広の結節沈線を施す。口縁部区画内は横位波状沈線を充てる。	阿玉台Ⅱ式
73 第41図 写図9	深鉢	JS-81	口縁部破片	①石英・雲母 ②良好 ③鈍橙色	№72と同一個体。口唇部端部の結節沈線は工具幅で一体化する。横位波状沈線も省取される。	阿玉台Ⅱ式
74 第41図 写図9	深鉢	JO-77	体部破片	①石英・雲母 ②良好 ③鈍褐色	緩やかな弯曲。体部上位の破片か。横位角押文と小波状文。地文は L R 縦位間隔施文。	七郎内Ⅱ群
75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 第41図 写図9	深鉢	JQ-79 JQ-79・80 JO-79 JQ-79・80 JS-76 JQ-83 JO-79 JP-80 JQ-79 JP-80 JQ-80	口縁～体部1/3残存	①粗砂礫・片岩・白色粒 ②良好 ③褐色	№75～84は同一個体破片。平縁で口唇部肥厚する。隆線による半円状意匠を繋ぎ連接箇所に横位波状隆線やX字状の貼付をする。また、体部中位には横位の長楕円状区画文を配する。側線は施さないが、隆線の各所には刻みを施し、空白部の一部には横位刻み目列を充てる。	阿玉台式
85 第42図 写図10	深鉢	180号土坑 JP-78 JQ-77・78	口縁～体部1/3残存	①石英・雲母 ②良好 ③鈍橙色	口唇部内面肥手肥厚。口縁部内弯し頸部で屈曲する無文の長胴形の深鉢。あるいは口縁部に小貼付文か。外面の斜位削り痕跡が顕著。	阿玉台式
86 第42図 写図10	深鉢	JP-80 JQ-80	口縁部破片	①粗砂礫・石英・雲母末 ②良好 ③暗褐色	おそらく平縁。口唇部肥厚し口縁部内弯する。無文で雑な撫でが加わる。	阿玉台式
87 第42図 写図10	深鉢	JQ-77 JS-76	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍橙色	無文。口唇部尖り内稜をもつ。口縁部は内弯する。口縁部外面に残い外撫状の隆線が巡る。隆線の動きから緩やかな波状口縁が想定できる。	阿玉台式か
88 第42図 写図10	深鉢	JQ-77	底部破片	①石英・雲母 ②良好 ③橙色	直立気味の底部形態。器厚比較的薄手。斜位懸垂文か、垂下隆線の下端が残る。側線は不明。底面網代痕有。	阿玉台式
89 第42図 写図10	深鉢	JS-81・83 JT-80	口縁部破片	①細砂粒・石英 ②良好 ③褐色	波底部周辺。口縁部隆線に双環状突起が付きれるか。交互三角区画内は幅広の連続刺突文と三角連続刺突文、中位は三叉文と縦文が別まれる。	勝坂1式
90 第42図 写図10	深鉢	JR-83	口縁部破片	①細砂粒・石英 ②良好 ③褐色	波底部周辺。双環状突起を付し、隆線による交互区画文構成。区画内は幅広連続刺突文と三角連続刺突文を施す。突起中位は密接刺突による拾り状の効果。	勝坂1式
91 第42図 写図10	深鉢	JO-83 JS-81	口縁部突起	①細砂粒・石英 ②良好 ③褐色	波頂部円環状突起。外縁に刻みを付す。突起より垂下する隆線と口縁部隆線で区画文を画す。区画内は幅広連続刺突文と三角連続刺突文、三叉文を埋める。	勝坂1式
92 第42図 写図10	深鉢	1号配石	口縁部破片	①細砂粒・黒色粒 ②やや軟質 ③暗褐色	平縁。隆線による無然とした交互三角区画文。区画内は側線として幅広連続刺突文と三角連続刺突文。中位に縦位刺突文を施す。	勝坂1式
93 第42図 写図10	深鉢	JR-80	口縁部突起	①細砂粒・石英 ②良好 ③褐色	波頂部隅状突起か。内面は環状を呈す。突起外縁は刻みを付す。幅広連続刺突文と三角連続刺突文も施される。№89～91と同一個体。	勝坂1式
94 第42図 写図10	深鉢	230号土坑	口縁部1/4残存	①細砂礫・白色粒 ②軟質 ③鈍褐色	平縁。口唇部肥厚し内稜は尖る。主幹線は内皮使用の平行沈線で、不定形区画文を画す。区画内は幅広連続刺突文が迫い、三叉文を中位に充てる。	勝坂2式

遺物観察表

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
95 第43図 写図10	深鉢	JQ-79	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③褐色	平縁か。内稜は鋭く尖る。口唇部に半円状の刺突列。口縁部は隆線による弧状の区画文か。区画内は幅広連続刺突文と三角連続刺突文を施す。	勝坂２式
96 第43図 写図10	深鉢	JQ-77	口縁部1/4残存	①白色粒・黒色粒 ②良好 ③純褐色	平縁。内稜は矢る。口縁部は隆線を主幹線とせず、幅広連続刺突文と三角連続刺突文が横位に巡る。中位を三角連続刺突文による小波状文が配される。	勝坂２式
97 第43図 写図10	深鉢	JQ-80 JR-80	頸部破片	①粗砂礫・片岩 ②良好 ③褐色	口縁部下の破片。頸みを付す隆線と幅状突起で画される。区画内は大柄の三角連続刺突文と太い沈線を側線とする。頸部も２種沈線を交互に施文する。	勝坂２式
98 第43図 写図10	深鉢	JQ-79・80	体部破片	①粗砂礫・石英 ②良好 ③褐色	隆線による楕円状区画。区画内は三角連続刺突文と沈線が沿い中位に波状沈線を充てる。区画文上には横位沈線が多段に巡り、波状沈線と最位沈線を施す。	勝坂２式
99 第43図 写図10	深鉢	230号土坑	口縁部～体部1/4残存	①粗砂礫・片岩 ②やや軟質 ③褐色	平縁で、縁端状突起以下最位楕円状区画と弧状隆線が派生する。口縁部は交互三角区画文構成。側線は幅広連続刺突文。体部は平行沈線による横位波状文。	勝坂２式
100 第43図 写図11	深鉢	JP-80 JQ-80	体部中位破片	①粗砂礫・片岩 ②良好 ③純橙色	双環状突起と横位隆線による横帯構成以下弧状突起を配する幅広の体部文様帯。大柄の刺突文と沈線や短沈線が空白部を横位に充填する。№97・98と同一個体か。	勝坂２式
101 第43図 写図11	深鉢	230号土坑	体部中位欠損	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③純橙色	体部が細身の新道式系の土器。口縁部には大型突起が付きする。体部は横位隆線による多段横帯文構成。刺突文は逆位施文の特徴を有す。	勝坂２式
102 第44図 写図11	深鉢	230号土坑	頸部残存	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	大きく開く頸部。上位に口縁部隆線と突起、連続刺突文が見られ下位は体部上位隆線に沿う半円状沈線が看取される。№101と同一個体。	勝坂２式
103 第44図 写図11	深鉢	JO-81	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②脆弱 ③暗褐色	平縁。口縁部三角区画文。区画内は幅広連続刺突文を側線とし、沈線と三角連続刺突文が沿う。中位に三叉文を刻む。内面にも三角窓匠が配される。	勝坂２式
104 第44図 写図11	深鉢	230号土坑	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	平縁。口縁部に整った円孔を開ける。波状隆線の上端が看取され三角区画文の変化か。側線は幅広連続刺突文。沈線、三角連続刺突文が沿う。№103と同一個体か。	勝坂２式
105 第44図 写図11	深鉢	JP-78 JQ-78 JW-78	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③明褐色	上位には横位隆線が付され体部を分帯する。体部は双環状突起を中核に弧状隆線が派生する。側線として幅広連続刺突文と沈線。中位に沈線による三角文を配す。	勝坂２式
106 第44図 写図11	深鉢	JW-81	体部破片	①粗砂礫・片岩 ②良好 ③純褐色	横位隆線による横帯構成以下に双環状突起を配し、隆線が横位に派生する。側線は大柄の三角連続刺突文と沈線を充てる。№97等と同一個体。	勝坂２式
107 第44図 写図11	深鉢	JP-78 JQ-79	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③明褐色	下端の横位隆線は一次区画線か。弧状・斜位隆線が派生し大型の竜匠文を配す。側線は平行沈線と三角連続刺突文。	勝坂２式
108 第44図 写図11	深鉢	JP-76	体部破片	①粗砂礫 ②良好 ③褐色	上位横位隆線による体部分帯。隆線による波状文を配し幅広連続刺突文と三角連続刺突文が沿う。頸部は無文か。	勝坂２式
109 第44図 写図11	深鉢	1号配石	体部破片	①細砂粒 ②良好 ③黄橙色	刻みを付す２条の横位隆線による横帯文構成。側線に幅広連続刺突文が施される。下端に三角連続刺突文が巡る。	勝坂２式
110 第44図 写図12	深鉢	JQ-80	体部破片	①細砂粒 ②良好 ③黄橙色	刻みを付す隆線による横帯構成。隆線には突起痕跡有り。側線は幅広連続刺突文。中位には平行沈線と三角連続刺突文が施される。	勝坂２式
111 第44図 写図12	深鉢	JQ-80	体部破片	①細砂粒 ②良好 ③黄橙色	刻みを付す隆線による楕円状区画文。側線は連続刺突文を施す。区画中位には横位平行沈線が充てられる。	勝坂２式
112 第44図 写図12	深鉢	JQ-80	体部破片	①粗砂礫 ②良好 ③黄橙色	刻みを付す隆線による楕円状区画文。側線は連続刺突文を施す。区画中位には横位平行沈線を充填する。あるいは№109～111と同一個体か。	勝坂２式

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
113 第44図 写図12	深鉢	JR-81 JS-77	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③褐色	縦位隆線と弧状隆帯による区画か。三角連続刺突文と沈線を側線とし半肉彫手法による蛇行文や棲杙状刺突文を埋める。	勝坂２式
114 第44図 写図12	深鉢	JQ-79 JR-78・79 JT-78	体部1/4残存	①粗砂礫 ②良好 ③褐色	上位文様帯は平行沈線による方形区画文配列。下位は三角形区画か。区画内は幅広連続刺突文と三角連続刺突文を施す。三角区画中位は三叉文を充てる。	勝坂２式
115 第44図 写図12	深鉢	JP-79	体部破片	①粗砂礫・片岩 ②良好 ③純褐色	弧状隆線を配す。懸垂状区画か。側線は平行沈線と大柄の三角連続刺突文。結節状刺突文も平行し、空白部は内皮平行沈線と載線による意匠文を充てる。	勝坂２式か
116 第44図 写図12	深鉢	JQ-79	体部破片	①粗砂礫・片岩 ②良好 ③純褐色	平行沈線による不定形区画。区画内縁粗い刻みを連続し載痕列とする。	勝坂２式
117 第44図 写図12	深鉢	JQ-77	体部1/3残存	①細砂粒 ②良好 ③純褐色	２条の垂下隆線による懸垂文構成か。空白部は平行沈線による方形区画を主とする。区画内は三角連続刺突文や円形刺突文、三叉文を充てる。	勝坂２式
118 第44図 写図12	深鉢	JQ-77	体部～底部1/2残存	①細砂粒 ②良好 ③純褐色	おそらく№117と同一個体。２条垂下隆線と沈線による方形区画文。区画内無文処理も見られる。垂下隆線は２単位であろうか。	勝坂２式
119 120 第45図 写図12	深鉢	JQ-78 JQ-78	体部1/2残存	①細砂礫・黒色粒 ②良好 ③褐色	平行沈線による多段文様帯内を方形に区画する。区画内は沈線でＸ字状を基準とした意匠文を充てる。	勝坂２式
121 第45図 写図12	深鉢	JS-81	体部破片	①細砂粒・石英 ②良好 ③褐色	屈曲する類部下位。横位平行沈線による分帯と方形区画か。区画内は縦位矢羽状沈線と弧状沈線が施される。	中期中葉か
122 第45図 写図12	深鉢	JP-80 JQ-80	底部破片	①粗砂礫・片岩 ②良好 ③純褐色	底面剥落。平行沈線による垂下懸垂文と波状懸垂文の交互構成。やや雑な施文。	中期中葉か
123 第45図 写図12	深鉢	JQ-77 JR-77	体部1/3残存	①細砂礫・石英 ②やや軟質 ③褐色	体部下半の横位一次区画線。上位に幅広連続刺突文と三角連続刺突文の鋸歯状意匠が施される。	勝坂１式
124 第45図 写図12	深鉢	JQ-77・78	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③純暗褐色	内接鋭く内弯する口縁部。弧状突起を中核に隆線を繋ぐ横位反転構成。側線は沈線で１本描き。波状沈線と短沈線などで充填する。縄文は横位ＲＬ充填。	「新巻類型」
125 第45図 写図12	深鉢	JR-78	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	№124と同一個体か。口縁部下に３条の沈線を巡らし、縦位沈線で区画する。区画内は大柄の三叉文を対称に配しＲＬ縄文を充填施文する。	「新巻類型」
126 第45図 写図12	深鉢	JO-79	口縁部破片	①粗砂礫・黒色粒 ②やや軟質 ③黒褐色	内接鋭く口縁部内弯する。口縁下から懸垂する Ｊ字状隆帯。側線は１本描き沈線を２条施す。中位に円形刺突文。縄文はＲＬ縦位充填施文。	「新巻類型」
127 第45図 写図12	深鉢	JO-79	口縁部破片	①細砂粒 ②良好 ③純褐色	内接はやや緩やか。口縁部に小瘤状突起を付し弧状隆線が派生する。２条沈線を側線とし区画内を縦位ＲＬを充填する。	「新巻類型」
128 第45図 写図12	深鉢	JO-83	口縁部破片	①細砂粒・黒色粒 ②良好 ③純褐色	№127と同一個体か。内接はやや緩やか。口縁部に小瘤状突起を付し隆線による弧状区画。太沈線２条による側線とＲＬ充填施文。	「新巻類型」
129 第45図 写図12	深鉢	JQ-78	類部破片	①細砂粒・雲母末 ②良好 ③黒褐色	横位隆線は類部隆線か。横位隆線より派生する縦状の隆線。側線は３条の沈線。空白部は波状沈線が充てられ、ＲＬ縄文を充填施文する。	「新巻類型」
130 第45図 写図12	深鉢	230号土坑	類部破片	①粗砂粒・雲母 ②やや軟質 ③褐色	弧状突起と側線沈線。突起は中央が張かに凹む。沈線は１本描きで２条一組で側線となる。	「新巻類型」
131 第45図 写図13	深鉢	JP-82	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③純褐色	横位沈線上位は隆線か。体部には円形の貼付文。空白部分には沈線による渦巻文、三叉状意匠、短沈線が施され、ＲＬ縦位施文。	「新巻類型」
132 第45図 写図13	深鉢	JQ-79	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③褐色	体部下半の破片か。渦巻状意匠か弧状隆線に２条沈線が沿う。縦位沈線も看取される。縄文は縦位ＲＬ。	中期中葉

遺物観察表

遺物番号 掲載番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
133 第45図 写図13	深鉢	1号配石	体部破片	①粗砂粒 ②やや軟質 ③暗褐色	横位隆線は頸部隆線か。上位は幅広隆帯で弧状意匠。沈線が絡う。下位は波状隆線が垂下する。側線を施文しない。	中期中葉
134 第45図 写図13	深鉢	JQ-77	体部破片	①細砂粒 ②良好 ③純褐色	弧状突起を上位に1条の垂下隆線による懸垂文構成。2条沈線を側線とし横位にも連繋する。一部波状意匠を加える。縄文は縦位RL。	「新巻類型」
135 第45図 写図13	深鉢	JQ-77	体部破片	①細砂粒 ②良好 ③暗褐色	№134と同一個体か。渦巻状隆線と2条垂下隆線。側線は2条沈線で横位沈線と波状意匠も看取される。破片上端輪積み痕顕著。	「新巻類型」
136 第46図 写図13	深鉢	JQ-77・78	体部破片	①細砂粒 ②良好 ③純橙色	2条の垂下隆線と側線2条沈線。空白部分は短沈線、三角形状の意匠を充てる。中位は三叉文を刻む。	「新巻類型」
137 第46図 写図13	深鉢	230号土坑	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③純橙色	縦位沈線と斜位沈線によって画された空白部分に横位波状沈線と縦位短沈線が施される。	「新巻類型」
138 第46図 写図13	深鉢	JP-78・79 JT-80	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③橙色	剥落するが突起が付きれ弧状隆線が配される。空白部は沈線が乱雑に施文されるが、2条を一組で横位波状沈線が施される。	「新巻類型」
139 第46図 写図13	深鉢	230号土坑	底部2/3残存	①細砂粒・黒色粒 ②良好 ③純橙色	弧状・斜位隆線による懸垂文下端。側線は2条沈線と同一工具による押し引き沈線。空白部は波状沈線や短沈線及び縄文RLを施す。	「新巻類型」
140 第46図 写図13	深鉢	1号配石	底部1/2残存	①粗砂礫・白色粒 ②やや軟質 ③純褐色	垂下隆線による懸垂文構成。2条沈線を側線とするが剛突列を挟む。縦位波状三叉文も刻まれる。縄文は縦位RLを施す。	「新巻類型」
141 第46図 写図13	深鉢	JP-78	底部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③褐色	垂下隆線による懸垂文構成。側線は1・2条の沈線。空白部には短沈線による縦位波状文が充てられる。	「新巻類型」
142 第46図 写図13	深鉢	JP-78	底部破片	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③褐色	№141と同一個体か。垂下隆線による懸垂文構成。側線の沈線と空白部の垂下沈線が施される。	「新巻類型」
143 第46図 写図13	深鉢	230号土坑	体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③純褐色	体部上半。2条一組と1条の隆線による体部区画。2条沈線が沿い、円文と円形刺突文、短沈線、三叉文が配される。縄文はRL縦位充填施文。	「新巻類型」
144 145 146 第46図 写図14 147 第46図 写図13	浅鉢	230号土坑 JO・JP-78 JP-78 230号土坑	口縁～体部1/3残存	①細砂・雲母 ②良好 ③淡橙色	体部で強く屈曲する。口縁部肥厚。口縁部文様帯は縦位沈線で区画する。内皮沈線を横位に巡らし、沈線間に刻みを加える。弧状隆線突起を付し沈線を側線とする。三叉文と円文も配す。施文は深い。体部RL縄文を施す。既面劣化痕残る。	北陸系？
148 149 150 151 152 第47図 写図14	深鉢	JO-82・83 JP-82 JO・JP-81 JO-82 JP-81 JP-81 JP-81	口縁～体部1/2残存	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③純褐色	波状口縁。波頂部下に隆線による反転渦巻文を配し隆線で繋ぎ変形区画文を画する。中位の横位隆線は分帯線か。区画内は横位・斜位沈線を充填する。沈線間は交互刺突あるいは交互三角印刻する箇所もある。体部下半は縦位沈線を重ねる。半截竹管内皮沈線を施すが、顕著な重複施文ではない。	「焼町類型」
153 第47図 写図14	深鉢	JY-82	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③暗褐色	口縁部双環状突起より環状突起が懸垂する。隆線が派生し円形区画を画すか。沈線は1本描きで深い。三叉文と円文、区画内は刺突文を充填する。	「焼町類型」
154 第47図 写図14	深鉢	230号土坑	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③橙色	口縁部に渦巻状突起を付す。以下口縁部文様帯は環状突起と楕円状区画文を配す。体部は隆線が垂下し1本描き沈線が施される。	「焼町類型」
155 第47図 写図14	深鉢	230号土坑	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③純橙色	口縁部文様帯に小型の環状意匠を配し、横位沈線を充填する。体部も横位沈線を施し、三叉文と円文が刻まれる。	「焼町類型」

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
156 第47図 写図14	深鉢	230号土坑	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍橙色	口縁部突起。口唇部端部に面を持ち三叉文と円文を刺わ。以下は横位沈線や短沈線が施される。	「焼町類型」
157 第47図 写図14	深鉢	JO-80	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②やや軟質 ③鈍褐色	口縁部突起例示。内面に３条の横位隆線を付し、突出する内接を作る。口唇部端部に円形の刺突文を施す。	「焼町類型」
158 第47図 写図14	深鉢	JY-82	体部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍褐色	弧状隆線が付され側線沈線は１本描き。三叉文と沈線を充填するが、各所に刺突文や短沈線を施す。	「焼町類型」
159 160 161 第47図 写図14	深鉢	JO-78 194号土坑 194号土坑	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③褐色	欠損するが口縁部Ｓ字状突起が立体的に拝される。２・３条の沈線が突起状に施され、端部には短沈線が加わる。突起上端には細隆線の加飾があり、内接も顕著である。体部には２条隆線が懸垂し、ＬＲ縄文が斜位に施される。	中峠式「三原田型深鉢」
162 第48図 写図14	深鉢	201号土坑	頸部破片	①粗砂礫 ②良好 ③褐色	半截竹管内反使用の平行沈線が頸部屈曲部を数条巡る。体部は縦位沈線が垂下し、縦位ＲＬ縄文が施される。	加曽利ＥＩ式古
163 第48図 写図14	深鉢	JO-79 JP-78	頸部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	横位沈線が数条巡る。沈線間にＲＬ縄文が横位に充填施文される。以下縦位沈線が密に懸垂する。	加曽利ＥＩ式古
164 第48図 写図14	深鉢	JU-82	頸部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍橙色	頸部屈曲部に横位隆線を２条付し体部に１条の隆線が垂下する。沈線を側線とし、ＲＬ縄文を隆線上に施す。	加曽利ＥＩ式古
165 第48図 写図14	深鉢	JO-77	体部破片	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③暗褐色	２条一組の隆線を横位に付し、渦巻く状隆線が懸垂する。側線は無で、縄文は縦位・斜位ＲＬ。	加曽利ＥＩ式古
166 第48図 写図15	深鉢	JN-77	体部破片	①粗砂粒・石英 ②良好 ③鈍褐色	２条一組の弧状隆線。側線は無い。地文は縦位・斜位ＲＬ縄文。	加曽利ＥＩ式古
167 第48図 写図15	深鉢	JO-82	体部破片	①粗砂粒・石英 ②良好 ②鈍褐色	僅かに横位隆線が看取される。２条の沈線が懸垂し、地文に縦位ＬＲ縄文が施される。	加曽利ＥＩ式古
168 第48図 写図15	深鉢	230号土坑	体部破片	①粗砂粒・石英 ②良好 ③鈍褐色	体部下半。２条の沈線による懸垂文構成下端。地文は縦位ＬＲ縄文。№167と同一個体か。	加曽利ＥＩ式古
169 第48図 写図15	浅鉢	JQ-78	1/3残存	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③鈍橙色	中空の波状突起を付す稀有な例。突起単位は不明。２単位か。内外面研磨し、内面口縁部～外面体部上半は赤彩する。口縁部に顕著に残る。	中期中葉
170 第48図 写図15	深鉢	JO-79	1/2残存	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③橙色	大型の深鉢底部。２条の懸垂沈線文下端。外面は比較的丁寧に研磨される。	中期中葉
171 第48図 写図15	浅鉢	JQ-82	底部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍橙色	砂質な感が強い。底径広く強く開く体部。内外面とも弱い撫でを加える。	時期不詳
172 第48図 写図15	浅鉢	JS-79	底部破片	①粗砂礫・石英 ①良好 ①鈍暗褐色	底部突出し体部は強く開く。内底面に浅い段を有す。内外面研磨を施す。底面に網代痕残る。	時期不詳
173 第48図 写図15	浅鉢	230号土坑	口縁～体部 1/4残存	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③暗赤褐色	波状口縁を呈す。内面に２段の接を有す。内面は丁寧な研磨。口縁部に赤彩痕僅かに残る。木質孔の補修孔を内外面に見る。	中期中葉
174 第48図 写図15	深鉢	230号土坑	底部のみ残存	①粗砂粒・雲母 ②良好 ③鈍褐色	直立気味に立ち上がる底部。底面は僅かに上げ底を呈す。比較的器厚薄手。	中期中葉
175 第48図 写図15	深鉢	JS-81	口縁部破片	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍褐色	緩やかな内彎口縁部。沈線による逆Ｕ字状懸垂文。縦位矢羽状沈線を充填する。縄文はＬＲ縦位施文。	加曽利ＥＩＩ式
176 第48図 写図15	深鉢	JT-75・76 JU-76	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒 ②良好 ③暗褐色	粗雑に条線を施し、口縁部に２条の隆帯を貼付する。外面にはケズリ痕が残る。	加曽利Ｂ2

遺物観察表

遺物番号 掲図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
177 第49図 写図16	深鉢	17号土坑	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・黒色粒 ②良好 ③暗褐色	粗雑に条線を施し、口縁部に２条の隆帯を貼付する。外面にはケズリ痕が残る。№176と同一個体。	加曽利Ｂ２
178 第49図 写図16	深鉢	１号配石	口縁部～体部2/3残存	①粗砂粒・白色粒・黒色粒 ②良好 ③暗褐色	対弧状に条線を施し、口縁部に２条の隆帯とボタン状の貼り付けをする。	加曽利Ｂ２
179 第49図 写図16	深鉢	JQ-78 JV-78・80	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・黒色粒 ②良好 ③暗褐色	対弧状に条線を施し、口縁部に２条の隆帯とボタン状の貼り付けをする。№178と同一個体。	加曽利Ｂ２
180 第50図 写図16	深鉢	１号配石	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	３単位突起。突起内外には、中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。体部の異方向の対弧状沈線と平行沈線間にはＬＲ充填縄文。	加曽利Ｂ２
181 第50図 写図16	深鉢	159号土坑	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	３単位突起。２条の平行沈線間には無節Ｌ充填縄文。内面に１条の横線が巡る。	加曽利Ｂ２
182 第50図 写図16	深鉢	26号土坑	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③褐色	３単位突起。突起内外には、中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。体部の異方向の対弧状沈線にはＬＲ充填縄文。内面に１条の横線が巡る。	加曽利Ｂ２
183 第50図 写図16	深鉢	JO-78 JR-77 JY-80	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③褐色	３単位突起。突起内外には、中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。内面に１条の横線が巡る。	加曽利Ｂ２
184 第50図 写図17	深鉢	JS-79	口縁部破片	①細砂粒・白色粒・石英 ①良好 ①褐色	３単位突起。突起内外には、中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。内面に１条の横線が巡る。	加曽利Ｂ２
185 第51図 写図17	深鉢	JU-78 KB-81	口縁部破片	①細砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③褐色	３単位突起。突起内外には、中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。内面に１条の横線が巡る。	加曽利Ｂ２
186 第51図 写図17	深鉢	JT-78	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③褐色	３単位突起。突起内外には、中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。口縁部直下と体部の異方向の対弧状沈線にはＬＲ充填縄文。	加曽利Ｂ２
187 第51図 写図17	深鉢	JS-78 JU-77・78 JV-77	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③褐色	平口縁。口縁部には対弧状沈線がほどこされると思われる。体部の異方向の対弧状沈線と平行沈線間にはＬＲ充填縄文。	加曽利Ｂ２
188 第51図 写図17	深鉢	１号配石	口縁部～体部破片	①細砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	平口縁。口縁部には中心に縦沈線が入る対弧状沈線が施される。内面に１条の横線が巡る。	加曽利Ｂ２
189 第51図 写図17	浅鉢	JW-80	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	平口縁。口縁部には対弧状沈線が施される。口縁部にはＬＲ縄文。	加曽利Ｂ２
190 第51図 写図17	浅鉢	１号配石	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	平口縁。口縁部には対弧状沈線が施される。口縁部にはＬＲ縄文。	加曽利Ｂ２
191 第51図 写図17	浅鉢	JS-80 JV-79	口縁部～体部破片	①細砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	口縁部に小突起が貼付される。口縁部にはＬＲ縄文。	加曽利Ｂ２
192 第51図 写図17	浅鉢	KA-83 KB-81	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③黒褐色	内外面に研磨が施されるが、凹凸が残る。	加曽利Ｂ２
193 第51図 写図17	浅鉢	JU-77	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒・石英 ②良好 ③暗褐色	内外面にナデが施されるが、内面はより丁寧である。	加曽利Ｂ２
194 第51図 写図17	浅鉢	JR-79	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	小波状口縁。体部屈曲部が突出する。内面研磨が施される。	加曽利Ｂ２

遺物番号 挿図番号 図版番号	器種	出土位置	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・文様の特徴	備考
195 第51図 写図17	浅鉢	JT-78 JU-77 JV-77	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	小波状口縁。体部はケズリ痕が目立つ。内面には2条の横線が巡る。	加曽利B2
196 第51図 写図17	浅鉢	JU-80	口縁部～体部破片	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③明褐色	緩やかな波状口縁。内外面にナデが施されるが、外面はやや粗い砂粒が目立つ。	加曽利B2
197 第51図 写図17	浅鉢	115号土坑	口縁部～体部1/3残存	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③明褐色	緩やかな波状口縁。内外面にナデが施されるが、外面はやや粗い砂粒が目立つ。No196と同一個体。	加曽利B2
198 第51図 写図17	注口	JU-78・79	体部上1/2残存	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③暗褐色	4つの大きめな貼り付け瘤が貼付される。体部に巡る隆帯には剪みが施される。	加曽利B2

〈石器〉

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
1 第52図 写図18	石鏃	JS－80	長 4.5 幅 1.3 厚 0.4 重 2.7	黒色頁岩	平基有茎鏃 茎部一部欠損
2 第52図 写図18	石鏃	JS－77	長 4.2 幅 2.1 厚 0.4 重 3.1	黒色安山岩	凹基無茎鏃 基部欠損
3 第52図 写図18	石鏃	JW－77	長 5.0 幅 2.0 厚 0.5 重 3.6	黒色頁岩	凸基有茎鏃 アスファルト付着
4 第52図 写図18	石鏃	—	長 2.2 幅 1.8 厚 0.4 重 1.3	黒色安山岩	凹基無茎鏃 完形
5 第52図 写図18	石鏃	—	長 2.2 幅 1.4 厚 0.5 重 1.1	黒色安山岩	凹基無茎鏃 刃部・基部欠損
6 第52図 写図18	石鏃	JO－78	長 2.3 幅 1.9 厚 0.3 重 1.2	珪質頁岩	凹基無茎鏃 基部欠損
7 第52図 写図18	石鏃	JT－75	長 2.0 幅 1.6 厚 0.3 重 0.7	黒色頁岩	凹基無茎鏃 刃部一部欠損
8 第52図 写図18	石鏃	JS－75	長 2.3 幅 1.3 厚 0.3 重 0.9	黒曜石	凹基無茎鏃 完形 研磨後に剥離
9 第52図 写図18	石鏃	—	長 1.7 幅 1.6 厚 0.4 重 0.8	玉髄	凹基無茎鏃 基部欠損
10 第52図 写図18	石鏃	JS－78	長 2.5 幅 1.9 厚 0.5 重 1.5	黒色安山岩	凹基無茎鏃 裏面に擦痕 完形

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
11 第52図 写図18	石鏃	JS－78	長 1.8 幅 0.9 厚 0.5 重 0.8	黒色安山岩	凹基無茎鏃 基部欠損
12 第52図 写図18	石匙	JQ－76	長 6.1 幅 9.9 厚 0.8 重 42.7	黒色頁岩	横型、直刃 横長剥片を素材 完形
13 第52図 写図18	石匙	JR－78	長 6.9 幅 9.0 厚 1.0 重 59.0	黒色頁岩	横型、円刃 横長剥片を素材、微細剥離による刃部 完形
14 第53図 写図18	石匙	226号土坑	長 7.2 幅 6.9 厚 1.3 重 43.2	黒色頁岩	横型、直刃幅広縦長剥片を素材 完形
15 第53図 写図18	スクレイパー	JP－83	長 8.1 幅 5.0 厚 2.3 重 91.0	黒色頁岩	三角形状、両面に平坦加工、端部に急斜なへら状の刃部 完形
16 第53図 写図18	スクレイパー	JT－76	長 7.6 幅 4.1 厚 1.2 重 43.6	黒色頁岩	三角形状、横長剥片を素材、両面に平坦加工、端部に急斜なへら状の刃部　完形
17 第53図 写図18	スクレイパー	JP－76	長 4.9 幅 9.5 厚 1.3 重 47.8	黒色頁岩	三角形状、横長剥片を素材、全縁に刃部 完形
18 第53図 写図19	スクレイパー	JP－79	長 10.4 幅 7.6 厚 1.8 重 157.0	細粒輝石安山岩	横長剥片を素材、ほぼ全周に刃部 完形
19 第53図 写図19	スクレイパー	JO－77	長 5.1 幅 12.3 厚 2.1 重 116.0	珪質頁岩	台形状、横長剥片を素材、縁辺に刃部

遺物観察表

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
20 第53図 写図19	スクレイパー	JO−79	長 4.7 幅 9.5 厚 1.2 重 74.0	黒色頁岩	台形状、横長剝片を素材、三縁刃部痕 完形
21 第53図 写図19	スクレイパー	JO−79	長 8.1 幅 4.9 厚 1.8 重 75.0	黒色頁岩	三角形状、横長剝片を素材、背面全周に刃部
22 第53図 写図19	スクレイパー	JW−83	長 4.0 幅 10.3 厚 1.5 重 71.0	黒色頁岩	横長剝片を素材、背面側に刃部 完形
23 第53図 写図19	スクレイパー	JR−78	長 6.8 幅 4.3 厚 1.3 重 48.0	黒色頁岩	台形状、左右両側縁に刃部 完形
24 第53図 写図19	スクレイパー	JQ−79	長 11.0 幅 7.5 厚 1.7 重 144.0	黒色頁岩	横長剝片を素材、両側縁に刃部 完形
25 第53図 写図19	スクレイパー	JP−79	長 4.5 幅 6.2 厚 1.7 重 57.0	黒色頁岩	三縁に加工痕、鋸歯状の粗い刃部 完形
26 第54図 写図19	スクレイパー	KA−78	長 8.9 幅 8.4 厚 3.1 重 270.0	黒色頁岩	片縁に加工痕、裏面右側縁に刃部 完形
27 第54図 写図19	スクレイパー	JS−79	長 7.7 幅 9.3 厚 2.4 重 169.0	黒色頁岩	左側縁から下端部に円刃状の刃部 完形
28 第54図 写図19	スクレイパー	JT−77	長 8.2 幅 11.7 厚 2.9 重 222.0	黒色頁岩	下端部に鋸歯状の刃部 完形
29 第54図 写図19	スクレイパー	JS−77	長 11.9 幅 14.5 厚 3.6 重 529.0	黒色頁岩	大形の横長剝片を素材、裏面左側縁に微細な刃部 完形
30 第54図 写図20	スクレイパー	JS−82	長 13.4 幅 13.7 厚 3.2 重 706.0	変質玄武岩	円盤状の剝片、全周に微細な刃部、縁辺に一部微細な磨耗痕、完形
31 第54図 写図20	スクレイパー	1号配石	長 7.5 幅 8.7 厚 3.0 重 251.0	変質玄武岩	片面に円形の刃部 完形
32 第55図 写図20	磨製石斧	JS−80	長 7.9 幅 3.9 厚 1.8 重 86.0	珪質頁岩	撥形、刃部始全面研磨一部敲打痕残る 完形

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
33 第55図 写図20	磨製石斧	JU−76	長 8.4 幅 2.6 厚 1.8 重 49.0	黒色頁岩	棒状礫を素材、剝離に整形後、縁辺をつぶす敲打、裏面左側面に研磨痕、未製品の可能性 完形
34 第56図 写図20	打製石斧	230号土坑	長 10.6 幅 4.9 厚 1.5 重 111.0	灰色安山岩	撥形、偏刃両面に磨耗痕 完形
35 第55図 写図20	打製石斧	JP−78	長 7.4 幅 4.6 厚 1.5 重 63.0	黒色頁岩	撥形、直刃 完形
36 第55図 写図20	打製石斧	JW−81	長 9.6 幅 4.8 厚 1.5 重 89.0	珪質頁岩	撥形、偏刃側縁、刃部に磨耗痕 完形
37 第55図 写図20	打製石斧	JU−81	長 8.9 幅 4.1 厚 1.3 重 48.0	黒色頁岩	撥形、偏刃側縁に磨耗痕 基部欠損
38 第55図 写図20	打製石斧	JQ−78	長 9.7 幅 5.7 厚 2.2 重 143.0	黒色頁岩	撥形、偏刃両面に磨耗痕 ほぼ完形
39 第55図 写図20	打製石斧	230号土坑	長 10.2 幅 4.1 厚 1.8 重 88.0	黒色頁岩	短冊形、偏刃片面自然面表裏・左右両縁部に磨耗痕 完形
40 第55図 写図20	打製石斧	230号土坑	長 8.8 幅 4.5 厚 1.0 重 51.0	黒色頁岩	短冊形、円刃刃部一部欠損
41 第55図 写図20	打製石斧	JO−77	長 12.3 幅 5.9 厚 2.3 重 156.0	黒色頁岩	両縁溝曲撥形偏刃、刃部に磨耗痕 ほぼ完形
42 第55図 写図20	打製石斧	JT−82	長 8.4 幅 6.3 厚 1.4 重 100.0	変質玄武岩	両縁溝曲撥形偏刃、片面自然面 完形
43 第56図 写図20	打製石斧	JQ−78	長 5.7 幅 4.1 厚 0.9 重 29.0	黒色頁岩	短冊形、直刃片面自然面 完形
44 第56図 写図21	打製石斧	JS−81	長 8.8 幅 5.4 厚 1.0 重 43.0	黒色頁岩	撥形、円刃裏面刃部に磨耗痕 ほぼ完形
45 第56図 写図21	打製石斧	JQ−78	長 10.4 幅 4.3 厚 1.5 重 106.0	変質安山岩	短冊形、偏刃 完形
46 第56図 写図21	打製石斧	JQ−78	長 16.7 幅 6.0 厚 2.7 重 323.0	珪質頁岩	短冊形、側縁に一部磨耗痕刃部欠損

遺物No. 挿図No. 写図No.	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
47 第56図 写図21	打製石斧	JR－83	長 13.8 幅 5.4 厚 2.2 重 230.0	黒色頁岩	短冊形、円刃 片面自然面 完形
48 第56図 写図21	打製石斧	1号配石	長 10.6 幅 5.2 厚 1.8 重 94.0	粗粒輝石安山岩	撥形 刃部欠損
49 第56図 写図21	打製石斧	JO－80	長 9.8 幅 5.5 厚 1.8 重 128.0	黒色頁岩	撥形、直刃 完形
50 第56図 写図21	打製石斧	JW－79	長 15.2 幅 7.9 厚 3.6 重 424.0	灰色安山岩	分銅形、円刃 刃部欠損
51 第56図 写図21	打製石斧	JU－77	長 12.8 幅 8.0 厚 4.4 重 344.0	黒色頁岩	両縁湾曲撥形 直刃 完形
52 第57図 写図21	打製石斧	JQ－79	長 15.5 幅 7.4 厚 4.3 重 536.0	黒色頁岩	分銅形、円刃 一部自然面 完形
53 第57図 写図21	打製石斧	JQ－79	長 12.1 幅 5.3 厚 2.4 重 197.0	点紋頁岩	片縁湾曲撥形 円刃、刃部・左右両縁に磨耗痕、完形
54 第57図 写図21	打製石斧	JT－76	長 8.6 幅 4.4 厚 1.9 重 75.0	黒色頁岩	短冊形、円刃 完形
55 第57図 写図21	打製石斧	KB－81	長 9.6 幅 4.7 厚 1.4 重 71.0	珪質頁岩	撥形、円刃 刃部に磨耗痕 完形
56 第57図 写図22	打製石斧	JQ－78	長 11.3 幅 4.8 厚 1.5 重 106.0	黒色頁岩	短冊形、直刃 刃部・裏面左側縁に磨耗痕 ほぼ完形
57 第57図 写図22	打製石斧	1号配石	長 9.1 幅 4.7 厚 1.4 重 77.0	細粒輝石安山岩	短冊形、偏刃 刃部に磨耗痕 基部欠損
58 第57図 写図22	打製石斧	JW－82	長 8.9 幅 5.0 厚 1.5 重 79.0	黒色頁岩	短冊形、円刃 完形
59 第57図 写図22	打製石斧	JR－78	長 7.9 幅 4.9 厚 1.1 重 59.0	黒色頁岩	短冊形、直刃 ほぼ完形
60 第57図 写図22	打製石斧	JQ－80	長 16.4 幅 5.5 厚 2.8 重 328.0	珪質頁岩	撥形、円刃 完形
61 第57図 写図22	打製石斧	JS－80	長 11.7 幅 5.1 厚 2.5 重 177.0	ホルンフェルス	撥形、円刃 ほぼ完形
62 第58図 写図22	打製石斧	JR－81	長 7.5 幅 5.7 厚 1.2 重 85.0	細粒輝石安山岩	短冊形、円刃 刃部に磨耗痕 基部欠損
63 第58図 写図22	打製石斧	JQ－82	長 8.1 幅 5.1 厚 1.1 重 71.0	黒色頁岩	撥形、円刃 刃部に磨耗痕 基部欠損
64 第58図 写図22	打製石斧	JQ－79	長 7.6 幅 3.7 厚 1.0 重 37.0	珪質頁岩	短冊形、円刃 ほぼ完形
65 第58図 写図22	打製石斧	JO－78	長 15.7 幅 8.7 厚 3.8 重 699.0	輝緑岩	短冊形、直刃 三縁に直刃状加工痕、片面自然面、完形
66 第58図 写図22	打製石斧	KB－80	長 16.9 幅 8.6 厚 5.6 重 231.0	砂岩	幅広の短冊形 端部に粗い刃部 完形
67 第58図 写図22	スタンプ形石器	JO－78	長 7.0 幅 4.7 厚 3.2 重 132.0	玄質玄武岩	両縁部、底面部に加工痕 底部欠損
68 第58図 写図23	不定形剥片石器	JO－80	長 12.9 幅 6.3 厚 3.1 重 281.0	黒色頁岩	全周に加工痕 完形
69 第58図 写図23	不定形剥片石器	JR－78	長 7.6 幅 8.8 厚 2.7 重 244.0	珪質頁岩	裏面に潰歯状の粗い加工痕 完形
70 第58図 写図23	不定形剥片石器	JR－79	長 7.2 幅 12.3 厚 2.3 重 193.0	珪質頁岩	横長剥片を素材とし、裏面に加工痕 完形
71 第59図 写図23	不定形剥片石器	JO－77	長 11.8 幅 7.4 厚 2.1 重 214.0	黒色頁岩	裏面のほぼ全周に加工痕 一部自然面 完形
72 第59図 写図23	礫器	JR－82	長 15.1 幅 8.0 厚 3.7 重 463.0	細粒輝石安山岩	扁平な礫を素材、両面に平坦な加工、下半分は尖頭形 完形
73 第59図 写図23	礫器	JO－78	長 13.0 幅 9.9 厚 5.2 重 801.0	黒色頁岩	扁平な楕円礫を素材、端部にチョッピングトゥール状の刃部、完形
74 第59図 写図23	礫器	JT－81	長 10.2 幅 14.6 厚 6.8 重 941.0	黒色頁岩	扁平な楕円礫を素材、チョッピングトゥール状の刃部
75 第59図 写図23	礫器	30号土坑	長 11.2 幅 8.2 厚 4.1 重 331.0	黒色頁岩	チョッピングトゥール状の剥離による整形

遺物観察表

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
76 第60図 写図23	礫器	JW－79	長 8.6 幅 10.0 厚 4.7 重 514.0	珪質頁岩	分割された礫を素材、チョッピングトゥール状の剥離による刃部
77 第60図 写図24	礫器	JU－78	長 9.1 幅 8.9 厚 5.4 重 422.0	珪質頁岩	チョッピングトゥール状の剥離による刃部
78 第60図 写図24	石核	JR－78	長 6.0 幅 8.3 厚 3.1 重 136.0	珪質頁岩	厚手の横長剥片を素材、裏面を打面にして剥離
79 第60図 写図24	石核	JT－77	長 11.6 幅 18.2 厚 9.8 重 2,211	黒色頁岩	大型の亜角礫を素材、チョッピングトゥール状の剥離
80 第61図 写図24	石核	JR－78	長 13.6 幅 8.2 厚 6.2 重 514.0	珪質頁岩	三面剥離上端部でチョッピングトゥール状の剥離
81 第61図 写図24	石核	JR－79	長 9.4 幅 7.7 厚 6.8 重 229.0	珪質頁岩	打面転移しながら剥離
82 第61図 写図24	石核	JW－78	長 6.0 幅 8.9 厚 4.3 重 215.0	珪質頁岩	自然面を打面にして剥離
83 第61図 写図24	石核	JU－79	長 7.7 幅 11.2 厚 3.4 重 258.0	硬質頁岩	厚手の縦長剥片を素材、裏面を打面として連続剥離
84 第61図 写図24	石核	—	長 11.6 幅 12.9 厚 7.3 重 1,158	黒色頁岩	分割礫を素材、分割面を打面にして連続剥離
85 第62図 写図25	石核	JT－79	長 9.2 幅 8.9 厚 5.4 重 469.0	黒色頁岩	打面と作業面を入れ換える剥離
86 第62図 写図25	石核	JR－82	長 7.5 幅 6.1 厚 4.3 重 235.0	黒色安山岩	球状の円礫を材、90度打面転移して小型の剥片を剥離
87 第62図 写図25	石核	JN－78	長 15.0 幅 14.9 厚 6.6 重 1,484	変質玄武岩	分割された扁平礫を素材、分割面を打面にして剥離
88 第62図 写図25	石核	JP－79	長 11.5 幅 9.0 厚 8.3 重 808.0	黒色頁岩	四面に剥離面、大型の剥片を剥離
89 第63図 写図25	石核	JO－82	長 10.0 幅 6.6 厚 3.9 重 205.0	黒色安山岩	打面転移しながら四面で剥離

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
90 第63図 写図25	石核	1号配石	長 9.0 幅 17.0 厚 8.2 重 1,100	黒色頁岩	亜角礫を素材105と接合
91 第63図 写図25	石核	—	長 18.7 幅 18.0 厚 12.8 重 4,290	黒色頁岩	大型の亜角礫を素材、分割して剥離
92 第64図 写図26	石核	JO－78	長 14.0 幅 11.7 厚 16.3 重 3,146	黒色頁岩	打面と作業面を交互に入れ換える剥離
93 第64図 写図26	石核	JO－76	長 9.4 幅 16.8 厚 5.4 重 730.0	黒色頁岩	厚手の横長剥片を素材94と接合
94 第64図 写図26	石核	2号配石	長 29.3 幅 10.3 厚 6.1 重 1,250	黒色頁岩	亜角礫を素材、大型の剥片を剥離93と接合
95 第65図 写図26	石核	JO－78	長 8.8 幅 16.1 厚 8.2 重 1,189	黒色頁岩	分割面を打面にして剥離
96 第65図 写図26	石核	KA－79	長 10.7 幅 14.4 厚 6.6 重 831.0	珪質頁岩	分割礫を素材、上端部でチョッピングトゥール状の剥離
97 第65図 写図27	石核	JO－77	長 14.6 幅 18.0 厚 8.5 重 2,786	変質玄武岩	二分割された亜角礫を素材、大型剥片を一枚剥離
98 第66図 写図27	剥片	JT－78	長 15.8 幅 8.0 厚 1.3 重 224.0	黒色頁岩	大形の幅広縦長剥片、右側縁に刃こぼれ状の剥離 完形
99 第66図 写図27	剥片	KB－77	長 13.5 幅 7.4 厚 1.6 重 160.0	珪質頁岩	大形の幅広縦長剥片、全周に微細な剥離 完形
100 第66図 写図27	剥片	JO－83	長 13.7 幅 3.9 厚 1.9 重 87.0	黒色頁岩	縦長剥片、表面自然面 完形
101 第66図 写図27	剥片	JV－80	長 15.5 幅 9.0 厚 3.3 重 411.0	黒色頁岩	大形の縦長剥片、右側縁に微細な剥離 完形
102 第66図 写図27	剥片	JP－82	長 7.9 幅 17.5 厚 1.8 重 343.0	黒色頁岩	大形の横長剥片、下端部に微細な剥離 完形
103 第66図 写図28	剥片	JX－83	長 6.9 幅 9.1 厚 1.7 重 123.0	黒色頁岩	横長剥片、表面自然面 完形

遺物No. 挿図No. 写図No.	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
104 第66図 写図28	剝片	JS−77	長 5.3 幅 6.7 厚 1.1 重 29.0	硬質頁岩	横長剝片 完形
105 第67図 写図28	剝片	1号配石	長 8.4 幅 13.8 厚 8.1 重 952.0	黒色頁岩	厚みのある大型の剝片 90と接合
106 第67図 写図28	砥石	JS−77	長 10.5 幅 6.7 厚 1.5 重 115.0	凝灰質砂岩	楕円形状、両面使用痕 完形
107 第67図 写図28	磨石	JT−80	長 11.8 幅 8.9 厚 5.9 重 1,000	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、表裏面に擦痕、表中央に凹、上下端に敲打痕、完形
108 第67図 写図28	磨石	JS−80	長 11.0 幅 8.6 厚 5.2 重 602.0	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、表裏・下部に敲打痕 完形
109 第67図 写図28	磨石	JO−83	長 14.6 幅 6.8 厚 5.4 重 917.0	変質安山岩	表面・左側面に擦痕、裏面中央に敲打痕 完形
110 第67図 写図28	磨石	JR−81	長 7.2 幅 7.3 厚 3.0 重 133.0	蛇紋岩	扁平な円礫 表面一部欠損
111 第67図 写図28	磨石	JX−80	長 6.2 幅 4.9 厚 4.4 重 159.0	流紋岩	球状の円礫、上下端部に敲打痕 完形
112 第67図 写図28	磨石	KB−81	長 9.5 幅 6.8 厚 3.9 重 291.0	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、表裏に一部擦痕 完形
113 第68図 写図28	磨石	JO−79	長 14.1 幅 10.8 厚 5.9 重 1,300	ひん岩	扁平な楕円礫、上下端部に僅かに敲打痕 完形
114 第68図 写図28	磨石	200号土坑	長 10.6 幅 8.0 厚 3.1 重 406.0	ひん岩	扁平な楕円礫、表裏面に擦痕 完形
115 第68図 写図28	磨石	209号土坑	長 8.6 幅 8.7 厚 2.4 重 257.0	ひん岩	扁平な円礫、上下端に敲打痕、表裏面に擦痕、完形
116 第68図 写図29	磨石	216号土坑	長 10.0 幅 6.7 厚 5.7 重 635.0	石英閃緑岩	棒状の礫、表裏面に擦痕、上端部に敲打痕、片側欠損
117 第68図 写図29	磨石	JP−82	長 17.2 幅 8.7 厚 6.6 重 1,332	石英閃緑岩	棒状の礫、表裏、左側面に擦痕、上端部に敲打痕 完形
118 第68図 写図29	磨石	JT−82	長 14.4 幅 12.2 厚 5.5 重 1,600	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、裏面に凹、上端部に敲打痕 完形
119 第68図 写図29	敲石	JV−78	長 9.9 幅 8.7 厚 4.7 重 547.0	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、表裏・側縁部に敲打痕 完形
120 第68図 写図29	敲石	1号配石	長 8.0 幅 8.0 厚 5.4 重 477.0	溶結凝灰岩	半球状の礫、底面に敲打痕 完形
121 第69図 写図29	多孔石	JS−80	長 30.4 幅 23.4 厚 15.9 重 13,500	粗粒輝石安山岩	表裏面に径1cm程の凹 完形
122 第69図 写図29	多孔石	JN−83	長 27.1 幅 19.9 厚 14.0 重 9,900	粗粒輝石安山岩	表裏面に径1cm程の凹 ほぼ完形
123 第69図 写図29	凹石	JX−82	長 7.0 幅 9.1 厚 3.3 重 258.0	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、裏面に凹、上端部に敲打痕 片側欠損
124 第69図 写図29	凹石	JX−79	長 9.9 幅 7.4 厚 5.0 重 512.0	粗粒輝石安山岩	扁平な棒状礫、表裏面に擦痕、表中央部に凹 周端部欠損
125 第69図 写図29	凹石	1号配石	長 11.0 幅 8.9 厚 4.5 重 600.0	溶結凝灰岩	扁平な楕円礫、裏面中央部に凹、周縁部に敲打痕、完形
126 第69図 写図30	凹石	JS−81	長 10.3 幅 8.0 厚 4.1 重 378.0	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫、表裏面中央部に凹、周縁部に敲打痕 完形
127 第70図 写図30	台石	JR−78	長 25.1 幅 17.6 厚 5.1 重 3,100	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫を素材、周縁部に敲打痕 完形
128 第70図 写図30	台石	—	長 20.2 幅 15.0 厚 4.5 重 2,100	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫 側縁部欠損
129 第70図 写図30	台石	1号配石	長 38.0 幅 33.3 厚 15.0 重 28,900	粗粒輝石安山岩	大型の扁平な円礫、片面に平坦面 完形
130 第71図 写図30	台石	1号配石	長 31.2 幅 27.0 厚 9.4 重 13,500	粗粒輝石安山岩	扁平な亜角礫、表面に擦痕 完形
131 第71図 写図31	石皿	JP−83	長 14.0 幅 13.9 厚 4.8 重 1,155	変質安山岩	扁平な礫を素材、表面中央部に擦痕 ほぼ完形

遺物観察表

遺物No 挿図No 写図No	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴
132 第71図 写図31	石皿	JW－78	長 19.7 幅 14.8 厚 5.8 重 2,800	粗粒輝石安山岩	扁平な礫、表裏面に擦痕周縁部に敲打痕ほぼ完形
133 第71図 写図31	石皿	KA－79	長 10.6 幅 15.8 厚 5.1 重 1,074	ひん岩	扁平な礫、表面に擦痕、皿状に凹む。片面欠落
134 第71図 写図31	石皿	JQ－78	長 15.7 幅 14.1 厚 7.7 重 2,000	粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫側面欠損
135 第71図 写図31	石皿	JQ－78	長 16.3 幅 17.7 厚 4.6 重 1,800	ひん岩	扁平な礫、表裏面に擦痕、周縁部に敲打痕、片側欠損

写 真 図 版

1．調査区から子持山を望む（南から）

2．調査区から榛名山二ツ岳を望む（北東から）

3．重機による表土掘削作業風景（北西から）

4．自然科学分析サンプリング風景（北東から）

5．FP上面　1号竪穴住居掘方全景（西から）

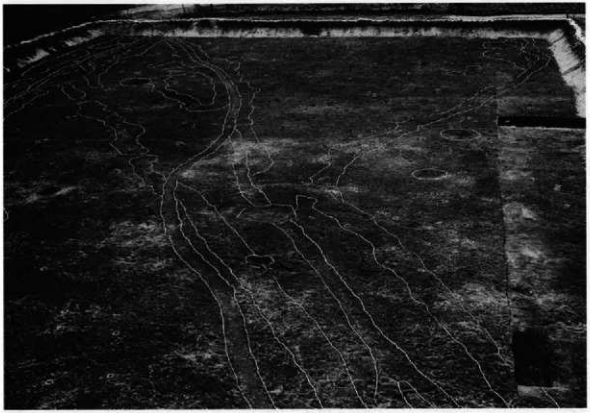
写真図版２

1．FP上面　1号竪穴状遺構遺物出土状況（南西から）

2．FP上面　2号竪穴状遺構全景（南から）

3．FP上面　3号竪穴状遺構遺物出土状況（北から）

4．FP除去作業風景（北東から）



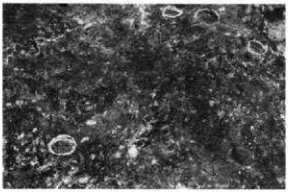
5．FP下面　全景（北から）

１．FP下面　畦状遺構近景（北西から）

２．FP下面　道と畦に残る馬蹄跡（南西から）

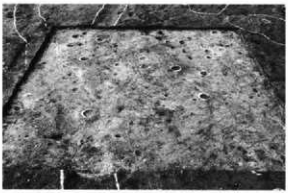
３．FP下面　FPによる１号道埋没状況（南東から）

４．FP下面　炭化材検出状況（南東から）

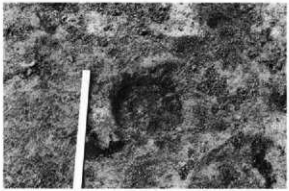


５．FP下面　植物痕検出状況（東から）

６．FP下面　２号立木痕凹み状況（北東から）



７．FA上面　グリッド掘り下げ状況（南から）



８．FA上面　上面からの馬蹄圧痕（南から）

写真図版４

１．FA上面　風倒木痕検出状況（南西から）

２．FA下面　グリッド配置状況（北から）

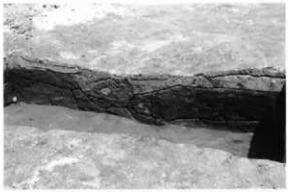
３．FA下面　遺構検出作業風景（南東から）

４．FA下面　黒色土に残る馬蹄跡（南東から）

５．FA下面　１号土坑土層断面（南から）

６．FA下面　１号土坑全景（南から）

７．FA下面　１号立木痕土層断面（南から）



８．FA下面　３号立木痕土層断面（南東から）

１．FA下面　７号立木痕土層断面（南から）

２．６面　231号土坑遺物出土状況（東から）

３．６面　231号土坑全景（南から）

４．６面　230号土坑遺物出土状況（南から）

５．６面　調査区南半　遺物出土状況（南東から）

６．６面　１号集石遺物出土状況（東から）

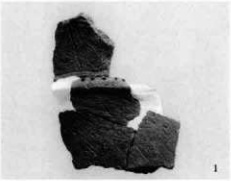
７．６面　１号配石遺物出土状況（北東から）

８．６面　調査区南半　土坑群検出状況（北から）

写真図版6

1号竪穴－1

1号竪穴－2


1

3号竪穴－3

231号土坑　3

231号土坑　2

4

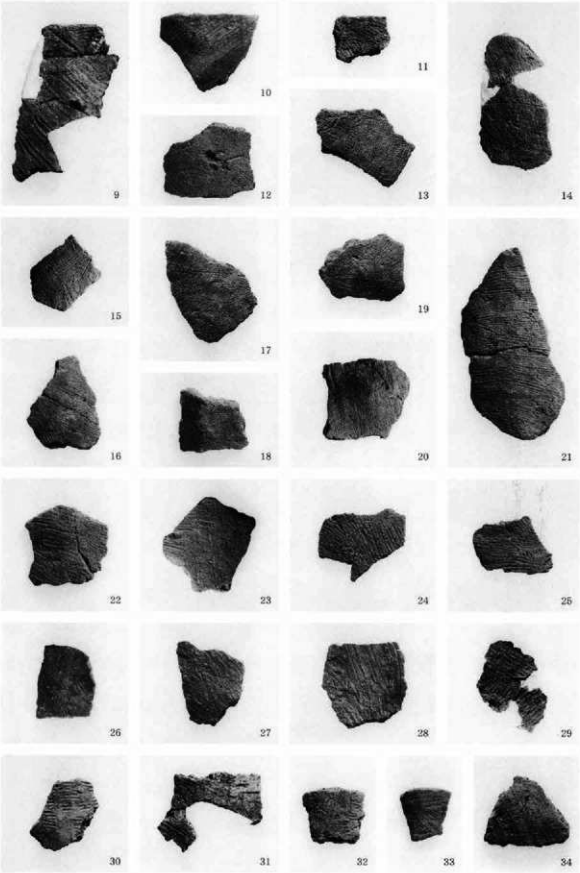
5

6

7

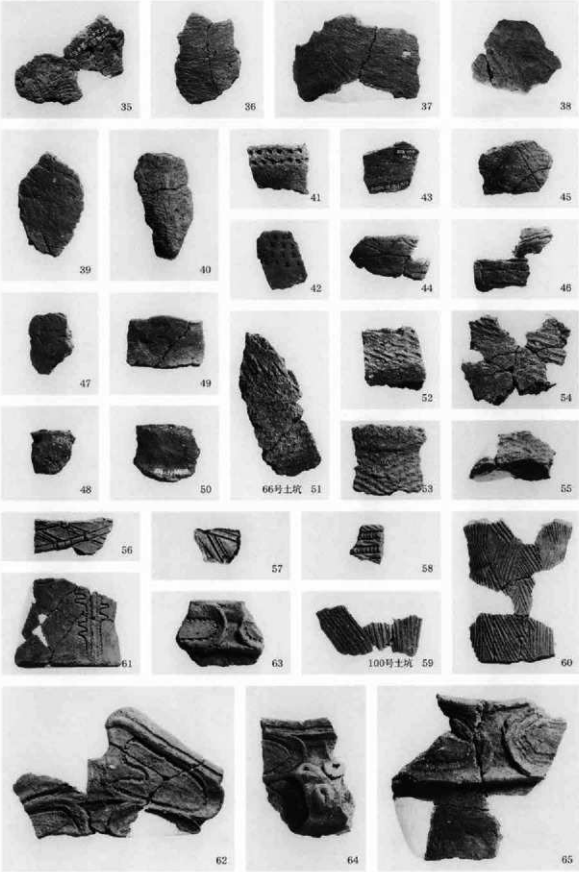
8

平安時代・縄文時代の土器（1）

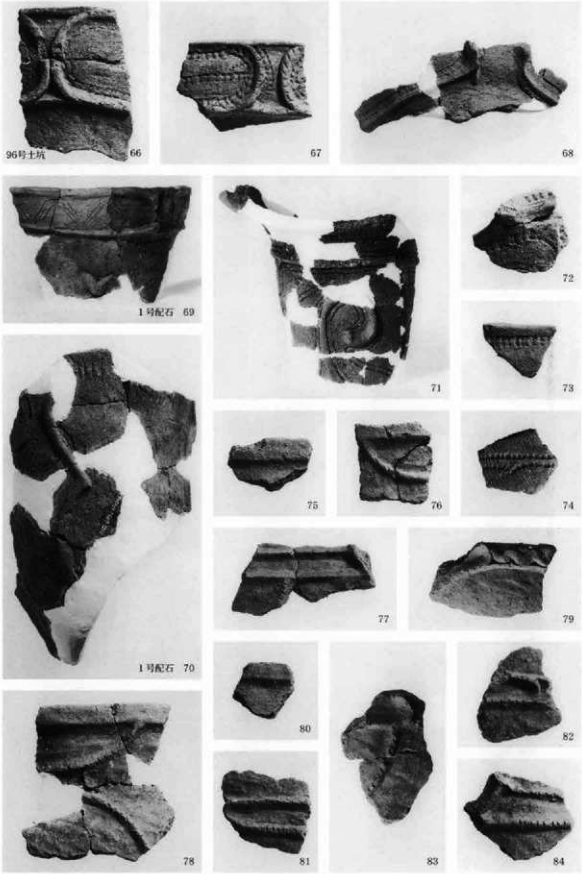

9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

縄文時代の土器（2）

写真図版８



縄文時代の土器（３）


96号土坑 66
67
68
1号配石 69
71
72
73
1号配石 70
75
76
74
77
79
80
82
78
81
83
84

縄文時代の土器（4）

写真図版10

180号土坑　85

86

87

88

91

89

93

90

1号配石　92

230号土坑　94

96

95

97

98

230号土坑　99

縄文時代の土器（5）

230号土坑　101

230号土坑　102

106

1号配石　109

100

230号土坑　104

103

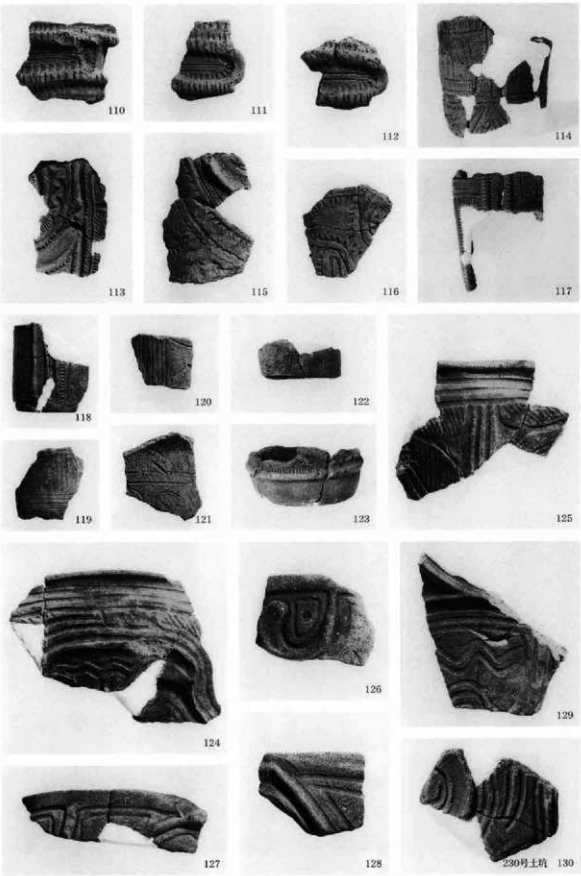
105

107

108

縄文時代の土器（6）

写真図版12



縄文時代の土器（7）

131

132

1号配石　133

135

134

136

230号土坑　137

138

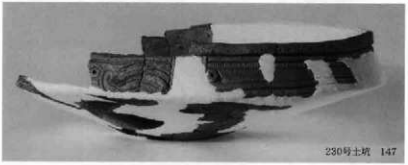
230号土坑　139

1号配石　140

141

230号土坑　143

142


230号土坑　147

縄文時代の土器（8）

写真図版14

230号土坑　144

145

146

148

150

151

153

149

152

230号土坑　154

230号土坑　155

230号土坑　156

157

159

194号土坑　160

158

194号土坑　161

201号土坑　162

163

164

165

縄文時代の土器（9）

166

167

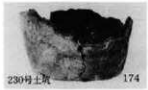
230号土坑 168

170

169

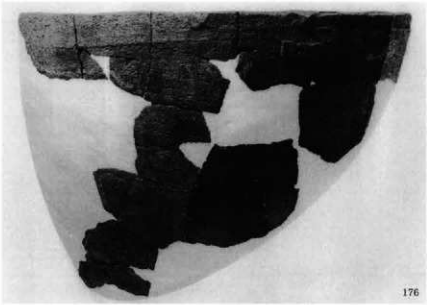
171

172


230号土坑 174

230号土坑 173

175


176

縄文時代の土器（10）

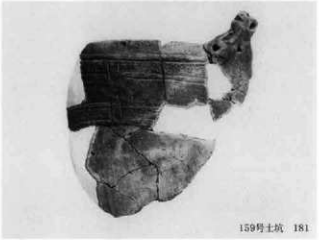
写真図版16

17号土坑　177

179

1号配石　178

1号配石　180



159号土坑　181

183

26号土坑　182

縄文時代の土器（11）

184

185

186

187

1号配石　188

189

1号配石　190

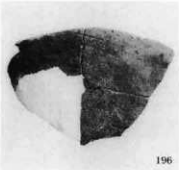
191

192

194

195

193

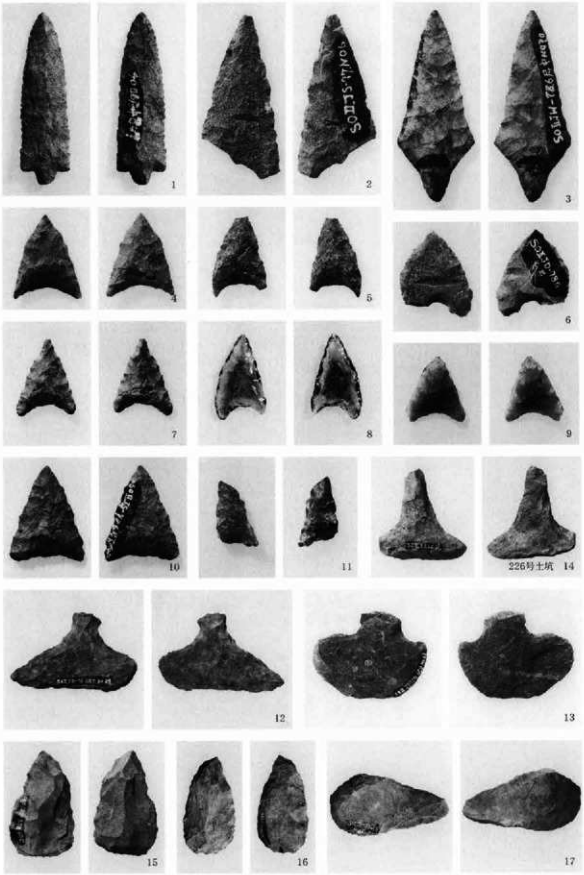

196

115号土坑　197

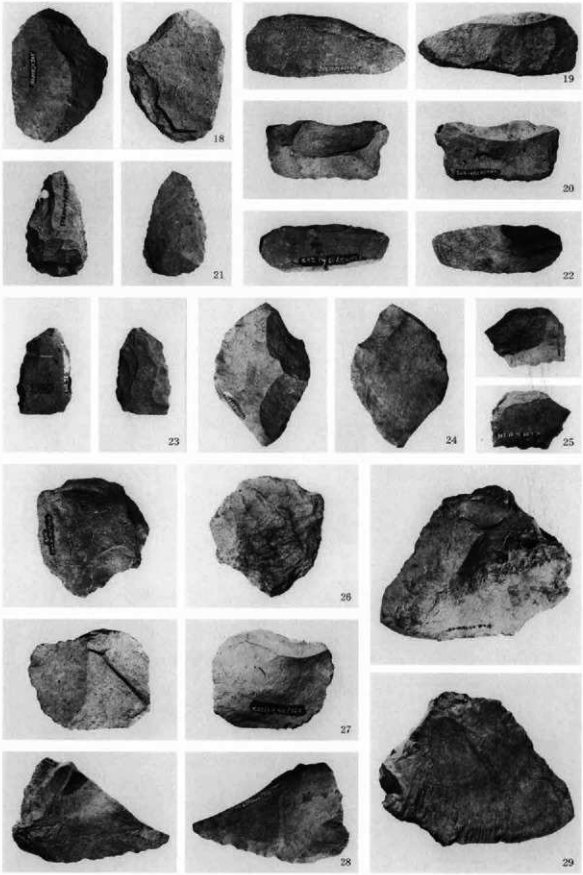
198

縄文時代の土器（12）

写真図版18

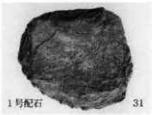


縄文時代の石器（1）



縄文時代の石器（2）

30



1号配石　31

32

33

230号土坑　34

35

36

37

38

230号土坑　40

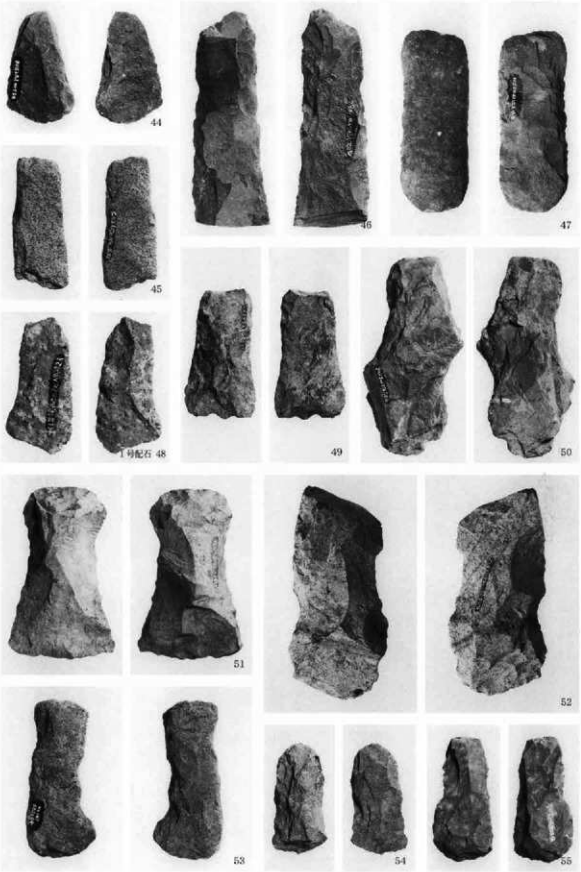
41

230号土坑　39

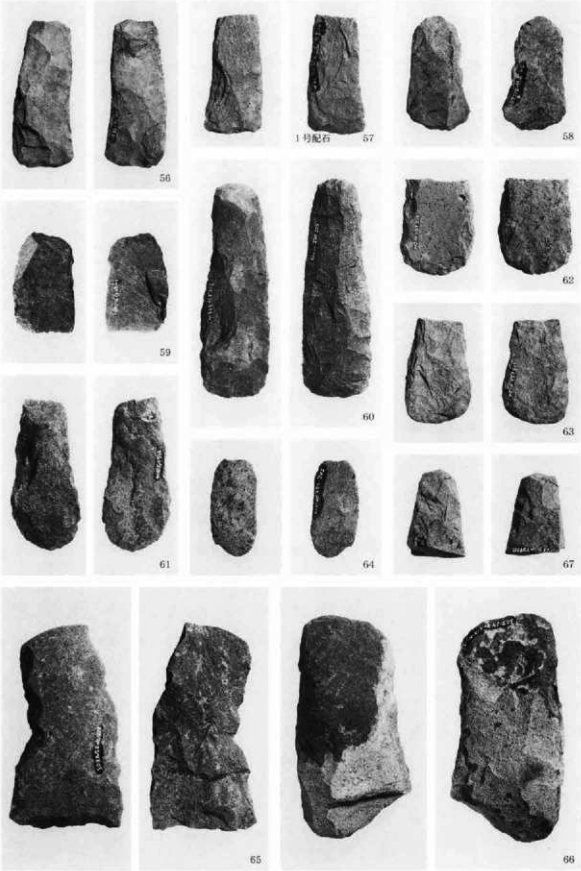
42

43

縄文時代の石器（3）



縄文時代の石器（4）



縄文時代の石器（5）

68

70

71

69

72

74

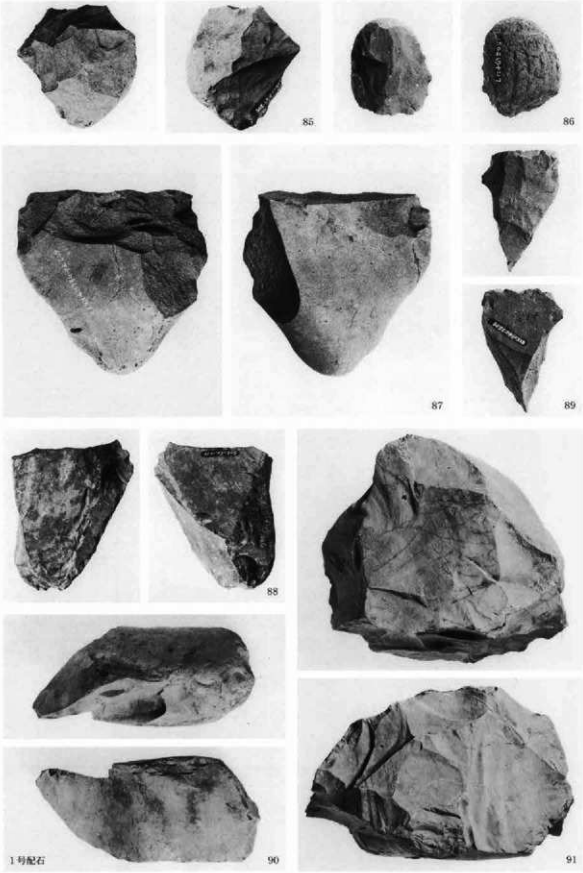
30号土坑　75

73

76

縄文時代の石器（6）

縄文時代の石器（7）



縄文時代の石器（8）

92

93

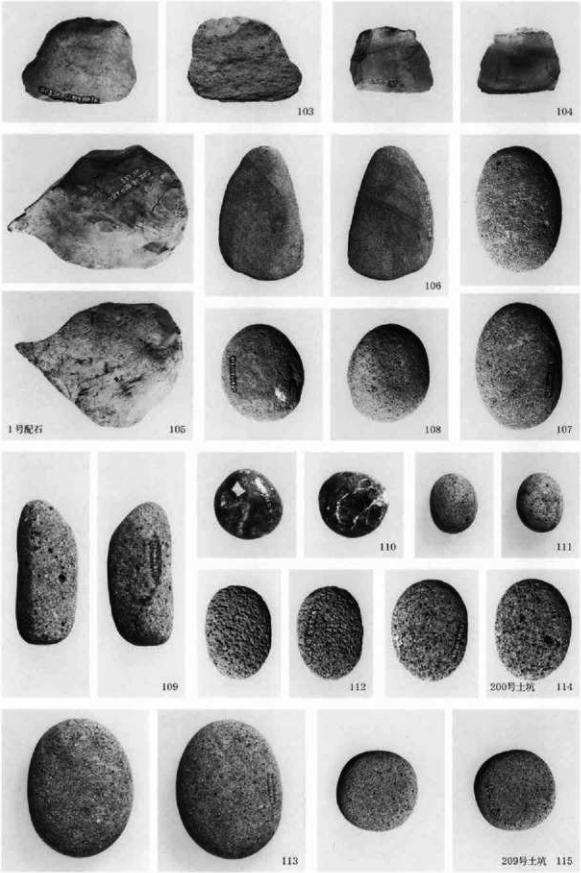
2号配石　94

95

96

縄文時代の石器（9）

縄文時代の石器（10）


103
104
106
1号配石
105
108
107
109
110
111
112
200号土坑
114
113
209号土坑
115

縄文時代の石器（11）

216号土坑　116

117

118

1号配石　120

121

119

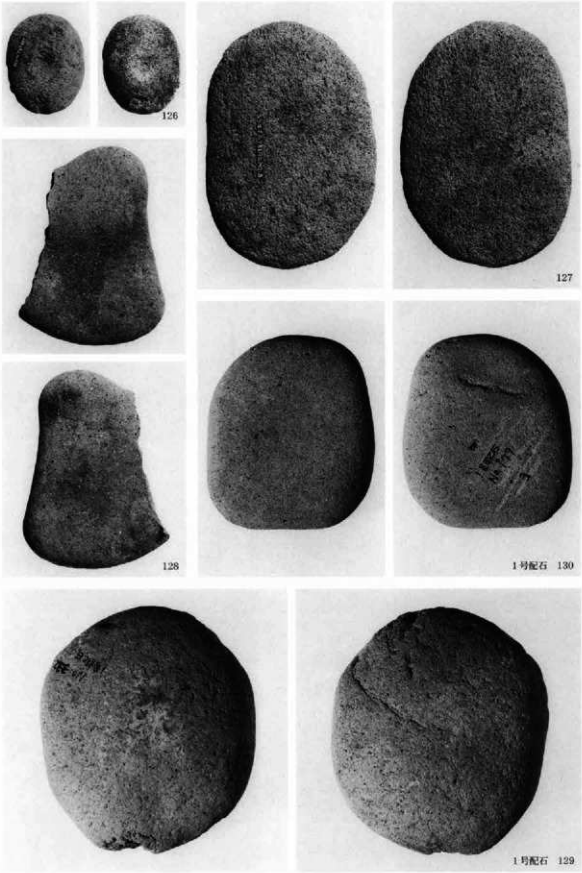
123

122

124

1号配石　125

縄文時代の石器（12）



縄文時代の石器（13）

131

133

132

134

135

縄文時代の石器（14）

報告書抄録

フリガナ	シロイオオミヤニイセキ
書名	白井大宮Ⅱ遺跡
副書名	渋川工業用水道天目乾線床増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第301集
編著者名	根岸 仁　山口逸弘　小山友孝　橋本 淳
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 Tel 0279-52-2511　Fax 0279-52-2904
発行年月日	2002年3月26日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
白井大宮Ⅱ遺跡 シロイオオミヤニイセキ	北群馬郡 キタグンマグン 子持村大字 コモチムラオオアザ 白井 シロイ	10341 遺跡番号	36°30′38″ 139°01′18″ (日本測地系)	19990701 ～ 19991031	1,360㎡	群馬県企業局渋川工業用水道天目乾線床増設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白井大宮Ⅱ遺跡	居住 生産	平安時代 古墳時代 縄文時代	竪穴住居，竪穴状遺構 畦状遺構，馬蹄跡，土坑，倒木痕， 立木痕 配石遺構，集石土坑，集石，土坑	須恵器，土師器 炭化材 縄文土器，石器	

群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第301集

白井大宮Ⅱ遺跡

渋川工業用水道天日乾燥床増設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年（2002年）3月25日　印刷
平成14年（2002年）3月26日　発行

編集/発行　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電　話　0279（52）2511（代表）

ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／上毎印刷工業株式会社